明治四十一年一月一日發行（毎月一回一日發行）

女鑑



第十八年第一號

素顔は常に何を以て美しくするか？

日本第一のクラブ洗粉は舶来石鹸よりも秀でたる文明の化粧品にして美身術に妙ある爲高評頗る盛なり



クラブの如き洗粉を以て其美を増す

クラブは三越呉服店を
始め各化粧品店にあり

冬と化粧

美人となる秘法

近來化粧の方法が盛んに研究せられる樣になりましたが、多くは白粉等の研究のみでして、どふしたならば美くしい化粧が出來るかと云ふ事を忘れられて居る有樣です、一體化粧の上から見れば、白粉は枝であつて其の下に根の物があるのです、つまり白粉を美くしくつけるには先づ完全な皮膚でなくてはなりませぬ、若しきたない皮膚に美れいな仕粧を仕樣としますのは、丁度ヨゴレタ「ヌメ」へ立派な畫を畫かふとする如く、到底不可能の事で御座います、故に美つくしい化粧をなさりたい方は、まづ第一に皮膚を良くしなければなりません、之は極く譯もない事で、即ち常にローヤル水を用ゐて後白粉を御つけになる事を御忘れにならなければ、自然に好い皮膚と成つて美るはしい化粧が出來ます。

寒氣日増しに酷しく、今後人の皮膚はやゝもすれば荒れ易いのでありますゆゑ、婦人方は固より殿方も常に注意して夫を豫防せねばなりません、夫れにはローヤル水を御使になるに限ります。

ローヤル水は此の外種々の特色がありまして、例ば脂肪分の多い爲めニキビの出來る人は、洗面の後にローヤル水を御使になれば非常の效があります、又脂肪分の少ない爲め皮膚のアレる方には適當の脂肪分を與へ、皮膚の營養を增す等、他の化粧水では見る事の出來ない多の效があります、故に世間でローヤル水を稱して萬能化粧水と申しますは偶然で御座いません。

◉定價　特大　一圓　大　五十錢　中　卅五錢　小　廿錢

郵税は十二錢販賣店は全國至る處の化粧品店洋品店小間物店賣藥店に在ります。

發賣元は東京銀座一丁目佐々木商店です。

女鑑　第十八年第壹號

目次

真正 舶來 高等 化粧

クイーン白粉(おしろい)
クイーン水

◎本品ハ我同盟國ヨリ輸入セル最新最良ノ原料ニ貴重ナル芳香ヲ加ヘ精製シタル化粧品ニテ先祖傳來的ノ陳腐ナル品ニアラズ壹度御試用ノ榮ヲ賜ラン事ヲ

◎取次販賣ハ至ル所ノ小間物化粧品店ニアリ若シ品切ナレバ直接ニ御注文ヲ乞フ



東京日本橋區新和泉町

本舗

三井花陽堂

本品は忝くも

皇后陛下

東京勸業博覽會場へ御行啓の際献上し奉り即時御嘉納の光榮を得たり

内務省衛生試驗所檢査濟

ムスク香油

壹瓶 五十錢



一 本品は最良の植物性原油を精製し更に毛髪の攝養上肝要なる加工を施し尙優等なる芳香を配合せしものなれば他に比類なき模範的香油であります

一 本品は一度び御用ひあれば乍ち髪の毛さらりとし艶黑く麗はしく其上優美なる(バイオレット)の芳香を保ち紳士淑女の一日も缺く事のできぬ香油であります

一 本品は毛髪の發育を大切になさる御婦人は申に及ばず男子方の散髪用として無比の佳品で有升

一 本品は市内到る處賣藥小間物化粧品店にて販賣致し居升御最寄にて御求めを乞ふ

○若し品切等の節は端書にて本舗へ御注文あれば東京市内に限り壹瓶以上何程にても直ちに御屆け申上べく候

ムスク香水
ホーサン石鹼

本舗 東京日本橋區本石町四丁目

松澤常吉化粧品部

年始客



恭賀新年

●於米國聖路易萬國大博覽會名譽最高大賞受領●

最上醤油

山十印

千葉縣銚子町
醸造元 岩崎重次郎

東京南新堀一丁目
發賣元 同支店（電話浪花三三五番）

濃厚 甘美 風多 樽堅

日本一手
發賣元



東京牛込
山本玉川堂

○プレスト洗粉は品質純良にして色を白くし皮膚を滑にし光澤を出す

○プレスト洗粉は普通の洗粉の如く多量に用ふ可からず壹袋を以て六七回の入浴に適す

定價
小袋入貳錢　大袋入拾錢
小罐入七錢　大罐入拾五錢

女鑑の愛讀者と國民新聞の購讀

社頭松



向島水神社

井伊直方君撮影

佐藤男爵の家庭



男爵 佐藤博士



令夫人 静子君



令嗣 昇君



令孫 文子君（故恒久學士令孃）



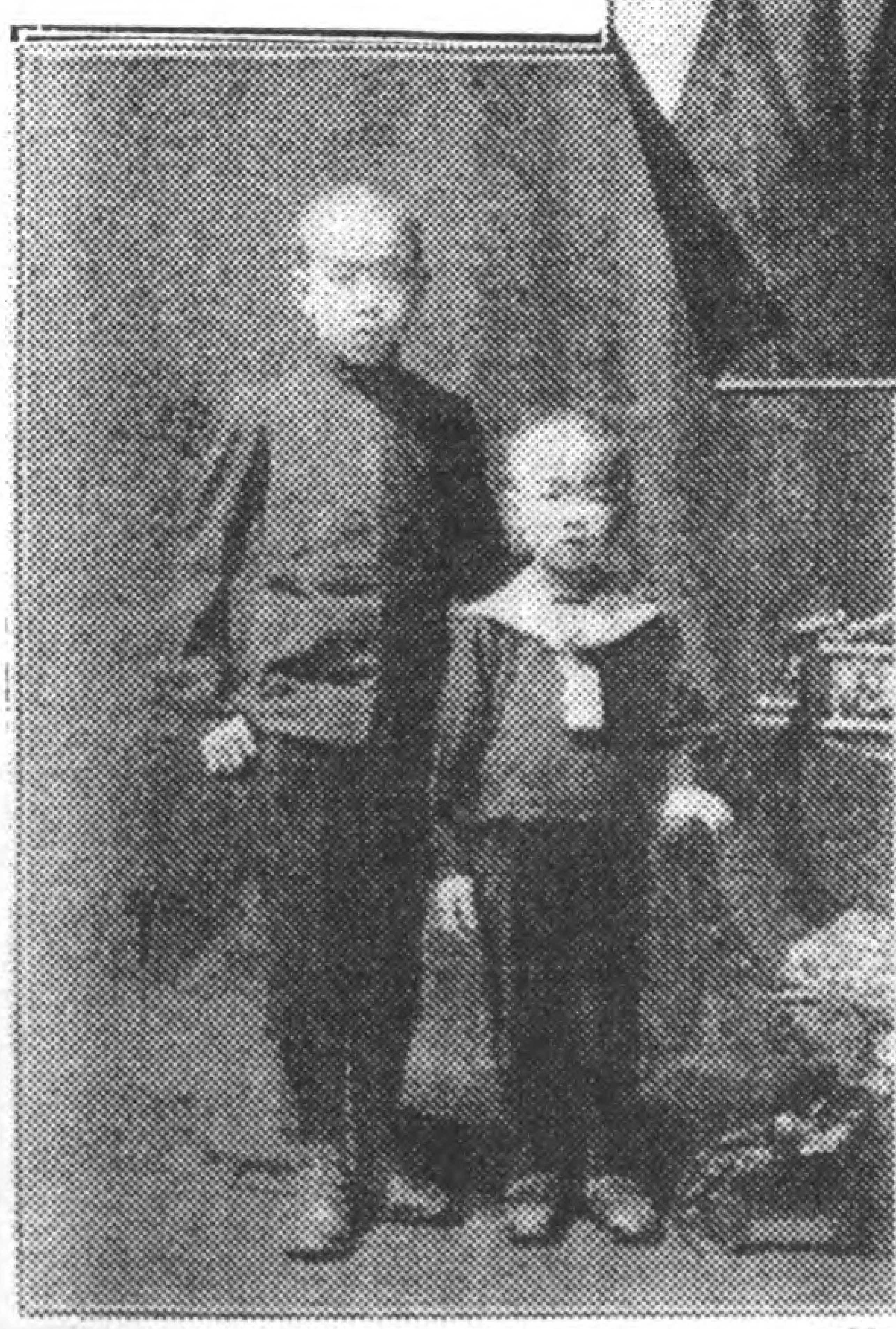
令嗣夫人 俊子君

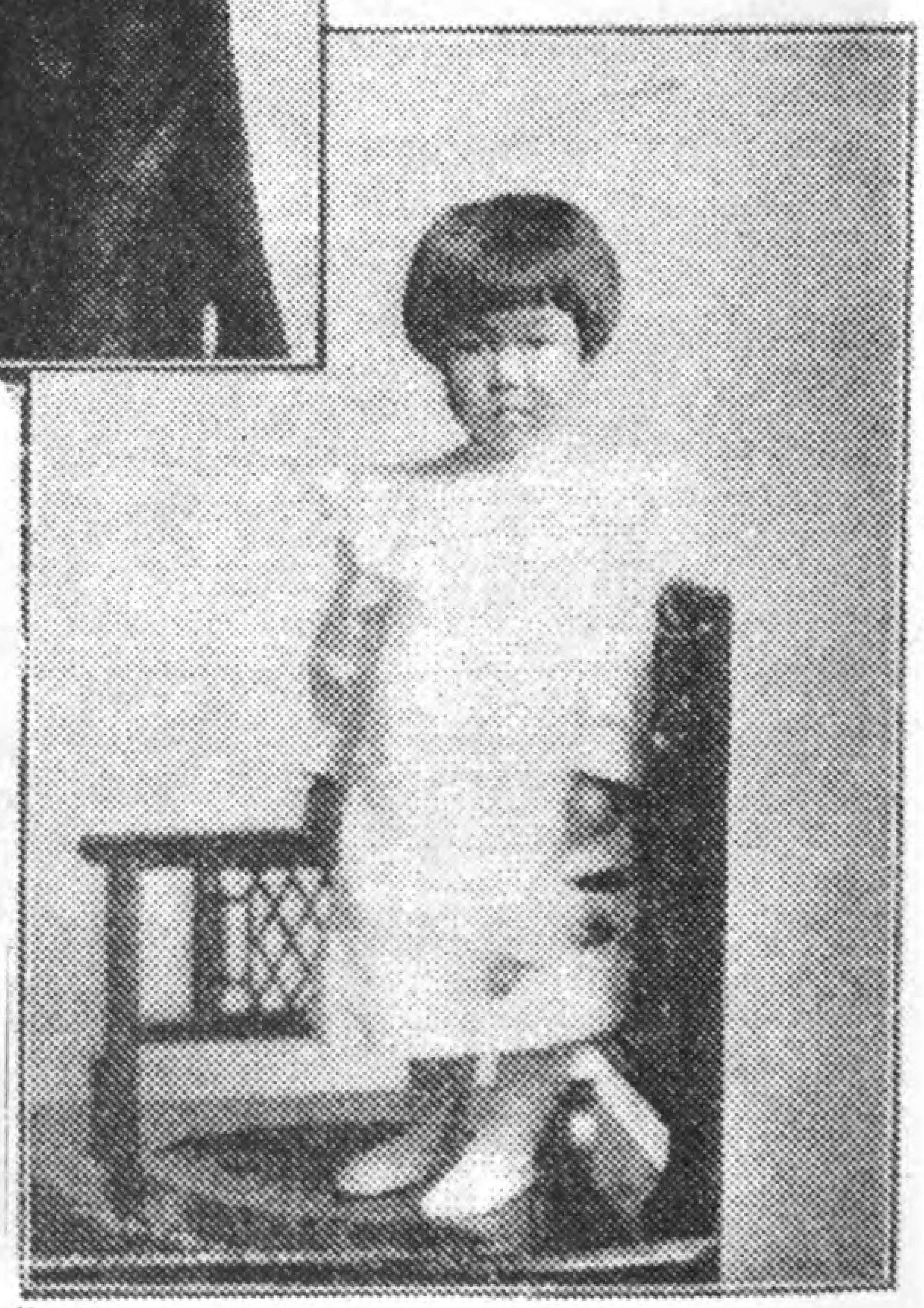
金杉博士の家庭


金杉醫學博士


令夫人 松子君


母堂 はい子君


令息恒彌君 台三君


令嬢 浪子君

松平伯爵一家



中央伯爵松平直之君

第貳拾四回年度報告

貸借對照表

借方（負債に屬する分）

一 株金	二、〇〇〇、〇〇〇円・〇〇〇
一 諸積立金	二五五、一九二・二〇〇
一 預金及保信金	三七、五八〇・五三六
一 支拂手形及未拂金	壹、三七五、四四〇・六一〇
一 非常特別税金	一一四、九五八・二九〇
一 前季繰越金	二九、九五八・九〇六
一 當季利益金	二二六、五二一・二二〇
合計	四、〇三九、六五一・七六二

貸方（資産ニ屬スル分）

一 新株未拂込金	七五〇、〇〇〇円・〇〇〇
一 不動産機械及什器	壹、〇八六、七九一・六二三
一 需用品及備品在高	四九、八〇七・五〇二
一 原料仕掛物及屑物在高	壹、四七五、八六一・三二〇
一 製品及製品送荷在高	七八、一三三・五九〇
一 約定済製品在高	八一、九八二・八四〇
一 得意先未收入金及假拂金	一九六、三五五・五二七
一 職工貸金	一九、三一四・四二〇
一 増設工場假拂金	二五四、〇四三・三四〇
一 銀行當座預金及現金	四七、三六一・六〇〇
合計	四、〇三九、六五一・七六二

利益金處分

一 金貳拾貳萬六千五百貳拾壹圓貳拾貳錢也　當半季利益金

一 金貳萬九千九百五拾八圓九拾錢六厘　前季より繰越金

計金貳拾五萬六千四百八拾圓拾貳錢六厘

内

金貳萬五千九百八拾九圓貳拾九錢七厘　水害費償却

金五萬圓也　建物及器械代償却

金壹萬貳千圓也　法定準備金

金壹萬貳千圓也　役員賞與金

金六萬圓也（舊株壹株ニ付金參圓即年壹割貳分）　株主配當金

金壹萬五千圓也（新株壹株ニ付金七拾五錢即年壹割貳分）　同上

金五萬圓也（舊株壹株ニ付金貳圓五拾錢即年壹割）　株主特別配當金

金壹萬二千五百圓也（新株壹株ニ付金六十貳錢五厘即年壹割）　同上

金壹萬八千九百九拾圓八拾貳錢九厘　次季へ繰越金

〆如高

右之通り候也

明治四十年十二月

東京モスリン紡織株式會社

取締役會長　杉村甚兵衛

專務取締役　端善次郎

取締役　山崎作次郎

右檢査候處相違無之候也

監査役　坂本金之助

監査役　人見新助

監査役　金子良吉

追て取締役幷に監査役任期滿了ニ付改選候處再選重任候也



新年の御壽申し納め候



▲先づ御覽ん遊ばせ!!!

世に趣味有る繪葉書の供給者として東京芝はがき堂有るを必ず記憶したまへや!

内外美術繪葉書

●●●●新版出來

繪葉書とし云へる繪葉書より千紫萬紅集めて諸子の撰むに任せ候

▲英國製。●●●新荷到着……一枚七錢均一

▲色彩精巧！ ▲案諧斬新！ 實にサ書界の白眉！

▲獨逸製新着 一枚三錢均一

これは又破格の大安賣、一度はお試を願ひ升、但し拾枚以上に願升

▲舶來ヱハガキ福袋 一袋金五錢

どれを出しても八錢から二十錢迄での品、運は天に福は此の袋に！

▲獨逸特製高等アルバム 送料四錢

▲價格低廉！百枚挾一冊四拾五錢

▲裝釘堅牢！貳百枚一冊七拾五錢

▲見よ。。!! 斯界の革命軍を以つて鳴る小店が苦心慘憺の編輯に成り繪葉書愛好者の好資料たる高評を博す詳細の

増補四版 營業目錄

無代進呈す御入用の君は往復葉書にて申込呈す

東京市芝區田村町
振替口座六七四六……

はがき堂

ノートペーパー

舶來書簡箋

拾組化粧箱入 金四拾錢（送料貳錢）

二十世紀交際場裡の要具として大高評を博す其の精巧無比如何に此のハイカラサ加減！切に愛用、顧滴附答

キリヌキカード

英國製新荷着

大判壹枚 金拾貳錢（送料貳錢）

今回着荷殊に精巧を極め、種類は、子供、美人、花物、果物、動物、其の他數十種切御下命を願上候

●其他繪葉書に關する全般の業務は品

▲注意●質に價格に思つて人後に落ちず候!!

内外繪葉書問屋

書損じ



鳩山博士の家庭



令息　郎君　秀夫君

令夫人春子君　鳩山法學博士

松井農學博士の家庭



滿紙珍奇の寫眞版を挿入せり畫報兼備

口繪澤山

婦人世界

記事豐富

正月元日發行 毎月一回 三卷 第壹號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 六冊分郵税共九十錢十二冊一圓七十五錢

◎男女結婚論　村井弦齋

結婚は一代の運命を左右する鍵なり幸福も之に依つて來る災禍も之に依つて生じ愉快なる生活を送らんとする者は之れを讀め男女の結婚を論ずること縱横痛快淋漓

•活文字•

▲九十六歳の長壽を保てる我が祖母の養生法　星常子

▲私の見たる鍋島侯爵夫人　鳩山春子　▲私の日常生活　跡見花蹊

▲二十年日記を附て得たる利益　加藤博士夫人　▲その一夜　廣津柳浪

▲私の感心せる歴史上の婦人　三輪田眞佐子　▲野口ゆか子評論

◎面白く誰にも出來る新年大懸賞珍附録(千圓)

△賞品 婦人用懷中金時計△婦人用懷中銀時計△帶側△婦人用絹張洋傘 寶石入金指輪△特許蒸氣で△大島絣△金帶止△手風琴その他

•活教訓•

▲女學生の文章　西田敬止　▲ヒステリー症全治實驗　土田博士

▲家庭の要する婦人　嘉悦孝子　▲小兒の營養法　加藤博士

▲光明ある生活　棚橋絢子　▲在學中の娘に與へたる父の手紙

▲牡蠣のお料理　弦齋夫人　▲懸賞 名文選擇△家庭重寶 文字合せ△文藝笑話

◎斯くの如き女學生は決して成業せず……白露生

女學生の欠點二十を擧げてその急所を突く鋭利なる觀察を行るに流麗なる文章を以てす之を讀んで女學生はその欠點を改め父兄は子女の躾方に發明する所わらん

東京京橋南紺屋町十二　實業之日本社　(郵便振替貯金口座參貳六番)　(電話新橋八七四番)　賣捌全國書店



閨秀畫家

榊原蕉園女史



三室戸子爵令嬢 玉蘭女史



中山彩畝女史





横田小漣女史筆

閨秀畫家





中島春燕女史





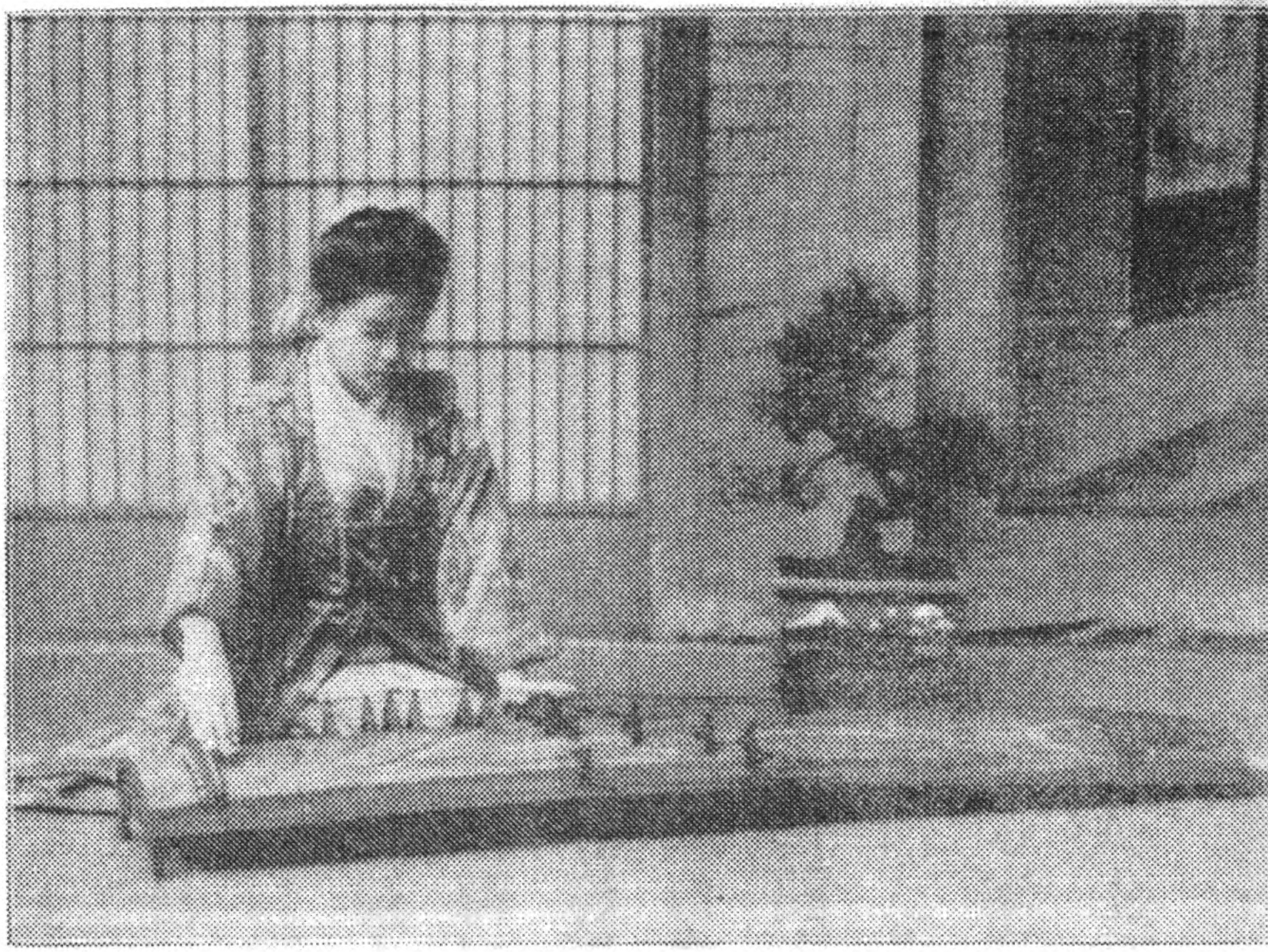
幅田潮月女史



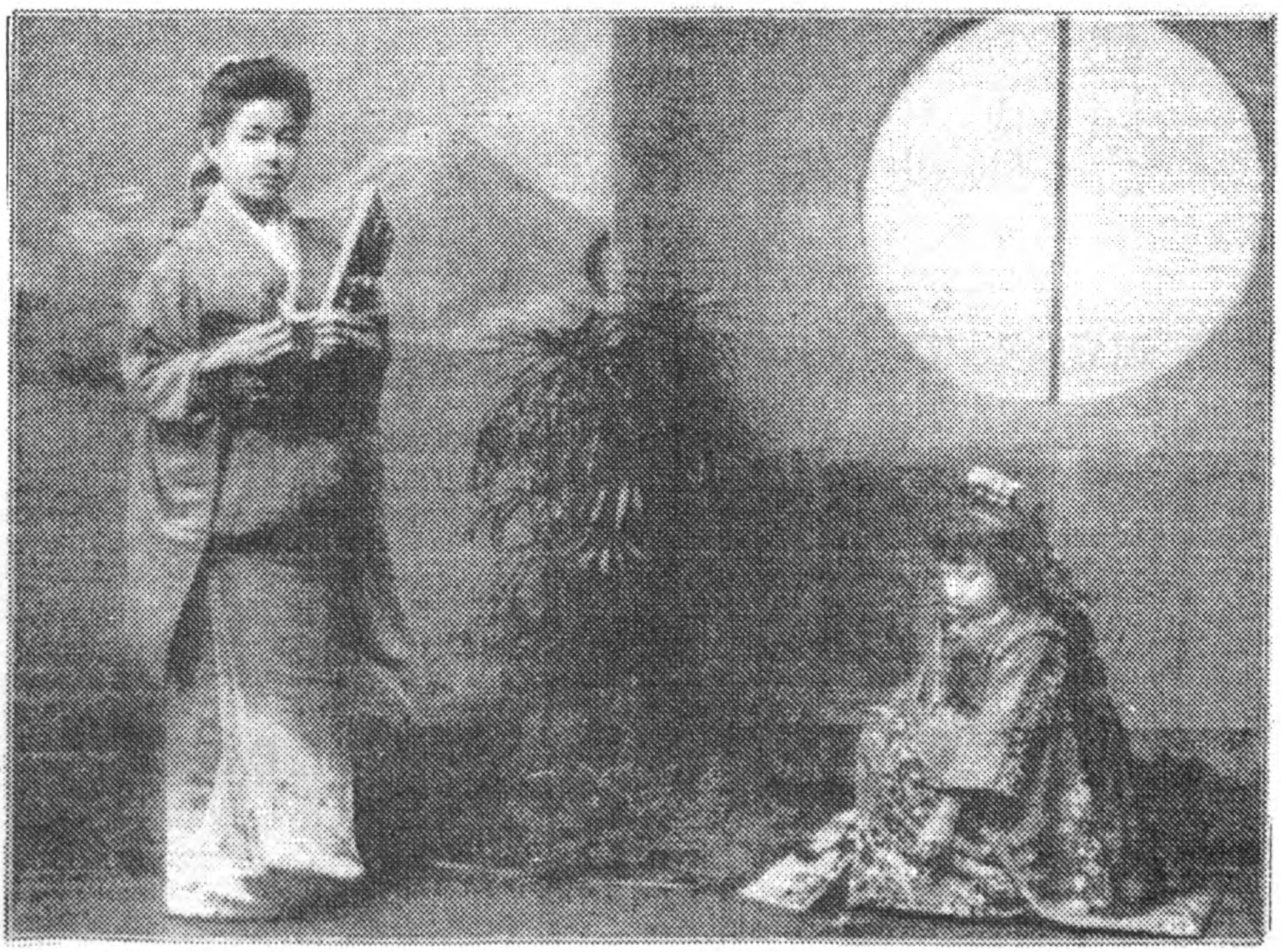


秋山若菜女史

春の遊



森軍醫介孃　茂枝子君



右の羽子を拾へるは　四方　近子君



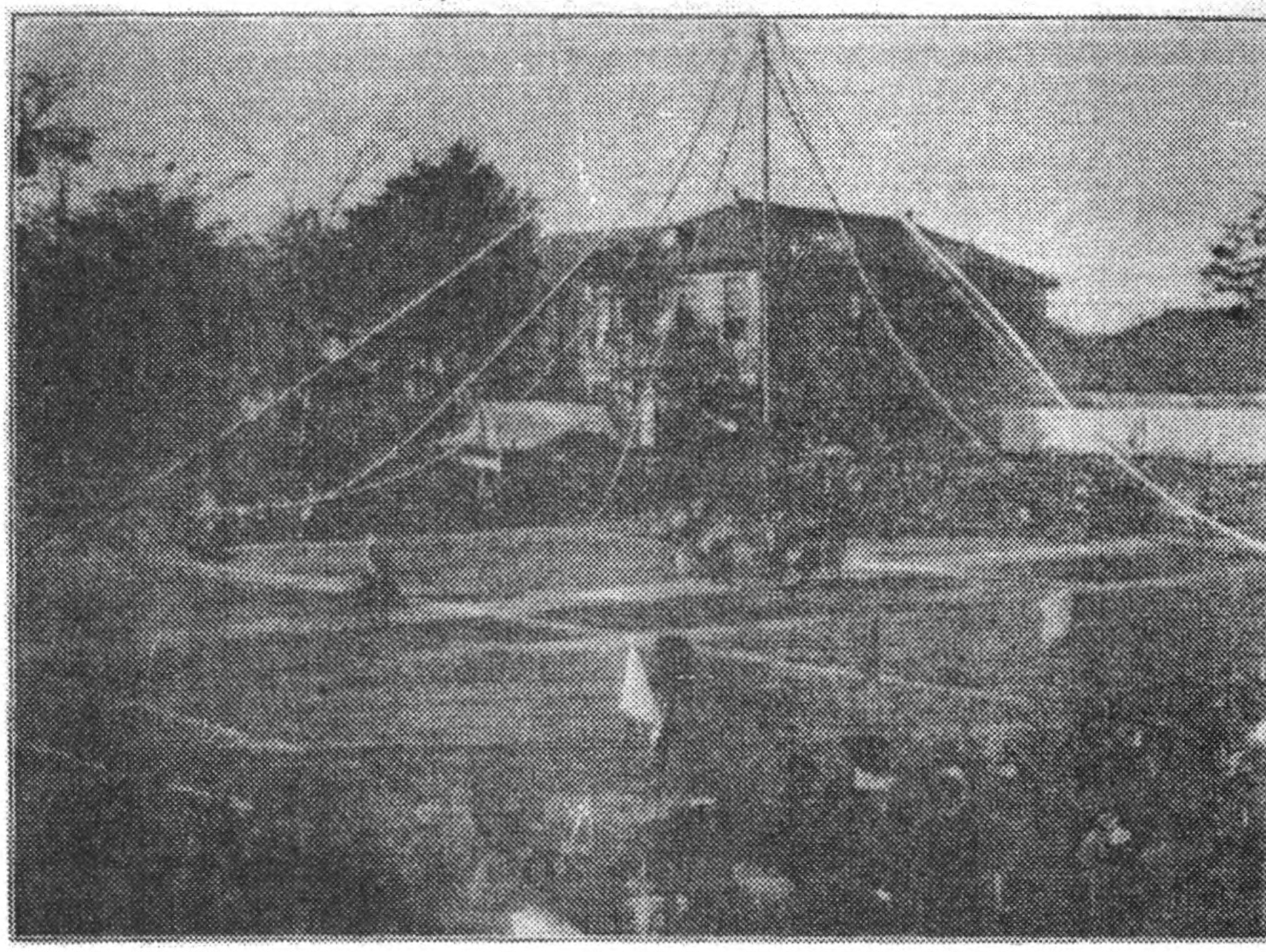
A·BEAUTIFUL·HAND·
小波家庭口演十種 価八十五銭 郵税八銭
宇野家庭西洋料理 価九十五銭 郵税八銭
小波 女子處生 婦とこゝろ鏡 価五十銭 郵税六銭
赤堀家庭十二ヶ月料理 全三冊 価各五十銭 郵税各八銭
鶯堂女子手紙文 価四十五銭 郵税八銭
森本家庭編物全書 価八十銭 郵税八銭
実験和洋菓子製造法 価六十五銭
矯菓
東京日本橋 大倉書店
振替貯金口座二三八番

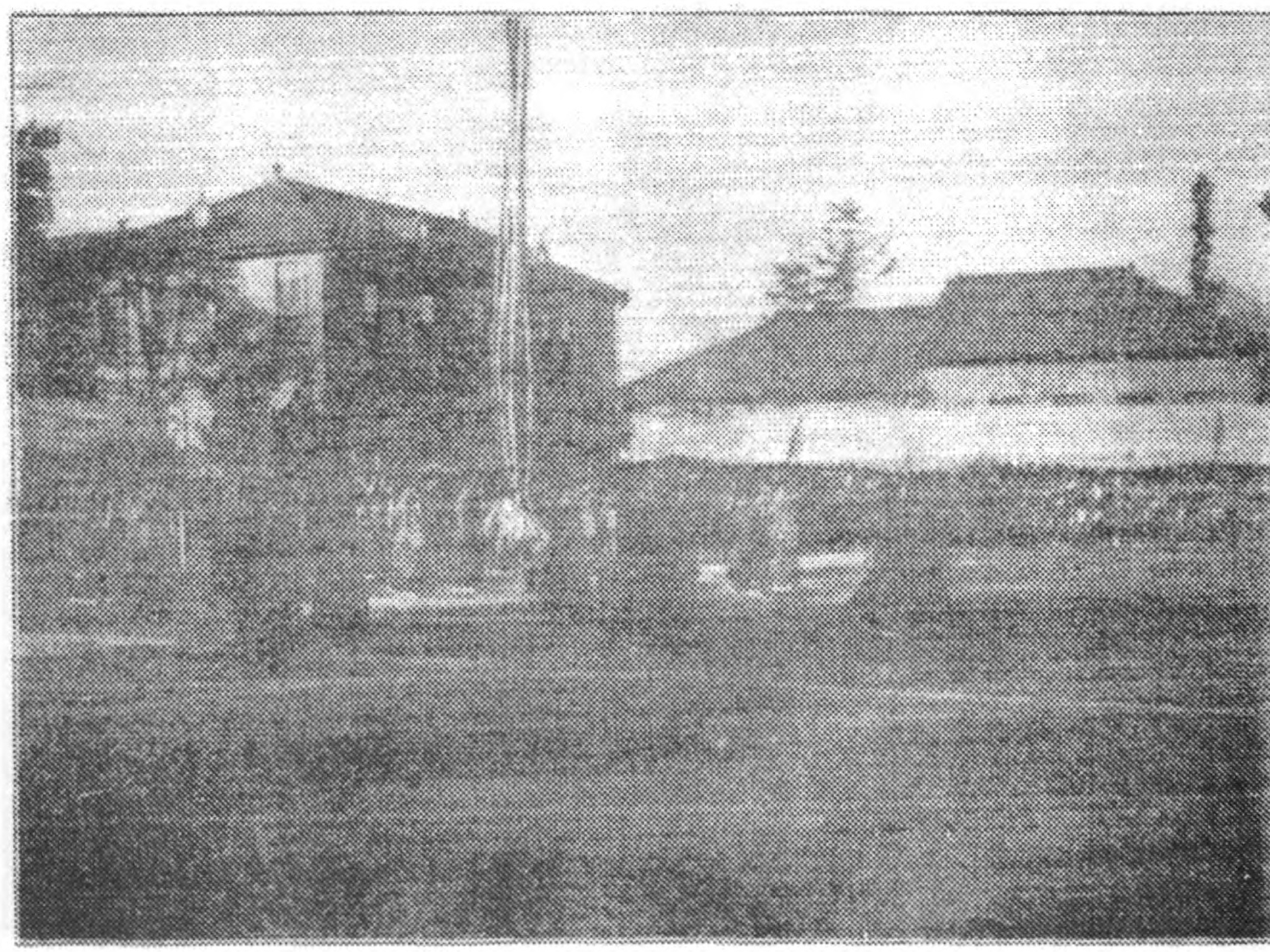
辨天社頭の松



上野香畝君撮影

優美なる遊戯





日本女子大學運動會（二圖）

秋葉社頭の松





井伊直方君撮影

懸賞字數あて

明治四十一年二月五日發行、官報第三頁の字數（欄外の文字あれば、それをも算入す）を言當てたるものに、左の方法により賞品を呈す、

(一)もし各解答ともその字數に的中せざることあれば、解答者中よりその數に近きものを第一等とし、以下等級を定む、例へば五十五の正解なる場合に五十四と、五十六の二者あれば、數の多き五十六を一とし、五十四を二とするが如し。

(二)又正解者の數多き時は、抽籤によつて等級を定む。

(三)〆切は二月三日中に當編輯局に着せるもの、解答用箋は本頁に印刷せる切とり線内に認むべし、抽籤の場合は、二月七日午後一時より本社編輯局に於て之を行ふ、二月五日の官報を見てその字數の當りたる人は、便宜立會はれたし。

賞品

第一等 純金指環

第二等 女持懐中時計

第三等 上等女袴

第四等 七寶女持上等洋傘

第五等 女ショール

第六等 花色裏地一反

第七等 女駒下駄

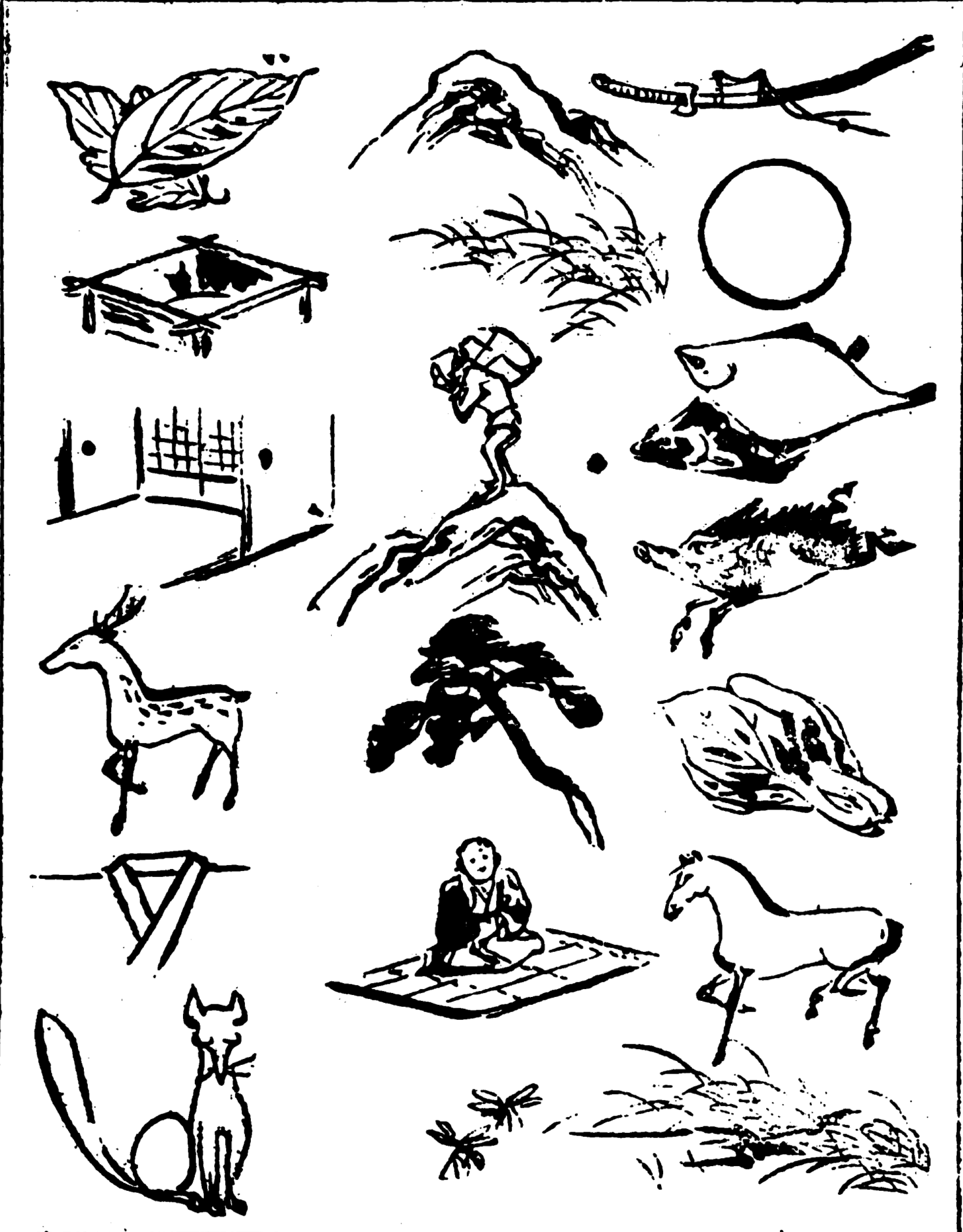
第八等 束髪用櫛簪

第九等 羽織紐

第十等より第六十等まで『女子本分』

（第六十一等より第三百等迄 上等繪葉書壹組）

判じ繪



上の繪を判じ當てたる方に、左の方法により賞品を呈す。

〆切一月十五日

一等　勸業貯蓄債券

二等　編物模様圖案

三等　刺繍教科書

右の外解當者三百人まで繪葉書一組を呈す

解答者中より抽籤にて等級を定む、抽籤は一月十七日午後一時本社編輯局にて行ふ、解答者は便宜立會はれたし

懸賞解答用箋

字數あて

數字　字

字

住所　姓名

判じ繪

住所　姓名



新年を迎ふる家庭への注文

文學士　村上辰午郎

古へより、一日の計は朝に在り、一年の計は元日に在りと言傳へられてゐるが、之は單に朝や元日のみに限られたるものでは無くして始終朝や元日の心持を以て世の中を渡れと云ふ事であるやうに思はれる、例へば、朝といふものは誠に精神が爽快なるもので、些の餘念も無いもので、又正月と云ふものは年の始めで、世俗の昨夜の鬼が禮に來たと云ふやうに、是また兎の毛ほども世間の齷齪に絡まるゝと云ふ事は無くして、實に快樂の心を以て世を渡るのである。

併しながら予は只此の言が、一の訓誨として或意味に用ゐられつ

三益月玉蘭女史筆

ゝあると同時に、教育の方面より見來る時には頗る不得要領に終つて居る事を慨くのである、云ふ迄も無く、正月には正月の生活風があるから、誰しも心は邪惡に遠かるのである、即ち正月は、靑年の男女が多く集りて、種々なる慰み事を爲して愉快に遊ぶのである、斯樣の事は此世上に於て最も必要なる事である、けれども我日本の狀態として、正月を除くの外は總て是等の遊戯を缺くのみならず、我國の家庭では、經濟上その他の點よりして常に之は行はしむると云ふ事は難事である、とは云ふものゝ、人類と云ふものは、强ち働くのみが要では無い、働きたる後には必ず身心を慰籍すべき所の機關を要求するのである、故に全體の社會と云ふものは、心を此所に措かねばならぬのである、即ち宗教的に娛樂的のものゝ設備を要するので、その種類は一二にして止まらぬのであるが、苟くも家庭に此の設備が在り



さへすれば、今日尙ほ青年男女の間に行はるゝ所の惡口などと云ふものは根絶する事が出來るのである、如何も現今白晝恬として人の影言が流行するのは、家庭に此の設備が無いからであらうと考へる。

英國の家庭

へ入つて見ると、青年の女子が澤山集る事は、決して珍らしく無い、併し幾ら大勢集つても彼の國の風習として、忠告でもすると云ふ場合は兎も角、その他は如何なる場合と雖も、決して第三者に對する影言などを口にする者は無い、否、之を口にすべきものでは無い、話の種とすべからざるものである、と云ふよりも寧ろ互に愼しむものであると心得て居るのみならず、所謂娛樂的の機關が備はつて居て、之を以て



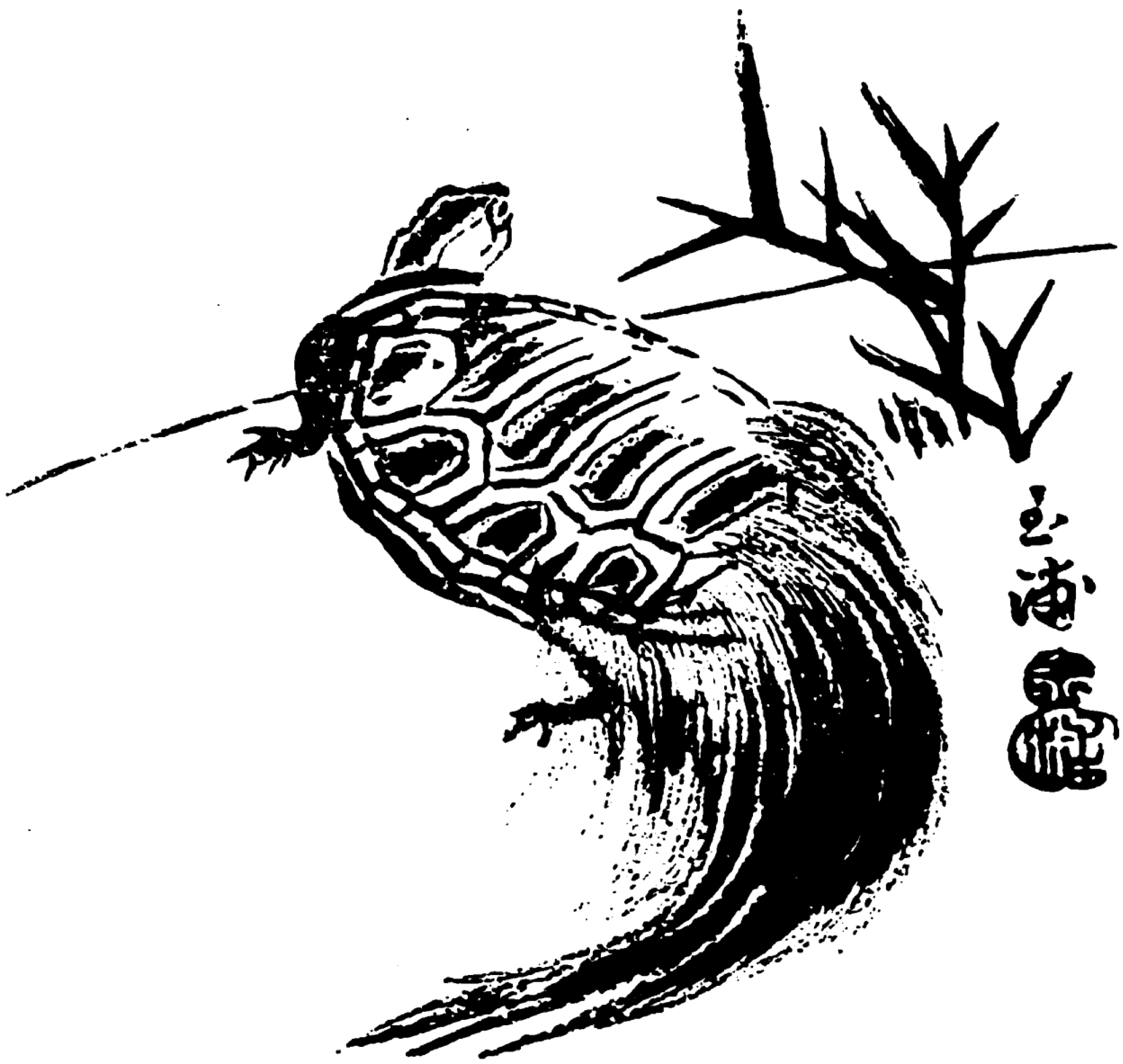
黑澤彩江女史筆

娯樂を取つて居るから、少しも其間に他人の影響を饒舌て居る餘地が無いのである、彼の國に於ては、此く具體的に家庭上および社會上に娯樂的の設備が整つて居るから、縱ひ學校の寄宿舍といへども之を愉快にするのである。

娯樂なき爲起る弊害

田中玉浦女史筆

けれども我國に於ては、家庭その他に於ても概して此の設備が無い、最も或少數の部分には之を認め無いでは無いが、それは殆んど曉天の星の如きもので十中の九分九厘までは無いのみならず、若し之を備ふる時は、却つて娯樂を爲す間に弊害を産むものであると認めて居る者もあるけれども、之は杞人の憂で遂には之を一掃する事が出來るのである、併し現今の場合では、女子同士が集りても其等娯樂的のものが無いのみならず、別に談話の種も澤山持合せが無いから、自然談話の範圍



が狭くなる、所謂話の種が身代限となるので、遂には友達の事に傾くのであるが、如何か之は改良せねばならぬのである、その改良の第一着は各自の家庭に娯樂的のものを設備ふるに在るのであるが、前にも云へるが如く、之も金錢問題に關係を及ぼす事であるからサウ急にも行く



仁田香雲女史筆

まいが、何ものめから大した設備をなしなくとも、漸次に之が完成を期して行つたならば、強ち出來ない相談では有るまいと思ふのである、と云ふものも實は予が一は社會敎育のため一は良からぬ風儀を禦ぐの方法と考へるからである。

保存したき風習

正月には互に年始を祝して廻禮訪問するのであるが、此の如き風習は何時までも保存して行きたいと思ふ、此の互に訪問せねばならぬと云ふ制裁の爲には、娯樂的をも兼ぬるのみならず、互に情を溫めると云ふ點よりも廢すべからざるもので、殊に幼者に對しては、互に集合して慰藉すると云ふ古來の習慣を見聞せしむる事は、その精神敎育に與ふる所の効果と云ふものは決して尠なからぬのであるが、如何も現今の正月

の状態は亂れて來たので、所謂燕尾服を着け絹帽子を被り、眞赤な顔をして居る者は格好無いが人力車に凭りかゝつて、殆んど帽子も落んばかりの陋態を現はしたり、若くは下流の者が醉歩蹣跚として大道を盤行する、是等の風儀は正月に有勝の事としてよりも、寧ろ之が正月の風儀として、自らも許し世間でも公認して居るのであるが、之は大層家庭に影響するのである、即ち正月早々から此の如き惡風を幼者に見聞せしむるのみでは無い、何處の家でも廻禮の客は醉はして還さねばならぬものゝやうな風習になつて居て、無理に屠蘇を客に強ひ客をして十二分に酩酊せしむるを以て誇りとする、斯様な弊習を家庭に於て勵行するのであるが、實に是等は兒童教育の上に大害あるものなれば、斷じて此くの如き惡習は根絶するの態度を取らねばならぬ

跡見玉香女史筆



之を矯正し芟除するには、まづ手近な所では各自の家庭より勵行して行かねばならぬ、此く各自の家庭より勵行して行く事は、乃て社會改良の基本となるのであるが、その家庭に於ても殊に一家の主婦たる者は、最も多く之に對つて注意を拂はねばならぬのである。

年賀狀と禮物贈答の弊

また此の新年には、男女と云ふよりは世間一般に年賀狀または禮物の贈答をすのであるが、大いに間違つた遣り方をして居ると思ふ殊に近年は葉書の濫用が大いに流行して來たが、實に良く無い事と考へる尤も遠方で互に相隔つて居る者は餘儀ないのであるが常に時々相往來して居る、例へば一市町村の內なるにも拘はらず形式的に葉書を濫用して年賀狀なるものを發するが、是は啻に不經濟なるのみな



金杉棠玉女史筆

中島玉裏女史筆

らず、此の如き弊習を恬として顧みないで續けると云ふ事は、是また兒童の敎育上に大影響を及す事であるから改良せねばならぬ、元來一市町村内のものは、互に訪問して賀を述ぶべきが禮である許りでは無い、また互に情誼を溫むるに於て最も好き機會なのである。

殊に可笑きは、ツイ昨日の大晦日まで毎日のやうに顔を合して居た者が如何に形式といひながら年賀狀に、謹賀新年の傍に併せて平素の疎遠を謝す云々の文句を認むるが虚禮も此に至つては寧ろ滑稽に近いのである、併し遠方に離れて居る者や又は同一の市町に住で居ても、平素餘り顔を合す事の稀なる者は書くが宜い、けれども毎日のやうに顔を見合せて居る者は若し他に差支のある時は餘儀ないが、さも無ければ互に訪問し合うが宜い、殊に平素疎遠勝ちの者でも、成るべくは此の好機を利用して、



情誼を温むるが宜いのである。

婦人の年賀と年玉に就て

歌川若栄女史筆



兎角婦人の年賀は、正月の末か二三月頃まで流るゝのであるが、之も従来よりの遺習として、且つは餘儀なき事としてか默認せられてあるのみならず、女子の年賀は三月の雛祭までと云ふやうな忌はしき俗諺さへも産み出されたのであるが、予は之に對して女子に自覺を促がすのである、何故なれば、既に年始年頭と云ふにも關はらず、一月を過ぎて二月三月に至つて年賀を述べると云ふ事は餘り矛盾した事であらうと思ふ同じ年賀を述ぶるならば、所謂松の内とか又は十五日正月とか云ふまでゝは無くとも、切めては正月の終りまでには改めたい、その月を越して他の月に行くと云ふ事は穩かで無い。

それから互に年玉と稱して物品を贈答するのであるが、予は贈答の禮が惡いと云ふのでは無い、その贈答の禮物は、縱ひ白紙でも手拭でも其物の原薄は擇ばない、唯眞意の籠つた物にして欲いのである、折角高價を拂つても、物それ自身に贈答者の温き情の含んで居るのと否らざるとは、大いに眞情の厚薄に影響

する事であらうと思ふのであるから、此の贈答する所の物品を撰ぶ、例へば、獨逸などではクリスマスの時に互に贈答するのであるが、その品物は概して手製の造花、組物、繪畫と云ふやうな物を贈答するのであるが、如何か我國に於ける年玉の贈答品にも、何に由らず手作のものを使用したならば、縱んば其物の價は易くとも、手みづから造つたと云ふ中に、



中山彩畝女史筆

非常なる溫かき情をふくんで居るので、之は金錢を以て購め得られぬのであるから、その手作物を贈られたる者の悦びは、得て云ひ盡せないのである、假りに自分が考へて見ても、友人等より手作の物を得たのと、又金錢を以て購め來た物を獲たのとは、果して何方が悦ばしく感ぜらるゝか、そは云ふまでも無い、友人の手に成つたものを怡ぶに相違ない、啻に之を怡ぶばかりでは無い、さういふ物は永く之を保存して該友人等の溫かき情を紀念することに爲るのであるから、今や我國でも日に月に女子の手藝も盛んに勃興して來たのであれば之を學び之を修めて、今よりは贈答品を是等に改良したい

のである、世の女子たる者が之を利用する事になればこれ乃ち女子の技藝の發達すると同時に内助の生產力をも増す譯である、又單に年玉に限らず、之に類する場合の贈答品は、可成手製品にした方が興味がある。殊に人の心も改まるべき新年は猶更の事である



重松せい子女史筆

新年の御題に就て

小出粲

新年の御題は更めて云ふまでも無く社頭松と云ふのであるが、此の御題に就て、先頃も門下生なども參つて種々の質問を試みるのであるが、新年の御題だからと云つて無暗に頭を惱して、如何に言ひ廻したならば題意に副ふことが出來やうか、千代に八千代になる枕詞を入れなければ目出度聞えまいかと云ふやうに工夫を費す者が多いのであ

る、けれども何も新年の御題であるからと云つて、無理に千代に八千代にの詞を冠らしめて芽出度がらせやうとするには及ばない、併し私の云ふ所は、必らず其等の芽出度詞を取り除かれよと断ずるのでは無い間より其等の詞を使うて佳く詠み出でたる程の結構は無い。

けれども無理に之に牽強附會やうとすると知らず〲不自然に流れて本物に爲らないやうな事に陥るのである何も無理に頭を苦しめなくとも御題が既に社頭松と云ふのであるから、その題意に随つて詠み出づれば宜い、何せなれば社頭と云ふからには、誰か敬虔の念崇高い情を發さ無い者がありませうや、また松といふからには、誰か木枯の散り果た山骨の露はれたるやうの感想を懐く者がありませうぞや、必らず鬱蒼として千歳の色を變へぬ事に想ひ到るのである。



鈴中彩彩女史筆

然れば、神々しき社の頭に立てる松の事を詠み出でさへすれば、それで事足るのであるにも關はらず、無暗に新年と云ふ事に頭を突込んで、芽出度がらせやうとするのは甚だ宜しく無い、本年は一月の初頭に

此の御題が出たから、殊更に彼此と工夫分別して新年と結附けやうとするのであるが、此の題に強ち新年の歌題に限られたものでは無い、何時出しても差支へ無いのである、故に此邊の消息を心得て、詠出でたならば、決して題意に齟齬するの憂も無きのみか、却つて眞情を流露して自然に新年をも祝ぎ得る事と思はれる



小森復子女史筆

てよだわ言葉の改良

先づ標準語を作れ

伯爵　柳原義光

言葉と云ふものは大切なもので、面識の少い人も、言葉の如何によつて、略その人格の高下を推知することが出來る、恰も未見の人より送られたる文書を、其筆蹟を見て、其人物を測量せらるゝと同じことである

私の考では、日本の言葉は上中下の區別があつて、叮嚀なのもあり、粗野なのもあり、自然に言葉に階級

がついて居るやうで、あまりに複雑である、そこで上下の階級に通じ、一般に用ひらるべき、一定の標準語がなければならぬ。

その標準語は、音調の爽やかな、訛のない、雅致の下にて用ひられて居る言葉、即ち東京ッ兒の言葉によるの外はない、成程東京ッ兒の言葉にはヒ（たとへば火）をシ、クワ（たとへば過）をカ、ジュ（たとへば壽）をジ、といふ如き二三の不都合はあれど、それ等は取除き、よい所を土臺としたる精撰の東京言葉にしたいものである。



中村晨陵女史筆

近時の東京の言葉には、花柳の巷より上流に浸潤して、習性となり、たとへば厭だわ。可ないわ。又何々してよ。など、わとかてよとかを盛んに振廻はし、甚しきは何々成すつて。など、言葉を「成さるか」といふ場合に用ひ、まるで過去と未來とを大びら（これを下等語）で取違へて居る、又抄略することを、ヌキにするといふ如きは、議會あたりでも、政府委員等が、非議案の説

明はヌキにしてなど、、すまして唱へて居る、其外これはすぐれてよいといふ事を「一等よい」といふ一等といふ言葉は悪い言葉ではないが、場合によつては因襲上妙に聞えるので、こんなのも避けたく思ふのである

要之、言葉といふものは、風采人格に伴ふものであるから、賤しげのない、高尚な奇麗な言葉を使うて貰ひたい、地方の人も土音になじまず、成るべく上品な言葉を使ふやうにして、一般の言葉が、そのまゝ文章にして差支ない程のものにした年のはじめにこれ等の言葉も改まるやう、一言を述ぶる次第である。



原田瀾月女史筆

い、近來女學生の言葉の如き、百中九十九、前述のでよだわをふりまはして、更に耻ぢないやうであるから

流行語改良策に就て

文學士　三輪田元道



中島[illegible][illegible]女史筆

言語と云ふものは、今更繰返すまでも無く各自の思想を表はす所の符號で、即ち之に依つて精神狀態の如何を知り得るのであるから理想の上より云へば言語の實用的にして且つ明瞭に言ひ顯はさるゝと同時に、決して野卑であつてはならぬ、必す雅致優美のものので無ければならぬのである、此の事は理論の上に於て相一致して居るので、女子と云ふよりは寧ろ國民全體の言語を之に結びつけて行きたいのは萬々である。

當時上で我國の女子、殊に女學生の間に流行する所の言語に就て兎角の評があるばかりでなく、頻りに之が改善の方法等を講せられつゝある事も見聞して居るが、未だ深く其原因を究めないで、只その末にのみ趨つて居らるゝやうに考へる、尤も之に就ては、予も亦近時女子の言語が、比較的野卑に流れ、比較的亂雜に陷つて來た事を認めて居るので、之を歎はしく思ふと同時に、之が救濟の方法を講じなければならぬと云ふ事は至極同感であるが、その之を救濟し改善するの策に至つては、大いに他と撰を異にして居るのである。

學校語と寄宿舍語

單に女學生間の流行語と云ふ中にも、自ら學校語又は寄宿舍語と稱する特殊の流行語があつて、之が爲に往々その父兄をして顰蹙せしむるのである、現に昨年の夏、予が夏期休業を利用して四國へ旅行した時に、京都の高等女學校より歸省した一女學生は、在鄕の學友と、絕えて久しき面會の事とて、何呉となく四方八方の談話をして居つたのを、父母は聽くとも無しに隣室の事であつたから、一部始終を耳にしてその友達の去りし後、息女に向つて、サテ今しもお友達と對話に於ける言語の、如何に賤しく陋なる事よと詰りたれば、息女は平然として、是は皆京都女學校の寄宿舍にて常に用うる言語なりと答へて、毫も怪しむ氣合も無いので、大いにその父母は驚いたと云うて、熟々予に告げられたが、斯樣に所在に依つて特殊の言語が流行するのである、それ故に世の有識者は、頻りに之が救濟に努めて居らるゝのである、けれども前にも云へるが如く、其方法が不自然である、故に其目的を達する事が出來ないのであらうと思ふ、今日の如く言語が野卑に流れ亂雜に陷つたのは、畢竟日本の國語その者に原因して居るものであると予

は断定して憚らぬのである、然るに世の言語改良論者は、概は想ひを此に廻らさぬやうに考へる、之が予の他と撰を異にして居る點の一つである。

言と文とは兎角並行しない

一體何れの國でも言と文とは相違して居るもので、全然一致して居ると云ふ事はないのであるが、我國の如く互に相距る事の甚しきものは無い、去れば文の上から云へば、我國のものは優美で高尚に發達して居るけれども、之に反して言の方は野卑で亂雜で、言ふに忍びない點が多いのである、併しながら熟考すれば、全體我國に於て國語を習ふと云ふ事は、寧ろ話すと云ふよりは書くと云ふ事が主になつて居るのであるから、如何程國語を修めたからとて、其を以て話すと云ふ事は出來ないのである、故に文法を修めたとて之を言語に應用は出來ぬ、と云ふものは、我國には文語と口語と云ふ物のあるにても知らるゝのである、故に若も國語にて習ひ修めたる者を以て話を試るとすれば、恰も能狂言を聞くの感想があるのである

此くの如くの現狀では、到底言語の發達を望むと云ふ事は畫餅に屬するのである、けれども今より國語が發達すると同時に、之が研究と言語の研究とが駢進して行つたならば、日本の將來は言文一致と云ふやうな文法を採用せねばなるまいかと考へる、左樣すれば言語も高尚に優美に發達して來る事は疑を容れぬのである、その證據は今も尚ほ平安や奈良朝を通じて遺つて居る、即ち當時の文の上に歴然として顯はれて居る、此當時は現今の如く、文語と、口語との間に大いなる溝渠は無かつたのであるから、多くの口語は直ちに文の上に應用せられて居るのであるが、併し當時は平常の言語と云ふ上に於ては別に研究して居らないのみならず、漸く風を成して書くと云ふ一方に傾いて來たから、從つて言語そのものゝ多數は品位

が下つて來たが、文章から云へば高尙に進んだのである、尤も言語の墮落するのは、多數の勢の然らしむるものであれば、單に女學生の言語が野卑である、亂雜であると云つて兎角の評を試むるよりは、まづ其根本の國語に向つて大改良を加へねばならぬのである、而して其改良の要項は文字、文章、實用口語に深く眼を注がねばならぬ。

心理上から來るもの

であるが、凡て和漢洋を通じて親しい者の間には語が畧せらるゝのである、先づ親は子に對し、兄は弟に對し、夫は婦に對し、親友は親友に對して比較的敬語が少ないのである、尤も我國でも、昔時上流に位する公卿とか大名とか稱する者の間には兩敬と唱へて、相互に敬語を用うるの習慣であつたが、その餘は總て粗略であつたのである、併しその粗略なのが却つて親しいので、餘り生頂面なのは疎遠で情が移らぬと云ふ風が行はれて居る、所が女學生が社會生活の一部たる學校生活を營むやうになつてからと云ふものは、その家庭に於けるものを擴張して、同學間にも之を行ふやうになつたが、之は心理上より來たものに相違ない、殊に男生間などでは、櫻井君と云ふよりは櫻井、松井さんと云ふより松非と呼棄てにし、尙ほ一歩進めば互に綽名を附して呼び合ひ、之を以て相互の間に隔心の無いものとして居る、即ち之が親友相和するの表象となつて居るから、女子も亦學校生活をするやうになると、自然心理上の一部分よりして、今日世上に兎角の評を受けるやうな言語が事實として顯はるゝのである。

要するに他にも理由はあらうが、以上二つの理由こそは其多くの中の最なるものと考へる、されば中々一朝一夕に之が改善を計らうとしても出來るものでは無い、出來ないと云つて放任して置く譯には行かな

いのみならず、早晩言語の上にも革新の時期は來るのである、否、革新の時期は來つて居る所ではない、時々刻々革新を促がしつゝあるのである、然れば國學者否國民全體に之が要求に應ずるの方法を講じなければならぬのである。乃ち現今女學生の間に行はるゝ所の、惡い意味の言語は、

品位や性格にも影響する

事であるから、大いに之を愼しみ避けさせねばならぬのである、それを使むるには、單に話してはならぬと云ふやうな事では、容易に廢する事の出來るものでは無い、古へ誰やらの云へるが如く、民の口を塞ぐと云ふ事は到底不可能の事であるから、女子をして自覺し反省せしめねば不可ぬ、何ほ親切に云へば、之を心理的に解剖し、意識的に自覺反省せしめねばならぬのである、此くして己れより發したものは奇効を奏するものであるが、他より禁遏したものは、たゞ且らく影を潜むるに過ぎないで、効果を收むる事は容易で無い。

古い一二の例を云つて見れば、兼好法師の徒然草の中にも、此の言語の使用方に就て述べられたが、兎角下司の者は要らぬ言葉を澤山に使ふ、例へば、車もたげよと云へば濟むのに、車を持てあげよと云ひ、火をかゝげよと云へば可いのに、火をかきあげよと云ふの類である、と云はれたが明治の今日では、それ所では無い、例へば、落ちたと云ふべきを、オッコチタと云ひ、頰と呼ぶべきを、ホッペタと呼び、物を打つをブンナグルと云ふやうに、兼好法師の言はるゝ如く不要ぬ言葉を澤山に使ふのである。

言語と云ふものは、社會の人文に伴うて變遷して行くもので、決して一定不變のものでは無い、故に社會が開明に進んで生存競爭が激烈になれば、言語も其潮流と習慣に應ずるの必要よりして、自然に省略に

從ふのである、例へば、現今朝起きて今日はと云ふのも、昔時は、今日はお早う御座います、御機嫌は如何で御座いますと長々しく挨拶したものである、然るに稍進んで、今日はお早うと略され、尚ほ進んで今日はに略され、その今日はも促めてコンチと省略せらるゝやうになつたのであるが、それは何が爲かと云ふに、畢竟社會の生存競爭が激しくなつたからである、之と同じ話は西洋の紳士間にもあるので、西洋では紳士たる者が朝起るとグード、モーニング、サーと挨拶する、即ちお早う御座います、君よと云ふので日本の貴君お早う御座いますと云ふに同じなのであるが、是とても乾度一樣に左樣であるとは云ひ切れないのである、それにも拘はらず、會話位を覺えた日本の某紳士は、それを聞いて居たから、先づ初の口切りに、ホテルへ泊つた翌朝、ボーイに向つて右の挨拶を試みた、けれども一向に感じが無いらしい、是は自分の發音の惡い爲か、但しは聲の低くかつた爲であらうと考へたから、再び瞭然と右の挨拶をしたけれども更に反響が無いので、此奴失敬千萬なと憤りながらも、其場は夫で口を噤んでしまひ、偶々一友人の來訪に接したから、逐一右の始末を物語ると、友人の云はるゝやう、ボーイは我國に於ける下婢下僕の如きものである、其に向つて紳士間の常用語を使つたとて反響の無いのは無理で無い、彼が眼を瞬つて居たのは尤である、彼等にはグードを略して、單にモーニングで澤山なのである、而して其他は一般にグートモーニングで足るのであると云はれて、果は互に手を拍つて大笑したと云ふ實話もある、是れ皆生存競爭の結果に外ならぬのである、是に由つても言語は社會の進歩と共に推移するものである事が立證せらるゝのである。

如何に言葉を改善すべきか

然らば我國の言語は如何に改善すべきかと云ふに就ては、先づ世の先覺者は之が發達を高尙に導くの責任ある者で、之を高尙に導くと云つても實用に遠ざかつてはならぬ、又縱ひ奈良朝や平安朝の口語が、如何に高尙であり優美であるとしても、最早今日では死語廢語である、故に予は其死語廢語の復活を望むのでは無い、また之を復活せしめたとて、其を以て救濟改善の目的を得るもので無いのみならず、決して時勢の要求と相容るゝものでは無い。

現今女學生間の流行語と云ふものは、恰も野生の植物の如きもので、若し此の儘に放任、否、放任しないまでも、姑息の策を取つて居たならば益々惡くなるのみである、然らば如何に之を救濟すべきやと云ふに、其方法の第一着として、國語を研究する者は、單に是迄の如く死語廢語の詮索に腐心する事を轉じて專ら口語の研究に頭腦を傾け、尙ほ進んで發音の敎授、練習の方法等を講じて貰ひたい。

予は曾て議會の速記者に聞いた事がある、彼の多數の議員中でも或二三士を除くの外は、迚も演說その儘を速記錄として公にすることは出來ない、依つて孰れも修正を加へて出すのであると話された、之に依つて見るも、如何に我國の言語が混沌時代に在るかゞ想像せらるゝのである、されば國語の流弊を救濟するには、何うしても意識的に研究せねばならぬ、また爲せねばならぬ、而して今後は一層修辭法若くは雄辯法を修めさせて、所謂話す事を上手にするやうに導かねばならぬのである、兎に角國會議員と云へば、孰れも多少知名の士であるにも關はらず、その公開の壇上の言葉が、前述の如く混沌時代に在るとすれば現今女學生間の流行語などは深く咎むるに足らぬ位のものであるが、それかと云つて放任して置く譯には行かないのであるから、兎に角今日まで發達して來た言語、又將來發達せしむべき言語の種類を精撰して標準語と云ふものを造らねばならぬ、從來の如く、例へば、代名詞中の二人稱でも、英語ではユーの一語

で足るのであるが、我國では閣下、貴下、足下、アナタ、お前サン、オメイ、キサマと云ふやうに殆んど二十以上もあつて、孰れを標準として可いのか分らぬ、之に就ては丁度人間が生れて發達するやうに爲せねばならぬのである、若し然らざる時は、思想の大不經濟を來たすのである、尙ほ一例を擧ぐれば、助詞や副詞等にも恐るべき不都合があるので、寒い、甚だ寒い、大變寒い、大層寒い、餘程寒い、馬鹿に寒い等の類である、故に今日の急務は、社會一般に從來の死語廢語の詮議は止めて、明確にして簡明なる實用上の利便を基礎として、その種類を精撰して標準語を示す事が急務中の急務であると確信して居る、さうれば啻に國民が憑るべき言語を知るのみならず、延て思想上の不經濟を救ふ事が出來るのである、且つ左樣なれば王公相將誰の前でも差支へなく使用する事を得るのである。

要するに我國の言語は、今や混沌にして不完全なる狀態に在るものであるから、之を救濟し改善しやうとするには、世の先覺者たる者が、言語の種類を精撰して、之が標準語を示さねばならぬと同時に、之を使用して見せねば不可である、否、女學生と云ふよりは、國民全體が之に頭腦を傾けねばならぬのである言語の完全不完全は頗る國家の盛衰に大關係を有つて居るもの丶、決して國民の或一部の頭上にのみ限られたる問題では無い、即ち國民全體が全力を注ぎて攻究し改善せねばならぬ緊要なる事件である、尙ほ之に關しては、他日細說するの機があらうと思ふが、今は之に止めておくのである。



退嬰は女子の天分を盡す所以に非ず

文學博士　白鳥庫吉

平常女子の問題には餘り頭を傾けて居ないから、別に是と云ふ材料も蓄へて居ない、それに女子に關する問題と一口に云へば云ふやうなもの丶中々その範圍の汎いので、觀る方面が異なると同時に、問題も種々に岐れるのである。

併しながら其根本に立入つて見れば、女子の本分は何であるか、如何なる事を爲すべきが天職であるかと云ふことに歸するのであらうと思ふ、此の根本問題の解決が出來さへすれば、自ら他の諸問題即ち女子に關する諸項も、容易に解決が出來やうと考へる、ソコデ女子の天分は、何であるかと云ふに、詮じ詰れば良妻賢母即ち一家の主婦として內助に力を効すと云ふに外ならぬであらうと思ふ。

近時女子の地位も高まり、且つ女子が社會の爲に活動するのは、誠に國家の爲に慶ぶべき現象であるが、縱ひ社會の爲に活動するにもせよ、前段の女子の天職より割出して遣つて貰ひたい、若しも家庭を空虛にして置いて、徒らに社會の爲に活動したからとて、社會は決して之を歡迎するものでは無い、啻に之を歡迎しないのみならず、却つて之を指彈するのである。

土耳古や支那若くは朝鮮等の女子は、全く男子の爲に屈伏せられて、女子の社會上に於ける勢力など丶云ふものは、毫も無いばかりで無く、全然その社會より忘れられて居ると云ふ有樣なるに引換へて、我國に於ける女子、殊に維新以來の女子の地位と云ふものは非常に高まつて來たつたのである、けれども尙或一部のものは低いと云つて助勢しつゝ、恰も彼の歐米に於ける女子の如くにまで、其地位を高めやうと苦心しつ丶あるもの丶やうであるが、之は少しく突飛の沙汰と云はねばならぬ。

何故と云ふに、東洋殊に我國と西洋では、その國情や民俗が大いに異なつて居る、例へば、歐米に於ける女子今日の地位は、中古の武士氣質より出で、弱者を扶掖すると云ふ事より漸次それが高まつて遂には大切にしすぎたるの結果、形式に流れて今日の如くに至つたのであるから最早今日では表面之を貴ぶやうでも、裏心は左程で無いのである、之に反して我國では、女子の如き纖弱なるものを劬はるのは乾剛なる男子の爲すべき事として起つた點に於ては、別に異つた點は無い、



けれども其之を扶掖すると同時に形式の末に趨ると云ふことを避けたから、今尙ほ心に於ては之を扶掖する度に於て差は無いが、表面には左程之を現はさない、之は即ち日本の武士氣質からである此の如く兩者の發足點は同一でも、その到着點を異にして居るのである。

此くその歸趨を異にして居る點こそ、實に我國女子の美德であるにも拘はらず、此の常軌を破つて歐米の女子と一般に地位を高めやうなどと欧試す

るのは、突飛の沙汰と云はずして何と云はうか、實に歎陂も是に至つては滑稽と云はねばならぬ。

且つ或者は頻りに歐米の例を引來つて女子の獨立と云ふことを言ひ放つが、是等は歐米の事情に通じない者、或は半可通の者などの云ふことであらうと思ふ、成程歐米では女子の獨立と云ふことを說き、且つ實際今日獨立して居る者もある、けれども其は生活狀態等の爲に餘儀なくせられて獨立を營むので決して女子の天分を盡すに恰當であると云ふ點から爲すのでは無い、云ふまでもなく、歐米人士とても少しく常識のある者は、已れが母國を繼續せしめたい之を無窮に繼續せしむるには、必ず第二の己を得なければならぬ、之を得るには男子のみの力でも、又女子のみの力でも獲ることは出來ない、必ず男女の異性が相和せなければならぬものであると云ふことは承知して居るのであるが、生存競爭の激しき歐米に在りては、生活狀態等の爲に止むを得ず男女共に獨立生活を營むのである、即ち女子の天分から見れば變則である、決して正則とは云はれない、併し時として我國の女子とても此の變則に處せねばならぬ場合は往々尠なからぬので、現にその實例に乏しくはないが、變則を以て正則を壓伏しやうとするのは不條理の極と云ふべきである。

然らば前にも云へる如く、女子の天職は、一家を成して內助に力を效すべきものであると云ふ事は、最早動かすべからざる第一の要義ではあるが、單に之を偏信して、今尚ほ社會の或一部に於けるやうに深く楓幹を垂れこめて、一歩も自家の閫外に出ないと云ふのは宜しく無い、最も社會は複雜であるのみならず、各自の家庭は決して門外漢の窺知るべきでは無いが、優に家政を整理して尚ほ力が餘りある者も、所謂退嬰思案をして、毫も社會の爲に力を假さないものがある、固より家政を外にして、徒らに社會の爲と稱へ、その名の美なるに驅られて狂奔するのは、決して女子の天分で無い事は前陳の如くであるがされはとて、無暗に引込み思案のみをして後へ

引退つて居るばかりが亦女子の天分とは言はれぬのである、要はその中庸を保たねばならぬのである、

國家の元氣と云ふものは、その消長の大部分を女子の手に待つものである、然るに若しもその女子たる者が、彼の支那や朝鮮や或は土耳古等の女子の如く社會に無勢力であり、且つ引込み思案にのみ閉ぢ籠られて居たならば、國家の元氣と云ふもの丶振興する氣遣ひの無いのみか、遂には國家の衰亡を來たすのである。

今や明治の四十年を送りて新たなる春を迎へて、此に齢の一春を加へられたる賢明なる諸嬢は、前來予が述べし所の苦言を咀嚼して、徒らに退嬰主義に逗りて女子の天分に負くことの無いやう、又社會の爲とて内を疎かにせぬやう、所謂その中庸を執りて倍々我國固有なる女子の美徳を發揮して、世界女子の龜鑑たるやうに活躍せらんとを望むのである。



家庭の義務

小川直子

私の述べます事が、果して本題に當篏ります如何かは存じませんけれども、多少は皆樣の御心得にもならうかと考へましたので、斯樣な題を掲げたのでございます、

私のまだ極幼少の頃には、繪草紙と申しまして、中に江戸繪と申すもの丶入つた草紙が流行いたしたもので、今も尚ほ其面影の幾分を留めて居るやうでございます、その繪草紙を一冊父より與へられたので、受けて之を見ますると道化百人首と云ふ冊子でありまして、その名からして道化といふ位でありますから内容は略察せられますのでございますが、幼い時分の事でありますから、まだ夫等の分別も無く句調が面白いまゝに戯れに讀み行きますると、その中に斯ういふ歌があつたのでございます「わたのは

ろや處とちロぬひつけて人には見せぬかゝのつぎでと」と云ふので、之は御承知の「和田の原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ天の釣舟」と云ふ參議篁朝臣の歌を作り換へたもので、固より道化と云ふのでございますから風情も何も有りは致しませんが、偖私が幼な心に之を讀みながら、不圖心附きまして、之を熟考しまする時は、單に綿の襤褸ばかりでは無い、大いに取るべき處がある歌であると感じたのでございます、即ち凡そ人の妻たる者を勵ますばかりで無く、其道を守るべき教訓の一つとなるものであると深く胸に刻んだのでございます、

家と申しますは廣いので、上は大臣方より下は職工やうの輕い人々に至るまで、各自に一家を成して居るものでございますが、その一家を持續保全して行きますに就ては、夫たる男子は概ね外に出でゝ勤めらるゝのでございますが、その勤め方も一樣ではございません、或は精神を費す方もあれば、又は力を勞する者もありまして、例へば、大臣方の精神

をお費しになる事は、私共の想像以外でございます、之に反して職工やうの者が、朝から晩まで汗水を流して力役いたします事も、是また私共の想ひ到らぬ程でございます、此く勤め方にも兩樣あるのでございます、縱ひ高下の階級はございましても、夫たる者は皆その力量に應じて働いて居ります、此の働きは何の爲であるかと申しますれば、直接間接の差は有りませうとも、約まる所は世の爲國の爲に勤むるので、盡すといふ意味に於ては少しも區別は無いのでございます、さうして孰れも皆その分に相應した給料を得て妻子を養ふので、大臣方のやうに一ケ月何百圓と取る方も、日々五十錢六十錢の賃錢を得るものでも、皆それは其人の分に應じて得る所のものでありますから、日給五六十錢の者が月給五百圓八百圓と取る方と肩を並べやうとて、それは月に向つて石を抛るやうなもので、迚も及びも無いのでありますれば、各々分を守り分に安んずると云ふ事を忘れてはなりませぬ、

此く夫たる男子は、外に勤め分に應じて給料を得て來る、其妻たるものは、常に家に在りて家政を取るのでございますが、最も身分の重い方々の家庭では其様な事もございますまい、けれども吾等風情の輕い者の家庭では左様は參りませんから、みな其妻たる者が家政を整理して行く、否とよ、行かねばならぬのでございます、それを爲して行くに方つて、第一に制すべきは奢侈で、此の奢りといふものは兎角募り勝のものでありまして、誰しも不美ものよりは甘味もの丶方が口當りが宜く、硬々したものよりは手軟かの物の方が可いに相違ない、夫も出來る身分の者でも成るべく制せねばならぬのであります、然るに無理と知りつ丶も之を制すると云ふ事の出來ないのが人間の弱點と申せば、申すやうなもの丶、少しの心の用ゐ方で、如何様にも之を制する事を得るのであります、古への聖人は、之を己れに克つの德として讃へられた程でございますれば、如何か五十圓取りの家の妻たる者は、決して百圓乃至二百圓の月給を取る方の眞似をして外見を張ることの無いやうにしなければなりませぬ、

次は物の入費を省く即ち節儉を守ると云ふ事が大切でございます、併し私は吝嗇をお奬め申すのではない、之を履き違へてはなりませぬ、而して此の節儉と申すことも、或意味に於いては程度問題で、無暗に我は節儉を守るのであると申して、世間の義理人情までも缺ぐやうな事が有りましては、それは節儉では無い即ち吝嗇と云はうか、はた何と云はうか殆んど名けやうの無いので、それでは世間の交際も出來ないのでございます、それ故にまづ、世間一通りの義理人情を盡しておいて節儉を爲ると云ふには必ず人目に掛らぬ所に節儉しなければなりませぬ、而してチヨツト世間の外見は裕福のやうにするのであります、之が節儉の極意でありますが、今私が外見を裕かにすると申しましたが、之は世間の謂ゆる外見を張る、言を換へますれば華奢を衒ふと云ふのとは大層違ふのでありますから、此區別を混じては

なりませぬ、茲に此の歌の本統の味があるのでございます、例へば、賤が伏屋などに至りますれば、最早追々寒くなる事とて、故い褞袍を拵へ直すに致しましても、中の綿の堅くなつたものは、面倒でも指で細かく千切つてフワ／＼となし、出來上つてから綴糸を掛けますにも、新らしき綿なれば其心配も無いから粗くとも宜しうございますが、古い綿は落ちる虞れがあるから綴糸を細かく掛けると云ふやうにすれば、それで人目に新規のもの丶如く見ゆるやうに爲るのでございます。

それは單に綿のみではございません、小兒の晴衣を作つて遣りますにも、五人あるもの五枚、六人のものは六枚を拵へて遣らねばならないのでありますが、輕い身分の者は、夫が得る所の給料も細いのでありますから、中々五枚六枚の衣服を新調して遣ると云ふことは出來ないので、漸くにして其表だけを新調したならば、その裏に附けますものは、古い葛籠か行李の中を搜せば、何處の家にも裏地になるやうな端布などのあるもので有りますから、それを取り出して洗濯をなし、或は補綴で行く時は結構な裏が出來るのであります、最も袖裏などは幾つも補綴の出來るのは據ろ無いのであります、けれども此〆致せば、外見だけは立派に出來上るので、是は道化歌の如く、人には見せぬか丶のつぎごとの功にあるのでございます、如何か人の妻たるものは此く有りたいものでございます、

次に女子と云ふものは克く愚痴を壞す、是は一種の習癖でありますが、兎角改むる事の出來ないものか、彼れは辛い是れは堪へられぬと云つて他人に洩しますが、實に見苦しく聞苦しいのでございますが、何故さうするかと云ふに、畢竟氣が狹い、了簡が小いから、自分の胸の中にて之を打消すことが出來ない所より、煩悶懊惱として遂に他人に口走るのでありますが、サテ然らば他人に自己の愚痴を壞したからとて、その爲に幾何の利益があつたかと云ふに、得る所は毫しも無いのみならず、却つて口開けて腸

見ゆる田螺かなとやら、動もすれば自己の了簡の淺猿さを見透かさるゝ位に止まるものでありますれば、此の事は女子たる者が第一に愼しまねばならぬ事と考へるのでございます。

古來女子には三從と云ふことを申しますが、その第一の親に從ふて居る間は女子の務の最も樂な時でございます、設ひ學校から歸つて學科の復習を迫られ、試驗の成績に就て兎や角と申されましても、只自身一己に限つて居るのである



から、此の位氣樂な時は無いのでありますが、偖一たび嫁に行きますと左樣は爲りません、まづ女子たる者の一番苦勞な務の時代でございます、能く世間で舅姑を鬼か蛇のやうに怖がりますが、考へて見ますれば吾身とて父母無しに産れて來たものでも無ければ、また吾身の父母が百年も二百年も壽命を保つて居て、自身は一生涯その膝下に居らるゝ譯のものでは無くして、一たび片付かねばならぬ、

その片付くにも昔とは違つて、今は九州の端から陸奥の端は愚か、遙くは朝鮮滿洲又は歐米までも片付くとのあるもので、動もすれば、私も御世話申すこともございますが、双方とも是迄知り合の方と云ふものは、少ないもので、まづ大抵は先方の家庭の樣子等は不案内のもので、從つて吾が連添ふべき良人は勿論、舅姑等の氣心も判らない即ち初のお目見えでありますのに、取分け昨今まで學校へ通つて居て、今度初めて家庭を形造るのでありますから、諸事行屆かないのは無理ならぬ次第であります、去ればとて舅姑は鬼でも蛇でも無いから、生の父母の如く嫁の方から懐かしう思ふのが第一で、唯心の中に思ふばかりで無く、近所合壁は勿論のこと、縦ひ見ず知らずの人に對しても其由を語るが宜いので、術めにも他人が舅姑の言動等に對して彼是云つたとても、それは何かの間違ひなるべし、吾が舅姑は曾て其樣なる言動ありし事なきのみならず、常に吾を愛する事は生の父母よりも優るとも劣ること無く、實に懐かしの舅姑であると云ふやうに語出でさへすれば、假りに舅姑に僻みがありたればとて、何時しか僻みは消えて無くなるのみならず、一家は以前に増して睦しく和合するものでございます。

若し之を疑ふならば、まづ舅姑が嫁を貰ふ時の事を追想して見れば克く分かるのでございます、最早自分の相續人が學業も卒り、年輩も相當に達しますれば、如何か吾が嫡子の嫁として、學問もある技藝も出來、且つ縹緻も十人並勝れて體格も善く、何所へ出しても押しも壓されもせぬ立派な者を貰ひ當てたいと云ふので、人にも賴み自らも搜して、扨此頃の事でありますから、自分も慾いと思ひ嫡子も快諾した上で之を貰ひ受ける、その時の喜びは如何でせう、實に之に比ぶべき喜悅は無いので、口にこそ出しませんでも、廣き世界に天晴吾が息子の嫁ほどの者は無いと云ふ意氣込でありますから、それ衣服よ、それ簪よ、やれ帶よと購つて與へるのみならず、貰つて顔觸に伴て歩くにも、頭髮が如何の、帶の格好

が斯うのと、一々自分で世話をして外見を美くする事に努めるので、此の時には兎の毛の尖ほども憎いなど云ふ分子は無いのであります。

然るに一年と過ぎ、二年と經つに従つて、相互に初めの慎しみと云ふものが、弛んで來て、遂には狎れて我儘が生ずる、これが世間通例でございます、さうなると見ることと聞くことと或は爲ることと等が、一々互に蟲が好かなくなる、従つて仲が悪くなる、仲が悪くなつて互に面白く無いから別居をすると云ふ風に倍々遠ざかる、又一方舅姑たる者は、如何いふものか年を老ると氣が歪むものであるから、其嫁を不足に感ずる、ソコデ舅姑と嫁との間が犬と猿とのやうになるのでございますから、双方ともに此の慎しみと云ふ事を失つてはなりませぬ、

様斯なことは昔より當今の夫婦間に於て多く見受けるやうでございますが、之に就て一の實話を致しませう、私の故郷は石川縣加賀國金澤で、舊前田様の封國でございます、私の生家より程遠からぬ所に永町と云ふ武士屋敷がございまして、姓名は且らくお預りにして置きますが、其所に百石禄を頂戴して、算用方只今で申す、會計の役を勤めて居りました一人の士がありまして、才もあり智恵も劣らぬ方でありますから、時めかしう人にも持囃され、従つて其家の構造も白壁造りで、中々立派なものでございました、所が其人は金錢の自由になる所から、遂に上の貨財を引負したのであります、その當時の上のお方と云ふものは、皆孰れも鷹揚なるばかりで無く、殊に金錢の事に就きましては皆無無頓着と云ふよりは、武士は金錢の勘定を知らないのを貴いとしたのでありますから、一國の國守など丶申すお方は、皆無垢算用の事は御存じ無いのでございますが、阿漕が浦の海士では無けれども、度重なれば知られずには濟まないので、如何も彼はお上より頂戴する御扶持に比較しては、家の構といひ内の暮向といひ、どうも釣合が取れぬ、不思議であると云ふやうに徐々人の嫌疑を蒙つて來たので、遂に其事が今の探偵、

昔の隠密の耳に入りますと、入り替り出替り種々の人が出入り致しまして、如何にも様子が穏かで無いから、親戚の者等も心配を致し、寄り〳〵相談を凝して居ります折柄、その武士の妻たる者は非常に義を重んずる人でありましたから、窃かに考へ心を決する所がありまして、一夜夫に向つて諄々と武士の道を説き、若し不圖としたる事より武士の道を背くやうの事ありては、上に對しては不忠の臣となり、祖先に對しては不孝の身となるので、此の上なき恥辱であれば、此の頃世間で風評するやうに、若しも其が實事であるとすれば中々容易ならざる事であるから、良人は覺悟せられて然るべし、尤も死出の旅路には良人一人を先には立たせ申すまじと、涙を揮つて苦諫せられ、その言の終るや否や、懐より紐刀を取出すと見るより早く、吾と吾が咽喉に突き刺して生害せられますと、その夫たる方も之が爲に翻然悟る所のあつたものと見えて、同じく妻の紐刀を以て枕に打臥して死んでしまはれました。

此の事を傳へ聞きました親類縁者のものは驚きて打寄り、上に願ひ掟の通り検屍を受け、野邊の送りを濟せましたが、此の金錢の引負は事實であつたやうでございますけれども、未だそれが表面に發覺しない前に死んで仕舞ましたから、別に罪も負はず、又入牢の辱めも受けず、殆んど有邪無邪の裏に事が片附て仕舞つて、世間に襤褸も出さずに濟みましたのは、是全く斯の妻女の働きと申すものでございますが、併し何時も私は此の妻女の當時の心事を考へますと涙を禁じ得ないのでございます、

こゝに氣の毒なるは、後に取り遺されました、十二と九つばかりになる二人の孤でございます、その當時は今と異ひまして、十五歳以上の男子でなければ後目相續をさせる事は出來ないのでありますから此の爲に家は開放せられましたので、據ろなく親族會議の結果、亡き父母の冥福を祈らしめんが爲に、二人とも法師の身と致されました、此の二人の法師は何時も托鉢するのに伴れ立つて參られましたから

私なども始終金品の報謝を進せましたが、その後兄なる法師は、名高き祇陀寺の長老とまでなられましたのでありますが、その武士の家は斷絶してしまひましたのでございます。

右に述べました如く、若しもその時に斯の妻が無かつたならば、良人たる會計役の方は、或は繩目の辱は勿論のこと、遂には入牢斬首等の大耻を曝したに相違ないのでございます、けれども斯の妻たる者の働き一つで、斯樣な大耻を世上へ顯はさずに濟んだのでございます。

之に引比べて見ますれば、今日世間で有勝の、謂ゆる暗みの耻を明るみへ出す、その事柄を檢べて見ますれば、實に取り上げて申すまでも無い事柄が多いのでございます、言ひ換へますれば、隱せば隱す事の出來るものを、タヽ僅かに自分の了簡が狹い所よりして、出すまじき家庭の耻を世間へ曝すやうになるのでありますれば、呉々も前に申した歌の心を味はつて、單に綿の襤褸ばかりでは無く、總て家庭の襤褸を世間に見せぬやうにするのが妻女たる者の務めでございます。

胃腸の養生法（承前）

醫學博士　長與稱吉

魚類の話

魚肉の一般の性狀

魚類は古くより既に吾人の食用に供せられて居たこれ、何れの地に於ても獲られるのと、輙く捕へることが出來るからであらう。

魚肉は一般に柔軟で、咀嚼し易く、消化することも速かであつて、胃腸を煩はせることも少ない。而かも其の味、脆美にして多量の蛋白、脂肪質を含み、頗る滋養分に富んで居るのである。

けれども餘り多量の脂肪分を含んで居る青魚族―

鯖、鯡、秋刀魚、花鯽、鰯、松魚等――のものや、醃藏品にしたものは、往々胃を害し消化を妨げることがあるから、胃腸の官能が衰弱つて居るものには、注意して多くを與へない方が良い、即ち胃病のために、始終げふげふやつたり、心窩部の邊に停滯、膨滿、又は壓重しい感じのある時には、用ひぬがよい。

凡ての肉類は煮たものよりは、生肉の方が消化し易い事は前にも言つたが、殊に魚肉の生は、熱煮たものや、炙焙たものより遙かに消化の度が速かであるから、魚軒や、洗鱠は實に最良の食品として、病者に薦められるのである。

然し魚肉にも寄生蟲の居ることを忘れてはならぬ。夫の鮭や鱒には、往々豚に居るやうな條蟲胞子を宿し、又其の他の種族には「ヂストマ」といふ寄生蟲を宿して居るものがあるから、此點には深く顧慮する必要がある。

寄生蟲は一般に河魚に多い、殊に常陸の霞浦に捕れる魚類には、「ヂストマ」を宿つて居るのが多い事は、爭ふべからざる事實である。故に此の害を避けやうと思へば、食べぬに若くはない。然し食べなければならない場合には、「ヂストマ」が居るものと假定つて、煮びたしにして食すれば危險がない。煮びたしとは、一旦乾したのを燒いて、更らにそれを煮て食ふことをいふのである。中々面倒なことであるが、念には念を入れよ、といふ事もあるから、是れだけの手數は必ず怠つてはならぬ。

女鑑の讀者諸君は皆、霞浦の魚類を食せられる譯ではないが、「ヂストマ」に就いてフト霞浦を想起したから序でに記して置く。

魚肉撰擇上の注意

新舊の鑑別點

魚肉は一般に獸肉よりも腐敗に傾き易い性質がある。腐敗すると直ぐ「プトマイン」といふ恐るべき毒物を發生するものだから、極めて新鮮なのを撰んで

食べないと、往々中毒られることがある。

先づ左の諸點に注意せよ。

(一)色。新鮮なのは固有の色を有し、且つ美はしいみづ〳〵した、光澤を放ち、殊に

(二)腮。の肉が鮮紅色を呈して居る。が舊いのは暗紅色――紅みが暗黒んで居る。近來この腮に紅を塗つて人を瞞着する惡商人があるから、油斷が出來ぬ。

(三)眼。眼球が透明で、光輝があつて、僅かに豊隆があるものは新鮮な證據、其の反對に眼球が陷沒んで、不透明なのは舊い徴だ。

(四)鱗。鮮魚の鱗は逆にこきわけても容易に落ちないが、早く脱げるものは良くない。

(五)臭。臭いものは無論惡い。

(六)質。鮮魚は肉がしまつて居るので指で壓して見ても、指痕を止めない、指で壓して痕のつくのは腐肉――少なくとも惡い證據である。

第三表 魚類の分析表

注意! 此には凡て(グラム)を以て示してあるのだが例へば蛋白が一二、三とあれば原品百匁の中に十二匁と三分ある譯になるのである。

品名	蛋白質	脂肪	水分	灰分(鹽類)
鯛(脂肪の多いところ)	一七、六五	三、〇七	七七、九〇	一、三八
比目魚	一九、一六	〇、四七	七九、二五	一、一三
鰈	二一、九三	〇、七四	七五、八八	一、四五
鮎	一七、六六	一、八九	七八、九〇	一、五五
鮪	一五、九七	一〇、六四	七一、七五	一、八二
松魚	二五、〇六	一、三一	七二、七三	一、〇〇
松魚ぶし	七五、六〇	五、一一	一四、二七	五、〇二
鯖	二一、一〇	四、八八	七二、五〇	一、五二
鰶	二〇、四三	四、七八	七三、三四	一、四五
鮒	一七、八六	一、四五	七九、四六	一、二三
鱸魚	一八、〇九	〇、六〇	七九、九九	一、三三
鰤	二一、九六	一、四五	七五、四三	一、一六
穴子	一六、七三	〇、六〇	八一、五一	一、一七

鯉	一八、九四	〇、八三	七八、八六	一、三七
鱸	一八、六二	二、五九	七七、七〇	一、〇九
鰯	二一、三九	六、七二	七〇、二五	一、六四
鱈	二一、〇〇	〇、七五	七六、七二	一、五三
石斑魚	二一、〇三	〇、四五	七六、九五	一、五七
花魷	一七、九五	六、二〇	七四、七一	一、一四
虎魚	三三、一四	一、七二	七四、七四	一、四〇
鰻	一八、〇九	一一、五三	六九、二四	一、一四
泥鰌	一八、四三	二、六九	七七、三三	一、五六
烏賊	一九、一三	〇、五六	七八、九一	一、四一
[illegible]鮭	二六、一〇	三、一四	六一、五六	九、二〇
竹麦魚	一八、二三	三、三〇	七七、三八	一、二〇
大口魚	一五、六七	〇、二四	八二、七八	一、二五
白魚	一八、七三	〇、三〇	七九、三九	一、五八
秋刀魚	二八、七〇	六、五九	五六、七五	七、九五
鮭(生)	六八、四四	一三、八六	一〇、八五	六八、五〇
同(干物)	一八、一九	八、〇二	七二、一〇	一、六九
鰊ノ子	二〇、六四	一、二五	七七、六六	〇、四五
龍蝦	二一、五二	〇、四二	七六、二九	一、七七
章魚	一六、四三	七、五五	七四、三七	一、六二

貝類の話

貝類の一般性状

貝類は一般に其の質、強靱で、消化しにくい。故に歯牙の不健全なもの、胃腸の弱いものには不適當である、石決明の如きは特に多量の蛋白質を含んで居るのであるが、不溶解性で、多食すると却って害になる事の多いのは殘念である。

然し唯獨り、牡蠣ばかりは最も柔軟で、溶け易く、味もよく、且つ滋養分に富んで居るのである。殊に近來、牡蠣には「グリコーゲン」と云ふ滋養分を含んで居るといふので、旺んに病者の食品として賞美さる。

牡蠣と「グリコーゲン」

「グリコーゲン」とは如何なる性質のもので、又如何なる効能のあるものかといふに、吾々が日常攝取

つて居る所の澱粉質――廣くいへば植物性食品は、消化機の作用で砂糖に變化し、それが循り環つて肝臓の中へ來て、茲で「グリコーゲン」といふ一種の動物性澱粉となつて、貯へられるのである。

故に此の「グリコーゲン」が多量に、肝臓内に貯へられてゐれば、吾々は數十日間、食事をせずとも生存て居ることが能る。といふのは此の「グリコーゲン」が食物の代りになつて、補ひをするからである。彼の蛇や蟇などが冬季中、土中に蟄居して何んにも食はずに生命を保續けて居るのは、全く彼等が、春夏の頃に食へた所の食物が「グリコーゲン」となつて、肝臓内に蓄積つて居るからである。

吾々の身體もこれと同様、或る程度までは此の「グリコーゲン」が消耗の用に立つのである。だから肝臓は一種の穀物倉と見て差支へない。吾々の身體が飢餓に陥ると、各部の成分が消耗されるに前ち、肝臓は先づ自家の倉庫を開放いて、御用米をどしどし飢餓地へ供給するのであるから。

牡蠣は以上の如き大切な性質を有つて居る「グリコーゲン」を、少なからず含んで居るのである。

第四表　貝類の分析表

品名	蛋白質	脂肪	水分	鹽類（灰分）
石決明	二四、五八	〇、四四	七三、〇〇	一、九八
牡蠣	八、四五	〇、八九	八九、八九	〇、七七
蛤	一三、一九	〇、八一	八四、一二	一、八八
鯏	一三、二〇	〇、七七	八四、〇七	一、九六
魁蛤	一五、七九	〇、四五	八二、〇四	一、七二
蜆	一八、四〇	〇、八四	七九、五七	一、一九
貝柱	一一、〇八	〇、五六	八六、一六	二、二〇
馬鹿貝	一八、〇九	〇、二二	八〇、三七	一、三二
雲丹	二九、二二	八、七〇	四一、九五	二〇、一四

乙　植物性食品

第一類　穀類の話

穀類とは禾本科植物に生る果實の總稱である。次に掲載する米、麥、粟、黍等は此種に屬し、古くよ

り我が國民の主食として重用ひられ、又は酒、酢、醬油、糕菓等の原料に供せられるなど、其の用途の汎いこと、實に植物性食品中の冠たるものである。其の中の成分は、次の表に依つて知らるゝ通り、澱粉質が主で（動物性食品は蛋白質が主であるが）次が蛋白、脂肪分、木纖維等である。

木纖維などいふものは、動物性食品には曾て無かつた、植物性食品には是れだけ、餘計なものがある、これ本品の特異とする所で、決して餘計なものではない。

素より木纖維は營養といふ點から言へば、何等の効能もない即ち身體の成分になるものではないが、唯其の德とする所は、腸管を刺戟して其の蠕動機を亢進めさせることとである。故に

野菜類を多食すれば必ず下痢を起すのである。これ日常吾人のよく實驗する所で、木纖維が腸管から吸收せられないで刺戟を事とする證據である。

斯の如く木纖維は腸管を刺戟するものであるから、下痢に患んで居る者は勿論、些細な事で直ちに下痢を發する傾向のある人は、野菜類を食するのは、大に加減ものであるが、然し決して排斥すべきものではない。常習便秘といつて常に大便が秘結つて居る者や、肉食ばかりして居て便秘を來した時には、野菜類は實に良好の下劑、天然の藥品として歡迎すべきものである。

尙ほ野菜のことについては後章に詳しく話をする。

第一表　穀類の分析表

品名	澱粉	蛋白	脂肪	木纖維	水分	灰分
白米	七一、九五	六、八二	〇、二九	〇、四四	二〇、一三	〇、三七
玄米	七三、四〇	八、八〇	二、二〇	一、〇〇	一三、五〇	一、三七
糯米	七二、一〇	八、五〇	三、二〇	一〇、〇〇	一四、三〇	〇、九〇
大麥	六五、五一	一一、一六	三、一二	四、八〇	一三、七八	二、六三
裸麥	六六、一〇	一三、〇〇	一、五〇	三、〇〇	一四、四〇	二、〇〇
小麥	七一、六〇	一一、〇〇	一、二〇		一四、五〇	一、七〇
粟	六五、三四	二、五七	五、五五	一、六五	一三、三四	二、五五

黍	六九、七〇	一〇、三七	三、六〇	〇、九一	一三、六〇	一、八〇
玉蜀黍	六四、五〇	九、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	一四、五〇	二、〇〇
蕎麦粉	六三、六〇	一五、二〇	三、四〇	二、一〇	一三、〇〇	二、三〇

米の話

米は東洋人種にとりて實に穀類中の帝王とも稱し尊ぶべきものである。

ケーニヒといふ學者は「米は素と支那に產し、朝鮮を經て日本に渡り、次いで波斯、東部亞弗利加等の方面へ傳播つたものだ」といつて居る。兎に角我國にありては已に上古の代から栽培の途ひらけ、日常の食用に供せられて居る事は、史乘に徵して明かである。

○○○○○○○○○玄米と白米との比較 するに、玄米の方が一般に滋養分に富んで居る。分り易くするために表を以て示すと

	玄米	白米
澱粉	七三、四〇	七一、九五
蛋白	八、八〇	六、八二
脂肪	二、三〇	〇、二九
木纖維	一、〇〇	〇、四四
灰分	一、三七	〇、三七
水分	一三、五〇	二〇、一三

これによつて見るときは、水分は白米の方が多いけれども、其の他の成分は皆玄米の方が多い事が分明る。斯の如く其の成分に著しき差異を生ずるのは何故かといふに、玄米から白米に精搗るまでに「ぬか」を除却られるからである。

米がまだ穀皮を脫したばかりの時(即ち玄米)は、甚だしく容色が惡い。これ其の表面に『種皮』を被つて居るからである。然るに種皮を去つて白米となれば、色は白くなるが種皮が含んで居るだけの成分が消失する。これ玄米の白米に優る所以

然らば玄米のまゝで用ひたらば可からうといふ疑問も起るかも知らぬが、惜いかな、玄米は味が不良い。一種不快な臭氣がある。加之種皮の中には、不消化な木纖維が多いので、白米のやうに早く消化吸

収されない。これ北の欠點である。

米の良否を定めるのに、單に其の中の滋養分の多少を以て決することは能ぬ。宜しく左の諸點に據らなければならない。

(一)質　子粒が豐肥りとして居て、質が硬く、量目が重いもの。且つ分析して見て脂肪分及び灰分の少ないもの。

其他搗滓の多いものは不良い。

(二)色　つやつやして居て、白色點の少ないもの。

(三)形　子粒が長みかゝつて、表面の縦線が淺く、且つ正しいもの。

(四)味　何となく佳味のあるもの。

内地の產米であつて、以上の要件に適つて居るものは、凡てこれを『模範米』として推賞するに足るのである。然し外國の市場では、唯子粒の大きいのを以て善良として居る。

要するに内國米は子粒は小さいが、養分は豐富である。殊に中稲は、早稲、晩稲、陸稲等よりも滋養分に富み、西南地方の產米は頗る優等の位置を占め、北方へゆくに從つて劣等なり、臺灣產は概して味が惡く、品質粗惡である。

新春料理の成分

	水分	蛋白質	脂肪	含水炭素
牛蒡	七三、九三	三、二〇	一、〇三	二〇、六二
蓮根	八五、三九	一、七〇	〇、〇八	一〇、八六
蒟蒻	九一、七六	一、〇〇	〇、九七	六、四三
慈姑	六九、二八	四、二七	〇、二〇	二四、五〇
葱	九二、九三	一、四七	〇、七〇	四、三三
水芹	九三、六〇	二、〇一	〇、一三	三、三
薯蕷	八〇、七四	二、四〇	〇、一六	一五、〇〇
椎茸	八九、〇一	一二、八五	一、六九	六七、五一
大豆	一〇、〇〇	三三、四四	一七、六〇	二九、二六
牛肉	七六、七〇	二〇、〇〇	一、五〇	灰分 一、二〇
鶏肉	七〇、八〇	三、七〇	四、一〇	一、一〇
鯣	七〇、八二	三、六五	三、二	一、〇九
鴨	二、〇八	六九、五三	三、三	六、一七

歐洲に於ける低能兒教育

文部省視學官　乙竹岩造

低能兒とは能力の低い兒童と云ふ事の畧語である此の低能兒に關する教育と云ふ事は、最も近頃になつてから注意を拂はるゝやうになつたので、それ以前は毫も是等低能兒の身心の事に關しては特別の注意は拂はれて居なかつたのである、然るに最近に至りて之が特別の調査に從事して見た所が、普通の兒童に比較すると非常に差異があるので、到底普通の兒童と共に之を教育する時は、如何に教師その者が苦心しても無効になるのである、けれども若しも之に對して特殊の教育を施さば決して嘆くべきものでは無いのである、また是等低能兒の爲に特殊の教育を施すと云ふ事は、愛の教育上より見ても、はたまた教育政策上國家の事業として見ても閑却せらるべきものでは無いのである。

一體低能兒と云ふものは、之を普通の兒童に混じて措く時は、即ち是等低能兒の在學時代は、ツマリ學校の厄介と云うては少しく語弊があるかも知れんが、兎に角世話の燒ける兒童である、而して若しも其儘是等が學校より社會に出でたる時は、社會に於ける道德上、智力上および經濟上の手枷足械となるのである、されば之に特殊の教育なりとも加へて有用にすると云ふ事は、教育上は勿論、他の點より見れば形而上政策として最も焦眉の急務と云はねばならぬのである。

所謂彼の不良少年と云ふものは、風儀を紊し人道を賊ふのみならず、屢々罪惡を犯すものであるが、低能兒は或點に於て此の不良少年の弟なるが故に、形而上の政策として之を感化せねばならぬのである約言すれば、愛の教育上および社會政策上に於て多大の發達を庶幾するには、此に二個の原因のある事を遺れてはならぬのである、その一は教育上と、他は醫術上との此の兩方面である、即ち小兒科の醫士たる者は、或點までは教育者を以て任じて貰はねば

ならぬと同時に、或點まで敎育家は醫士を以て任じて居らねばならぬのである、換言すれば、敎育家は醫術を研究し、醫士は敎育を攻究して措かねばならぬのである。

而して是等低能兒を敎育するに就ては、特に幼兒保護園といふ樣なもの丶設備を要するのが第一で、第二には就學兒童の年齡よりは、寧ろ能力の如何に依つて學級を區別して敎育を施さねばならぬ、第三には身心ともに薄弱なるもの即ち低能兒は、他の普通の兒童に比して特に保護を與へて遣らねばならぬ

此の低能兒の敎育に關して、補助學校若くは補助學級と云ふやうな制を設けたのは、抑も獨逸が濫觴である、前世紀の中頃より着手したので、其以前は副級とか補助とか云ふ名稱で行はれて居たのであるけれども、一千八百五十九年九月二十九日に、市の學校長が集りて開かれたる會議錄を見れば、その時十七名の低能兒の爲に、ハウプトン氏の發言に由りて、是等低能兒の爲に特に二時間づ丶の敎授を施す

と云ふ事が議決せられてある、之が具體的に顯はれた始めで、其後ドレスデンに於ては、女子の低能兒十六人の爲に特殊の敎育を施すと云ふ事が見えて居る。

而して是等低能兒の爲に、特に編纂せられたる書籍は、一千八百六十四年ステックナー氏が、四十六頁の本を著はされたのが、抑も始めである、是より後ゲル、エルバチッヒ、ライプチッヒ等の諸市にも漸次行はれて來たのである。

一千八百九十三年、チユリンゲルの會議に於て、伯林には未だ此の設備が無いので、特に副級として之を措き、十人を收容したが、幾くならずして故の學校へ移された、而して爾後は低能兒のある每に、之を一定の場所に集めて敎育を施し、その普通兒童と略同一に進むを待つて、原の學校へ復歸せしめたら宜からうと云ふ事に決議せられたが、此の目的は距離と特定との爲に達する事を得なかつた。

一千九百三年に至りてプロイセンでは訓令を發せ

られた、その要旨は、第一に敎育家は必ず醫士と協力すべき事、第二には一學級は二十五人に限る事、第三には是等の受持敎員は優遇すべき事、第四に時間は、普通の學校の半分とし、最上級に至りては普通學校の中々級に準ずべき事、第五には身體上の實力に注意すべき事等である、その後再び訓令を以て多少變更せられたが、大した變りは無い、而して全國四十二の都市に普及せられて、二百三十三學級、四千七百二十八人を收容するに至つたのである、加之のみならず、遂には學校醫なる者が之に參加する事になつたのである。

一千九百五年一月十一日の調査に依れば、獨逸全體に於ける低能兒敎育の學校は十八ヶ所であつた、學級は四百九十二に分れて居る、而して之に收容せらるゝ所の生徒の數は、男が五千八百六十八人、女は四千七百五十三人と云ふ盛況である、單にベルリンのみでも五百三十八學級で、六千六百二十三人の總數生徒の中で、三千三百三十人の女生徒が收容せられて居るのである。

隣國のオーストリーのヴエンナに於ては、一千八百九十五年頃より初めたのであるが、降つて一千九百二年に至りて、低能兒敎育會議と云ふものを開かれて、普通の小學校と密接して大いに之が特別敎育に努めねばならぬものであると云ふ事を議決した、當時ハンブル市の人口の半は殆んど此の低能兒を以て充たされて居るとまで、ドクトル、ナーライス、ザポー氏は極言せられた、ソコデ同氏は、學校に於て普通良兒の敎育を掌る敎師は、固より善良なる者を擇ばねばならぬが此の低能兒の敎育に與かる敎師は、その良敎師よりも、更にヨリ良き敎師を擇ばねばならぬを揚言せられました。

此の外瑞西では、五十三ヶ所に一千九十六人の生徒を收容して、十二人の男敎員と四十三人の女敎員とを以て之を敎育しつゝあるので、以太利では、一千八百九十八年以來、國民の組合とも稱すべきものを設けて、銳意之が研究と實行とに努めつゝあるの

である、尙ほ佛蘭西、瑞典、露西亞、丁抹、白耳義、英吉利、米國等にも皆それ〳〵設備がある、殊に米國の如きは官立のものがある、而して英京ロンドン市内のみにても六十ヶ所あつて、之に收容せらるゝ生徒は三千六十三人であるが、尙ほ詳細に調べる時は五千人以上もあるとの事である。

右に述べたるが如く、歐米各國には殆んど之が設備を見ざるの地は無いと云ふ盛況であるが、是等歐米の各國で之を設くる所以は何に基くものであるかと云ふに、此の低能兒なる者は所謂白痴では無い、又所謂不良少年でも無い、故に白痴院や感化院に收容すべき者とは撰を異にして居るのである、併し之が教育の一歩を誤れば、忽ちにして感化院に收容すべき者と變ずるのである、故に如何しても是等を教育すべき特殊の設施を要すると云ふのが一大原因である、第二のものは統計より得たるもので、ハレイ氏の調査に依れば、人口十六萬内外に對して、二百十五人乃至二百二十五人あることを確められたのである、一千九百三年、ウイッターマン氏の調査に依れば、此の低能兒は工業地に多い事を發見せられたのである、尙ほ親切に云へば、住民の職業の種類、生活の程度等に基くものである、尤も或一部は遺傳に因る者もある、同氏の統計に依ると、二千三百八十人の兒童に就て、百分の二八、三は肺病、百分の二○は癲癇、百分の一六の三、八は飲酒その他不攝生、百分の五は近親の結婚、百分の三○は誕生の時の狀態に起因する、此くの如き統計を得られたのである、生活狀態の中には營養不良、過度の勞力、不適當なる教育を受けた等種々の原因もあるのである。

依つて我國に於ても、今より大いに是等低能兒の爲め、否、愛の教育のため、及び道德上、智力上、經濟上のため、約めて云へば社會政策上の爲に最も之が教育を忽がせにする事は出來ないのである、然して直接之が任に當る者は即ち教育家と醫家とであるから、今より相提携して行かねばならぬのである。

美はしき顔

日本女子大學校長
成瀬仁藏



老いたる者は年を忘れ、幼き者は年を數へて、何れも新年を最も希望に滿ちて迎へるであらう。門には松竹を建て、家の内には齒がための餅や、屠蘇を祝うて、人々は初日の如き希望を傷けざらん事を希ひ、凡て不祥の事を忌むであらう。正月は一年の首途である、出來うる丈け注意して、三百六十五日の旅路を倦まず、疲れず、めざす一段の高嶺に達する事が出來るやう、まづ最初に於て躓かぬやう計らう事は、決して徒勞の事ではない、否、大に務むべき事である。敢へて迷信がましく外形をのみ墨守せよとにはあらず、よく〱其の眞意のある所を掬んで、外形に精神の添ふ樣にしたならば、一本の松竹もよく福音をさゝやくものである。而して門松よりも、屠蘇よりも、最も新年の感を幸福にするものは、人々の顔である。即ち美はしき顔である。

扨て美はしき顔は化粧によつて出來るか、健康によつて得らるゝか、心の持ち方によりて表はるゝか。普通世間では化粧によりて得らるゝものと考へられて居る。然し化粧の美、所謂人工の美が、どうして骨格完全に發達し、血色爽かな健康の美に優る事が出來やうか、彼れは死せるもので、これは生けるものである。然し健康の美に只一つ優るものがあるそれは即ち生けるものを、更らによく生かす精神の光りが表はれた美である。人或は精神の美が、しかく明らかに顔にあらはるゝものであらうかを疑ふであらう。疑ふ者は未た經驗極めて少きものである。かりそめに街を歩む人々を見てさへ明らかに分るではないか。兵士が姿勢を正し、歩調を揃へて、士官の號令のもとに進んで行くのを見れば、誰れしも美しいと思ふであらう、彼れ等は眞摯である、側目もふらぬ、其の心には職務あるのみである。またと

へ荷車を曳く若者でも、一心に重き荷を曳いて行くさまは美しい。彼れの目は目的を以て輝いて居る。彼れの手足は努力しつゝ、目的に向つて勇んで居る。之れに反して威儀正しう、人の師表と仰がるゝ者でも、其の職務を忘れて、只己れの名譽の爲め、利益の爲めに迷うて居るものは、甘言の裡から針が露はれないでは居らぬ、微笑の後ろから權が見えないでは居らぬものである。即ち僞善の面は、忽ちはげて迷ひあがく、醜きわれは明らかに後ろに立つあるを覺ゆるものである。

精神の表現とは、畢竟人格の表現である。其の人格の最も美はしきものは、凡てを凡ての爲めに捧ぐる事が出來る人である。己れの凡て即ち地位も、富も、名譽も、一個人、或は一家族に捧ぐる事は誰しも出來る。然し稍廣く、一町村の爲め、更らに大きく一國の爲めに捧ぐる事は容易ではない、然るに凡てに凡てを所謂人類一般に已れの全力を捧ぐる事は至難の業である。然しこゝ迄達しなければ、人格は磨かれたとは云へぬ、人格は價値あるものとは云へぬ。少くともこの域に達せんと務めなければ、人格は出來ぬ。

己れの全力を一大目的の爲めに捧げんと欲せば、先づ精力集中といふ事に習はねばならぬ。精力集中は一つの技術で、只言葉を以て理解しても不可である。自らの經驗によらなければ、わが有とする事が出來ぬものである。余は幼時常に「若し父親の學識を其の儘、讓りうくる事が出來たならば定めし幸福であらう」と考へた。然しこれは到底望んで得べからざる事であるにも拘らず、今の學生は一般に教師、先輩の學識を、手を拱いて讓り受けんことをのみ望んで居るから、智識をうる事が出來ないのである。眞に學識を得やうとならば、どうして之れを求める方法を講じないのであらう。即ち精力集中を實驗するに於て、始めて驚くべき力を發し、凡ての智識を同化して、已のが人格、學識を作ることが出來るものである事は、恰も凸レンズによつて、散漫せる微

弱な光線を集中して焼點を作り、其の焼點から發する火に薪炭を加へて、如何なる烈火をも發するを得ると同一である。我れ〳〵は先づ精力集中を試むるに當つては、凡ての障害物を破壊し、凡ての關係を統一して、心に焼點を作る事に努力しなくてはならぬ。この努力は、意志、即ち智識と感情との一つに結合したものによつて得らるゝのである。さればこの意志によつて精力集中する時は、人各々の特性は發揮して、此處に天才はあらはるゝであらう。天才はかの西哲の言の如く、努力の力強きものを云ふのである。

この精力集中は、現時の我が國民の最も短所とする所である。然らば如何にしてこの力を養ふ事が出來るか。

第一、内に其の源を求めなくてはならぬ。其の源は心に起るインタレスト（適當の譯語なきも、利益とか興味とかいふもので、一言で云へば必要である。要求である）である。即ちこの要求は人に非常な興味を起さしめて、精力集中をなさしむるものである。例へばかの日露戰爭に於ける國民の驚くべき一致協力は、國民が敵を亡ぼして以て、我が國家、我が主義を生存せしめんとする生存の興味に起因するものである。

第二、四圍の境遇による。外部の刺戟によつて暗示を得、恰も平穩の海上に、一波高くあがれるが如く、時にわれ等の胸中に高き波動起る事は、精力集中の爲めに大切な事である。之れ境遇に順應せんとする興味といふも可なるものである。

第三は内に發するものと、外に起るものとの關係をつくる我れ等の意志による。

以上の三要素に留意する事は精力集中の爲めに大切である。我が理想、我が主義、我が意志のコンセントレートする時は、前述の三要素が關係よろしきを得た時である。

人々は國民として、人としての大なる目的に、先づ精力を傾注して、人格の價値を發揮し、其の上に

希望を求めつゝあるならば、其の眼は不滅の光りに輝くであらう。其の類は不朽の望みに活々として居る事が出來やう。而して其の口は常に人生を讃美して止まぬであらう。世の中にこれほど美はしい顔がまたとあらうか。余は新年に於て互に先づ見ゆる顔がかくの如く美しくありたいと希望して止まぬものである。

職業撰定の苦心談

梅村小吟子

私は折角のお訪ねに預りましても、別にこれぞと申してお話の材料を有ちませぬのみならず、事業も未だ成功の緒に就きませぬので、實にお恥かしいのでございます、故郷で普通學を修めまして、丁度今より十年以前に東京に出ましたのでありますが、それは看護婦が志願で、此の看護婦になるに就ては、實は兩親も不承知であつたのでありますが、私は

如何しても此の看護婦となつて

　同胞の窮厄を救ひたい

と云ふのが志望で、誠に兩親には濟まないとは思ひながらも、心に詫びながら醫科大學の病院へ志願書を出しました所が、直ちに許容されまして、即ち神田和泉町の第二醫院附を命ぜられましたので、毎日これに勤めて居りました、サテ中に入つて見ますと却々門外で考へたやうなものでは無く、隨分辛い事もありましたが、モト〳〵自分から志願する位でありますから、是ではならぬと始終自分で自分の氣を引立てゝは勤め大事にいたして居りますと、明治三十四年二月、丁度當直の夜に、圖らずも火災が起りましたので、サテ一大事、醫院の貴重書類は勿論であるが、若しも患者の方々に不慮の事があつては容易ならざる事と、右往左往に驅け廻ります内に、何分火の廻りが早いので逃場を失ひ、二階の窓より飛びおりました爲に、酷く脊椎骨を打ちまして、その後歩行も叶はなくなりまして、今は自分が病床に

呻吟すると云ふ始末に立ち至つたのでありますが、初めお醫者は脊椎の挫骨神經であると申されましたが、併し夫程大した程でもありませんでしたけれども、何分捗々しく治りませんのみならず、お醫者様の御仰るには、縦ひ治つたとて、最早看護婦は斷念するが可い、若し强て其を勤むる時は、十年保つものも三年か五年に命を縮るのであると忠告を受けましたのと、一は自分ながら如何も健康が、今も尙ほ當時のやうで無いので御座いますから、その當時は尙ほ更らの事でありますので、殘念とは存じながらも、遂に看護婦は斷念する事と致しましたが、さればとて今日より

親や兄弟の厄介になるのは忍びない

から、何んとかして獨立の生活を營むだけの途を講じなければならぬと、種々に苦心を致しました結果琴曲、裁縫、生花、寫眞の四科を撰びて、之を某醫學士に相談いたしますと、貴女は先頃の怪我をしたのであるから、裁縫や琴曲の如き技藝は身體を屈めるから宜くないのみならず、運動の不足を來たすものは一切宜しく無いと云はれますので、豫て北海道に在住の阿兄より、是は只今物產業を致して居りますが、是より時々アイヌの寫眞などを贈られて、多少之に對して興味を有つて居りました所よゝ、傍々運動も十分に出來ますので、

寫眞術を撰定いたして

之を攻究する事と爲つたのでありますが、之に就ては、當時大學に在勤の田村醫學士は非常に便宜を與へて下さつたので、今も尙ほ 私 は之を德として居るので御座います、それより後、

私が女子美術學校へ入る動機

は、如何も寫眞の背景に造花の必要を感じましたのでであります、私などは彼の學校の第十期の卒業生でも、至つて成績の惡い方で、却つて私の口から此様な事を申しあげては、學校が御迷惑でおらうと存じますので御座います、サテ造花を學んで見ますと、また一つ慾が殖えまして、如何か多くの女子方に、

斯樣な手奇麗な手藝をお授け申したならば、お互に
　内助の生產力を殖す
ことになるであらうと存じて、有志の方々にお授け申しては居りますが、元來私は塾とか又は傳習所など丶云ふものを開いて、所謂
　先生氣取りは大嫌ひ
でありますと、以上は女史の直話なるが、以て女史が今日に至れる一斑を推知せらる丶のである。

迚も相談には乘れぬか

法學博士　添田壽一

現時我國に於ける國債は十何億と云ふ多額に上つて居るので、之も口ではタッタ十何億でありますが假りに之を十億と見積りて、百圓紙幣を十枚即ち千圓束としましても一萬束となるのであるから、却々生優しい金錢では無いのである、併しさう謂つたばかりのものでは無い、その十何億の國債も、今日我國の國民が
　一日タッタ三錢
づ丶餘計に稼ぎ出しさへすれば、實に僅少の時日間に償却が出來てしまふのである、その三錢も、此の東京で云つて見れば、
　僅かに一回の電車賃
を儉約すれば、尙ほ
　二錢の餘剩
があるので、別に心配した程のものでは無い。

古へより天然力、資本、勞力は經濟の三大要素として唱導せられ、今日も尙ほ此の學說が行はれて居るのであるが、多くは天然力と資本とに重きを措て勞力には左程重きを置かない、之は甚だ予の怪訝に堪へ無いのである、何故なれば、その天然力と資本とには限りがあつて、勞力には限りが無い、例へば、滿洲の如き、又は我が北海道の如き、如何に沃野千里の廣袤があらうとも、之を耕し盡した時は最早餘地が無くなる、假令耕し盡さないとして見れば、之

を拓き之を耕すものは勢力である、又資本とても其通りで、例へ三菱や三井の如き富豪でも、その有する所の資本の外には、よしや目の前に數千萬或は數億圓に値する有利の事業があつても、迚も手を着ける事は出來ないのみならず、その今日現在有する所の資本は、その根源に溯れば之即ち

勢力の賜物である

故に資本も亦勢力の助けを假らなければ、之を運用する事が出來ないのみか、新たに資本を得るには勢力を要するのである。

尤も此の資本は、若しも國内で不足を生じた時には、他外國から借入れる、即ち外資輸入と云ふ事が出來るのであるが、之を人體に喩へて見れば、

我國の現状は貧血症

に陷つて居る、その貧血は何が爲に發つたかと云ふに、その近因は日露の戰役である、此の戰爭の爲に我日本國なる人體から多大なる血液即ち國帑と云ふものは吐き出されたのである、ソコデ當局は勿論、民間の有識者は、擧つて此の補缺をせねばならぬと云ふので、歐米の各國に態々人を派してまで此の外資輸入に努めて、その結果積り積りて十何億と云ふ國債が嵩んだのである。

朝野の或部分では、此くまでに其貧血を補ふことに努めて居るにも拘はらず、我國民の多くは尚ほ之に心附か無いのか、但しは心附いて居ても行らないのか、その邊は克く判らないが、其所らを歩くにも懷手をして右見左見と云ふやうに、ブラリ〳〵と緩歩して居る、私が先頃參つた倫敦の銀行町などは、迂ッかりして歩いて居やうものなら、殆んど突倒されてしまひさうである、此く人々に活氣がある、之に比ぶると、全で

我國民は病人である。

實にお話にならない、併し眞成の病人は、癒快つた後には稼ぐと云ふ希望があるのである、けれども今日に於ける我國民の病氣は慢性になつて居るらしく考へる、而して始終血を吐いて居るらしい、何んと

日露の戦役に於て空前の大勝を博し、無上の光榮を擔へる大和民族たる我國民は、斯樣な鹽梅で永く此の光榮を荷つて行く事が出來ませうか。

　甚だ覺束ないのである

と云ふものは、今や國民を通じて戦捷の聲に醉うて居るばかりでは無くして、一般に投機、奢侈、遊惰、浪費、是等の弊風に蔽はれて居るやうに見受けらる、それ故に概して

　勞力を蔑視するの風

が一方には盛んに優勢を占めて居る、

元來勞力には身體的及び精神的の二つがある、孟子の所謂勞力者は力耕し、筆者は筆耕すると云ふが如く、世上には自ら此の二途がある、我國の諺にも

　職に賤業なし

と云ふことがある、此 俚諺は實に能く

　勞力の神聖なること

を道破し得て居るのである、如何も我國民は封建の遺習として勞力を嫌ふの癖があるのですが、元來人類が、生を斯世に稟け來つたのは默約がある、其默約とは、即ち

　各自が天分を盡す

と云ふに外ならぬのである、その天分を盡すを厭ふて、猥りに遊惰放逸に流れて居ては、到底國家の隆盛を望む事は出來ないのである。

　尚ほ經濟學の四大原則として生産、消費、分配、交換等を說きますが、此の中の

　生産なるものは即ち勞力

である、而して此の生産と消費とが宜しきを得なければ、是また

　國家の富强は期せられぬ

のである、今日の如く消費する者ばかりが澤山で、生産者が少なくては、實に

　國家の前途は思ひ遣られる

のである、如何か國民奮つて勞力に努めて貰ひたい

併し此く予は勞力を推奨したからとて、米國流の金錢萬能主義を鼓吹するのでは無い

前にも逃ぶるが如く、今や我國は十何億といふ國債の血を吐き出して居るのであるから、此の貴血を補ふには、國民が一同に氣を揃へて勞力を勵んで貰ひたい、さうすれば此の多額の國債も僅少の時日に於て償却が出來るので、その根本は

十億に對する僅かに金三錢

を一日に稼ぎ出せば宜いのである、此の事を分けてお話しても相談に乘つて異れないとすれば、予は最早匙を抛るの外は無いのである。

加州の言葉

中島春郊

語學をやつても、外國人と思ひ存分の話が出來にくいのは無理のないことで、鹿兒島の人と秋田の人が、邂逅して、互に話しかけるとしたら何うであらう、恐らく通辯がなくては、意思を通ずることはむづかしいであらう、ところでその解らぬといふ言葉はさう多くはないのであるが、それがアクセントの工合やら、聞馴れぬ言葉が挾まるから、話の糸が亂れて聞ゆるのである、そこでわが生れ故郷の加賀の國、所謂加賀ッポー言葉を紹介し、やがては各地の訛を各地の人によつて紹介されんことを望むのである。

この訛といふは、音便の變化と、一二文字餘計な言葉が加減さるゝの、外は名稱に多少の異變があるのである。

一　音便の異りたるもの

▽左様かを左様け　▽斯うでねーを斯うでにー　▽それはいけませんをいきみせん　▽あのそれかをそれけ　▽でざいますをでざいみす

二　語尾に贅澤語の添はるもの

▽左様ちやさうな　といふことを、左様ちやとこといに、

その外けといふ文字を能く添ふ

三　物の名の呼やうに變りたるもの

▽地べた　つゝべ△溝　どべ▽蛇　へーみ▽蜥蜴　トキヤク▽毛虫　オコジヨ▽蝸牛　つのだし▽摘み菜　二葉菜▽南瓜　ぼぶら▽でまめ　海干▽茸　こけ▽鹽鯖　さおしさば▽さしみ　つくり身▽もみ大

根　たばね菜▽眞桑瓜　美濃瓜▽蒲鉾　はべん▽はんぺん　ふかし▽口取　小蓋▽じふのう　せんば▽米櫃　米がらと▽飯櫃　おひつ▽天秤棒　かたね棒▽手桶　ちよとけ▽尻　おんとべ（大人の）ひちたべ（小兒の）▽百足　もかで▽淺草紙　かへし▽眉間　けんばち▽安火　ばんしよ▽丸髷　おてんこ　等

三　通用語の異りたるもの

▽立派　威さどい▽威ばる　いけばる▽法外な　とほうとてつもない▽とんでもない違ひ　土臺違ふ▽馬鹿　だら▽馬鹿らしい　だら臭い▽放蕩もの　どんだくれ▽そゝつかしいもの　おどけもの▽觀音　觀ざん▽天神　てーじん▽耄碌　のもろけ▽佛　ほとき▽父　おとゝさん（上流）おとゝ（下層）▽母　おかゝさん（上流）おかゝ又おじやん▽兄　おあんさん（上流）あんま（下等）▽姉　にやアにや（上流）おあん（下等）▽叔父　おすさん▽親が子に對して何々さといふ（さはさんの略）▽下男の若きもの　ぼーや▽下女の若きもの　べーや▽同中年　女房▽下賤の中年以上のもの　男はとつツア　女はかーや▽妻が他人に向ひ夫のことを　おやぢ▽乳母　ばんば▽飯たき女　箸の子▽擔ぐ　かたねる▽負ふ　ぼんぼ▽殊の外御無沙汰　不興に御無沙汰▽叱る　ひかる▽泣く　ごめく▽すわる　ねまる▽呼ぶ　よばる▽差支ない　だんない▽お孃さん　上﨟さん

四　會話の一例

左樣じやとこと　さうじやさかい　さういひみせんことかいに　あらいやらしや　三によ門のとこのにやアにやが　さういひまつしやいみしたげー　わたしやいはないことかいに　うざくらしや　ものいことになつたぞね　あのこちつぺが

これを飜譯すると　（右の順による）

左樣でございますよ　それですから　さう云つてたじやありませんか　あゝいやらしいね　三右衛門の家の娘がさう云うて居りましたよ　いやらしい物憂きことになつた　あの小さい男の兒が

まづこんなことになる、如上の言葉に注意すれば加州人に對話がすら〳〵出來る、また加州の人も言葉の縮を東京に移すことが出來るのである。

我理想家庭の一實例

中川愛氷

予は多年婦人雜誌の編輯に從事し、多くの家庭に出入するの便宜を得、比較的多くの家庭の内情を知り得た積りである、いづれの家庭に入つても、一度や二度はいかにも美しく見ゆるものであるが、いつも同じ調子で變らない、居心地のよいのは珍らしいそれは初のうちは美しい方面をのみ見らるゝ仕掛になつて居るが、段々障子一重、壁一重、奥深く入るに隨つて、そろ〳〵美しからぬ事が心に見える、目に浮ぶ、滑らんばかりに拭うたる椽の一隅なる押入を開けば、外から見えねばとて手の付けられぬほどの襤褸を取亂してある如く、門戸開放、いつ臺所まで踏込んでも差支のない、秘密などいふ忌はしいものゝない家庭があるであらうか、或豫審判事の話によれば、家宅搜索をして、一毫も眉に皺せずに終つたのは、殆んど皆無といふべき有樣であるとの事であつた、兎角ハイカラがる人は、外國の家庭は斯うである、など、立派さうに云うて居るが、その實外國では人の惡事醜行を摘發することは、新聞ならば小新聞といやしむ如く、すべて臭い物に葢されて居る有樣であつて、その葢をとれば、見られた態でないのが多いとの事である　而して社會の制裁は變則に出來て、上流の人の如きは、葢された中に臭き行をして、日本の如く、桂侯がどうの、伊藤公が何うのといふ工合に、世上も新聞も問題にしないからよい氣になつて、巧に外面を裝うて居るのである、かゝる事を問題にすること、もとより譽むべきではないが、問題にならぬやうの行狀と、それを制裁するには問題を起すことも強ち不必要のことではあるまい、殊に家庭は葢の中の臭いものとなつてはならぬ眞個に圓滿なる美しい家庭には、臭味などいふもの

が一點もあるべき筈ではない、臭きに蓋された、表面だけ立派なのは、恰も蓄ける金庫の如きもので、あまり好ましくない、併し蓄ける金庫の如き家庭が美しき家庭と稱するもの丶うちにも、その百中の九十九を占むるが事實である、歎かはしき現象なれど家庭の多くは僞善の集合で、これ亦致し方のない事である、予は美しき家庭の一例として、曾て本誌々上に親友なる、髮結のお愛さん（戸根愛子氏）を紹介し、併せて如何にして美しき家庭をつくり得たるかをも記述したが、更に亦知人中より一例を得たれば、いさゝか紹介の勞を執らうと思ふ、

實例の場所

淺草は厩橋の附近、黒船町廿八番地に、齋藤松三郎氏といふ毛拔師がある、毛拔師と云ふのは東京で六軒、其他の地方を併せても指折る程しかない、毛拔と云へば一寸見ると、如何にも單純なる細工品で少し學びさへすれば、誰にでも出來得るやうであるが、これは上中下があつて、上等品になると、中々むつかしい呼吸の入るもので、數回の博覽會に毛拔を出品したものは五人や八人はあるが、賞牌を授與されたのは氏一人で、普通品を製作し得らる丶弟子はあるが、氏の後を襲いで、上等品を製作し得らるゝものはない、即ち日本一の毛拔師で、こんなに拔く毛があるものかと思ふばかり、幾千幾百といふ注文を常に引請けて居る、併し一の職人で、境遇はといへば、遺憾ながら上等社會と云ふことを得ない殊に氏の母は、世間より藝人として、下等視せられて居る清元の師匠である、交際する範圍も無論中等以下で、目に見、耳に聞くもの、兎角に上品なとが少い、その間に造られたる家庭、尋常ならば女鑑誌上に披露する譯には行かない筈である、

家庭に理屈は禁物

境遇か境遇であるから、言語動作、之を一々上等社會の狀態を以て律する譯には行かぬ　氏の母なる

人、他所より持歸りたる心づくしの土產、先づ氏の妻君の前に提出されて、さア暖かいうちにお食り、と云ふやうな鹽梅でこの社會には得て有勝なる我生の子をのみ偏愛すると云ふのでない仕方であるから、妻君の心中になりても嬉しい、なアに私は何うでもよろしい、今に松ちやんが歸るから、松ちやんに上げて、それからいたゞきます、すると、姑の心も亦うれしくない事もない松は戶外へ出て御馳走になることが多いから、松に遠慮は入らないよ、是はお前に食べさゝうと思うて



持つて歸つたのだから、と斯う云ふ有樣で、姑と嫁との間が極めて圓滿に行く、姑となつての心掛も大切であるが、嫁としての働き振が姑にかくさせるのでこれはその間に於ける一例であるが味ふ價値が充分わらうと思ふ、妻君は名をお梅といひ夫の職業を助けて現時廿一歲になる娘を有てる今日に至る迄、膝を並べて毛拔の手傳をして居る、互ひに働くので、夫婦一度の口喧嘩さへした事なく、常にいたはり合うて、職業を樂んで執つて居る、上村男爵

双方に子供があるので、折合がよく行かないのが常である、然るに氏は毛抜をつくる職人にしろ、日本一になる位な人であるから、性質が正直で、日々鐵を曲げても心は素直に伸びる一方で、學者もとより貧といふのが、富を渇望する今日、清貧に甘んじて義理と人情の盡さるゝ限りをつくし、妻君もそれに感化され　今關先生とも長の年月同居して、親切に交はり、學者として敬意を表し、その娘をも我子と同じやうに愛しむので、不平などの聲は半句も洩らすものはない、敏子といふは、女鑑編輯局の催したる女子教育講演會に、餘興として富本を演じ、大なる喝采を博したる、日本音樂に堪能の人である、この師匠富本豐鶴といふは、數年前名見崎得壽齋とて現今東京音樂學校にて俗樂研究の爲に聘せられたる名見崎の家元より數年前紹介され、予は同流を再興したる關係より藝名を與へた關係のある人で、その關係より自然知合となり、その藝の妙を數回紹介したることもあつた、同女は十四歳の頃、自分の一家

が未だ微々たる身分の頃、令夫人は夫君の留守を預つて、淋しく暮して居られた時の事である、その向ひの家が鹽煎餅屋で、夫婦手狭なる店頭で、中睦まじげに、鹽煎餅をつくり、それを賣りて、僅かなる利益より得たる家庭の快樂、餘所の見る目も羨ましく、自分もかゝる家庭をつくりたきものよ、と云はれたさうである、予はこの言に尤も同意するもので家庭は家人よく働き、睦まじく團欒するを以て能事とし、その間に一點の理屈も無用である、理屈の多い家庭は、沙漠に等しい家庭で、決して些の暖か味もあるものではない、

その藝よりもその心

氏の家庭は、妻君のお梅さんの外には、敏子といふ娘にその弟、同居に妻君の兄なる人で、今關先生と呼ばるゝが、男の手一つで十四を頭に娘二人を率ゐて居られる、それに内弟子、都合八人、今關先生と云ふのは小學校の敎師である、敎師と職人、殊に

が自分に教育する資力なしとて、學校を退き、專ら家事の手助けをなし、富本の如き殊更に學びたりと云ふ程にあらずして、暇のある時は僅かの稽古や、聞覺え位にて、藝の妙に入り、よろづ物を覺ゆることの鋭きも、境遇上發揮する能はざるは誠に氣の毒な話である、されど予は物覺のよきこと、音樂などに堪能なることより、その人格を買ふのである、兩親に仕へて孝行に、他人に對しても優しく、如何なる場所にも兩親の許を得ると云ふよりは、兩親とならでは、月花も面白からずと、たゞ友だちなどゝのみ物見遊參に出掛けたることなく、隨つて品行も堅固で、周圍より耳に溢るゝばかりの雜話も、馬耳に聞流して、一度も浮きたる事を口にしたる事がないその人格だけは女學校の校長にしても差支ないことを確信するのである、

家庭を極樂化す

晝の氏の家は、何れも傍目もふらず働き、今關先生も學校に行き、子供等もそれ〲學校にも行き使にも行き、少しも遊んで居るものはないが、夜になると世界は一變、今關先生はチビリ〲晩酌に春めき、氏は一滴もすゝまねど、美聲をあげて得意の淨曲を唄ひ、妻君三絃をとり、敏子君時に之を助け、或は杯盤の周旋をなし、子供等は悅に入り、恰も極樂世界である、今關先生醉うて、敏ちやんお前は廂髮が似合ふから、以來さうおしな、といへば、でもふウちやんに氣の毒ですから、と答ふ、ふウちやんとは髮結の名(福とでもいふのであらう)さてもやさしき人の心ではある、

家庭は平凡なるがよし

以上を我理想の家庭とすれば、或は如何にも平凡なる如く思はるゝであらう、去ながら、その平凡には容易になられぬので、あまり理屈のつく高尙なものにしやうとするから、一刻も家庭を極樂化することが出來ぬのである、これが毛拔師の家庭であるか

ら、異彩を放たぬのであるが、このまゝを上流にうつし、お前さんがあなたとなり、三絃がピヤノとでもなれば、極めて美しく見らるゝものとなるのであらう、予は殊に下層社會にこの家庭の多きを望むので、世擧つて之に習はゞ、華厳の瀧へ行くものも、裁判所へ行くものもなく、新聞紙上極めて寂寞を感ずるに至るも、月々甚だ賑はしく、太平の民たるを得るであらう。予の最も忌む僞善を捨てたる、理想の家庭は齋藤氏によつて、其實例を示されたのである、この文を突飛なりと云ふ人あらば、それは全文を精讀せざるに坐するものと思ふ、

新年の料理

霞袖女史

一　松二色玉子

玉子をゆで皮をむき白味と黄味をわけ、(白味の内側へ黄味のつき居らぬ樣によく拭ひ)玉子十個の白味ならば、砂糖十匁鹽三匁を入れ、手にてもみつぶし、裏漉しをなし、黄味にて矢張前同量の砂糖と鹽を混じ、なほ玉子一つをほぐし入れ、美濃紙に二分程の厚さにのし、その上に白味を上せ黄身にて一卷にグルリと卷き、布巾につゝみ、直徑一寸位の竹を二つに破り、切口を下にむけ、上の凸面の方に前の布巾に包みたる玉子をのせ、玉子の上に適當の距離に箸二本をあて、糸にて箸、竹ともに二ヶ所掛結びむしかごにてむし、あたゝき中に紙をむきとりさまして適宜の厚さに切て用ゆ、

二　てりごまめ

ごまめのあとさきとはらわたをとり、ホーロクにていり、目笊にて鹽をふるひ、ごまめ一升に付生酒五勺、みりん一合、醤油五勺、砂糖二十匁、を合せたる汁にて煮、ごまめに味のつきたる頃を見計ひ、一旦ひきあげ、次に汁丈煮つめて、汁の少量になりたる時再びごまめを入れ、いる樣に掻きまはすべし

三　花蓮根

蓮根の皮をむき、二寸位づゝのながさにきり所々に縦に庖丁を入れ、(小口より切れば花形になるやうに)一旦ゆでゝ、鰹ぶし一杯、味淋半杯、醤油半杯砂糖十匁、鹽三匁を合せたる汁にて煮、味のつきたる頃小口切にするなり、

四　金糸いも

さつま芋の皮をむき、更に身を皮のやうに、一へぎづゝ薄くむき、細くせんぎりにきり、白水につけ洗ひてしぼり、生酒に水少々、さたう及び焼めうばん少しを加へたる汁を煮立たせ、せん切の芋をほぐし入れ、一旦蓋をし五分ばかりの後、蓋をあけ箸にてかきまぜ、また蓋をし、五分ほどにてあけ、前のやうにかきまぜてよし、

五　ふりなまこ

海鼠のあと先をきり、腹を劃きわたを出し、水にて洗ひ目笊に入れ、鹽少々ふり笊に蓋をして、兩手にて振り動かし(流しもとの板の上にて)、ヌメリをとるために、水をかけ、また振りて水をかけ、なまこの上のイボ〳〵を取り、青白くなりたる時、鉢にいれ酢をかけ置き用ゐる時薄く小口切にするなり

以上の如く酢につけ置けば、一週間位少しも味かはらず、且つ軟くなるなり、

六　木賊にんじん

人參の太き所は四ッ劃にし、二寸程の長さに切り丸むきにし、ザッとゆで、更にだし汁にて煮、味淋醤油、(みりんの代りに酒と砂糖とを用ゐるもよし)にて味をつけ置き、青海苔をほうろくにていり、水嚢にてこし、前の人參をその中にころがして(即ち人參に粉にしたる青海苔をぬるなり)用ゆ

新牛蒡を右の如くして、木賊牛蒡となすもよし

七　鳴門にんじん

人參の太き所を二寸長さにきり皮を剝き、更に肉部を丸むぎに一枚々々薄くへぎとり、酒、だし、醤油にてザッと煮、皿にあげ布巾にてふき、別に豆腐を絞り水をきり、うらごし、鹽少々砂糖少々メリケン粉少しをまぜ、前のへぎたる人參へ一分位の厚

さにのべ、人参を外にして小口より渦巻にし蒸籠に入れてむし、小口より適宜の厚さに切て用ゆ、

八　玉子五目やき

玉子をこはしよくまぜ、玉子四個につきだし五勺味淋煮きり二勺、醤油一勺を入れ置き、別に小鰕の皮をむぎ背わたをとり出し、二つにきり、みりんと醤油とにてザッと煮る、外に椎茸をゆで鰕同様の汁にて味をつけ、みつ葉は生のまゝ五分ぎりにし、以上三種を前の玉子にまぜ、てん火が玉子焼鍋にてやき切りて用ゆ、

九　鮒のこぶ巻

小鮒のはらわたをとり、頭付のまゝやき置き、青昆布を水につけ冷してよく洗ひ、水を去り、鮒を巻き、中程を干瓢にくゝり、沙魚の大根巻同様に煮る

十　金糸橙

橙の皮を薄くせんにきり、水につけ、ゆでゝ再び水にとり、絞りて砂糖、味淋、塩にて汁のなくなるまで煮るべし、皮をとりたる橙の實は、横に二つに

ぎり、汁を絞りてうらこしゝ、瓶に入れ栓を堅くして、寒中より三四月頃迄地（日影）にいけて置けば上等のポンスになるなり、

十一　さより篠まき

さよりを三枚におろし腹の骨を取り、塩水につけ五分間の後とり出して、笊にあげ乾し、皮を裏に身を表に串にまき、終りを竹の皮かこよりにて結び、右巻左巻の二様につくり、此左右のもの二本を合せてこよりにて結び火にかけてやき、冷して串をぬく

十二　小持鯛

小鯛の背の方より庖丁を入れ、背ひれにきずのつかぬやうに中骨をぬき、腹の小骨をとり塩水へつけ（塩水は水一合に塩五勺の割）五分間にて引きあげ水をきり、別に魚の身をたゝきつぶし塩にていり玉子をなし、裏らごしにかけまぜて、前の鯛の腹につめ蒸すなり、こは味噌吸物に用ゐつま物は、松露が順方又はうど粉初たけみやうが等何にてもよし、粉さんせうをそふ、



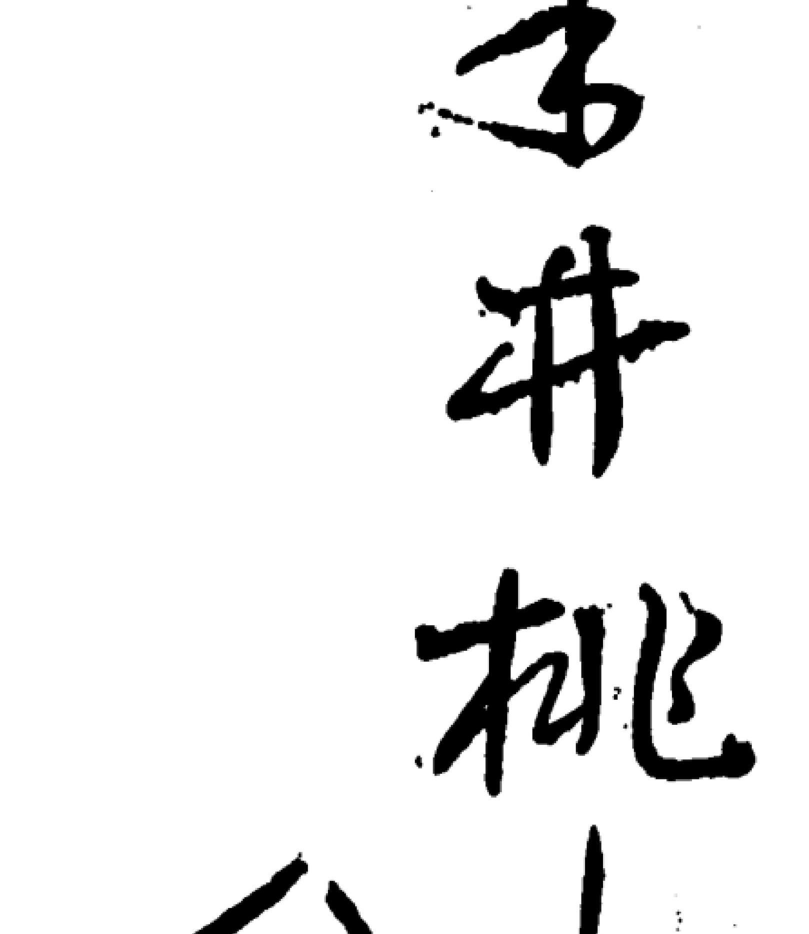
半井桃水

（上）

恰ど今から五年前まで、番町の梅田家では、一月の佳例として、必らずかるた會を催ふした。夫もその筈、今の梅田文學博士は、まだ大學の角帽を頂き、今の桂法學士夫人は、女學院に通ふた時代、特に兩親までがなか〳〵元氣で、揃ひも揃つたお客好ゆゑ、いつも十二月の聲を聞けば、一家樂しく相談の上、かるた會の日を取極めて、それ〳〵案内狀を出すのであつた。

今の博士――其の頃の高潔は、極めて淡泊な快濶な、何處か烏渡軍人肌の、其の癖少しも圭角のない、十人が十人、何れも敬慕する性質、容貌までが其の通りに出來て居る。

今の桂法學士夫人――其の頃の薫子孃も、兄に頗る好く似た性質、是も某新聞の美人投票に、何番目の高點と聞て、極り惡がつた程の容色。高潔の友人は、何れも多少薫子に野心を抱き、薫子のお友達は、矢張高潔に望を繋いで、足繁く出入をしたが、門戸開放主義の中にも、何處か引締つた家庭であつて、平生薫子を訪ふ人が、高潔と相見たり、また高潔を尋ねた人が、薫子と語る機會は、滅多に與へられなんだ。



然るに一月のかるた會、こんな隔が全く取れて、男女入亂れの混戰、薫子のお友達で、高潔と手をむしり合ひ、高潔の友人は、薫子の顔に塗る、白粉の厚薄に、思を込める者もあつて、畢竟梅田家のかるた會が、男生女生の双方に、歡ばれ樂しまれたのも、高潔と薫子といふ、特別懸賞があつたからのこと。

最後のかるた會は五年前の一月七日、高潔は二十六で、其の七月が大學卒業、薫子は十九で此の三月が、卒業試驗、中原に鹿を追ふのも此一年か二年といふので、今度は一層盛會を極めた。



此の樂むべきかるた會に招待を受た者は、男女合して五十人、男子は高潔の校友七分、殘る三分は親戚其の外、さま〲の關係から、梅田家に親しい人々、官吏、會社員、醫師、辯護士の寄合勢、羽二重五つ紋の羽織に、仙臺平の袴もあれば、お召づくめの着流しもあつたが、何れ優勢を占たのは、小倉袴にキヤラコの羽織、中には親讓りの仙臺平や、七子の羽織もないではないか。

女子は大方薫子のお友達、年始を兼た人の外、三枚裝の紋付や、裾模様こそなけれ、今日を晴と粧凝して、見る目眩ゆきばかりの扮打。

十五疊敷の廣間に、電燈が輝き渡れば、早速三組四組に分れて、牌子競技は始つたが、凡そ一二時間の後、餘りこんな事に趣味を持ぬ、お召づくめの着流黨は、宅より電話とか、新年宴會とか名を附けて顔に

白粉のつかぬ内、そろ／＼敵に背後を見せて、逃支度に取掛る。

高潔は此の人々を玄關まで送立て、再び座敷へ歸らうとしたが、不圖玄關の隣の、薄暗い六疊の隅に、一人の女の影を認めた、大方近所の令孃に、附添て來た女中であらう、寒い處に唯た一人、待して置くのも氣の毒と思つて。

「貴女、そんな處に居ては寒い彼方へお出と」言ながら、顏を見て驚いた。

「ヤア、雪子さんぢやアありませんか……先刻から非常にお待ち申して居ます……何故貴孃そんな處に居らつしやるんです……辰子さんは疾からお出になつて居ます……もうかるたは盛んです……いつもお出になる雪子さんが、何故お見にならんのだらう、お迎ひに行かうかと、妹は言て居たです」と一句一歩、漸く側近く立寄たが、雪子の服粧を見るに及んで更に少からぬ驚きを喫した



笹部節造は辰子の父で、雪子の爲には叔父に當る。雪子の父は節造の兄、幼少から親に代つて、節造を撫育したから、兄夫婦が打續いて、返らぬ旅に行た後は、其の總ての財產と、遺愛の雪子を引取て、我子同樣慈しんだ。

雪子も辰子も同じ齢、二ケ月先に生れて居るので、雪子を姉と辰子に呼せ、尋常科二年の時から、同じ芙蓉小學校に、一樣の服裝で、通學させる事にしたが、蕾ながらも梅櫻、道行く人まで振返つて、羨む程

に睦ましかつた。

節造の妻鶴江子も、嚴格な良人の吩附、一疋の絹を二つに裁ては、雪子と辰子の衣服を縫はせ、一個の菓子を分るにも、意を用ひて厚薄なく、雪子が爲に世間から、天晴賢夫人と賞稱されたは、足掛七年が程であつた。

節造が病に罹つて、兎角一家の監督も、怠りがちになつたのは、二人が高等四年の夏、翌年四月の卒業試驗に、雪子は最優等第一番の好成蹟であつたに引かへ、あはれ辰子は落第して、もう一年跡殘り。病中ながら節造は、雪子を賞し、辰子を戒め、褒美の爲と豫じめ調へ置た、銀側の花鳥の象眼を施こした、愛らしい見事な時計は、節造の手づから、雪子の胸に掛られた。是が子故の闇に迷ふ、夜の鶴江が賢夫人の鍍の剝掛るそもく\で、以來いが栗でつゝくやうに、ちくりくと雪子をいぢめて、辰子に愛を傾けたが、雪子は實に賢い性、苦しさに漲る涙も、絕て節造には見せた事なく、辛く當れば當る程、鶴江母子に親しくするのを、女中どもは口惜しがり、隱になり陽になり、雪子を批陰て尖となく、節造に唉はした爲、鶴江母子の根を買ひ、暇出されたものも前後では、四五人の多きに及んだ。

一夜鶴江母子雪子が病床に集つた時、節造は枕うかめて。

「雪子、汝は兼て話した通り、女子學院の試驗を受て、早く入學するが宜しい、辰子には構ふに及ばん」

雪子は暫し俯向いて、答へかねる體であつたが、やがて麗はしい笑をたゝへて、辰子の方へ向直り。

「辰子さんも一處に試驗をお受なさいな、ねへ好いでせう」

「だつて私には出來やアしない」

節造は聞咎めて。

「辰子、何故姉さまに向つて、ぞんざいな口を吐く、左樣いふ精神だから、學校も落第するのだ、鶴江、少し嚴しくせんけりや不可、雪子、汝は早く試驗を受るさ」

「一人參るのは心細くつて……」愛らしく答へながら。

「ねへ辰子さん、一處に試驗を受て頂戴」

「何して辰子にはむつかしい」

鶴江夫人はハンケチで顏を抑へて泣て居る、辰子の肩に手を置て。

「雪子さんもあゝいふんだから、一處に試驗を受て御覽、出來なければ夫まで、不器用に生れたんだから仕方がないさ」

否味まじりの敎訓が、辰子の胸に泌む筈もなく、却つて節造の病に觸れて、一層強く辰子を叱る、良人が辰子に嚴しい程、鶴江は陰で甘くする、その溺愛の怖るべき毒は、次第に辰子の全身に廻つて、我儘が增長するだけ、雪子は身を謹しみ、行ひを正しうして、元々曇りのない精神に、一段の磨きを掛た。

雪子は辰子の機嫌を取て、共に入學試驗を受たが、雪子は容易く入るを許され、辰子は見事落第した、是がまた鶴江をして、ます／＼雪子を嫉ましめる動機とはなつたのである。

雪子は我一人先つて、入學をする事が、如何に怖しい結果を持來すかと、小い胸を痛めた餘り、辰子同樣落第をした向に、節造へは告知らせ、今年入學する事は、斷然思留つた上、叔父の看護と家内中の裁縫を引受て、此の一年を徒らに送り、翌年四月辰子が卒業するのを待て、女子學院に入學したが、次の年の試驗にも、辰子はまた候落第して、始終雪子の下級に立た。同じ御姉妹でも大した違と、人々の噂を聞ては、辰子もう學校へ行く氣もなく、父の腦病が三期に入り、殆んど健忘同樣になつたを幸ひ、勝手に學校

を取かへて、彼方此方へ廻つたが、遊び半分の學校通ひ、何處でも成蹟の好からう筈なく、雪子がいつも首席を占め、もう半年で卒業といふ時まで、辰子は何一つ學び得た事もなく、強て捜し尋ねたなら、白粉や香水の鑑別に目の肥た事でもあらうか。

（中）

梅田高潔の親戚に、大山泰臓といふ、豫備陸軍少將がある。十二月の初め、笹部では、煤掃をして居る處へ、突然音訪て面會を求めたから、例の



通り鶴江夫人は、良人節造に代つて對面た。『イヤ是は夫人さんですか　お忙しい處に、お邪魔しました、私は大山泰藏といつて、笹部さんには兩三度、お目に掛つた事もあります、實は此方の令嬢と兼々御懇意に願つて居る、梅田薫子が親類の者で、疾より一度伺ひたいと思ひながら、永く旅行をして居たので、ツイ御無沙汰になりました、エ、少々御無心に出た譯で、御存じでもありませう薫子が兄の高潔、親類でありながら、斯なお話をしては可笑しいが、至つて性質の宜し



い者で、學問も好く出來ます」と皆まで聞かす鶴江夫人は、滿面に笑傾けて。
「ほんとうに宜しい御方で、皆さんお賞め遊ばします」
「左樣仰しやると恐縮ぢやが、先づ我々の親戚中では、最も出來の好い方です、彼も來年は卒業で、兩親は早く嫁を取りたいといふ譯でな、就ては此方の令孃に御相談は願はれまいか、先づ御内意を承つてくれへといふ、兩親からの依賴によつて、今日突然推參しました」
機會がおれば推つけても、貰つて欲しいと望んだ夫人、明た口に牡丹餅の旨い緣談と早呑込。
「オヤ左樣で御座いますか、不束な娘を、梅田さんからの御相談、良人でも何なにか喜びませう、もう平生高潔さんの事は、賞ちぎつて居りますんです、辰子に致した處が、異存のあらう筈は御座いません」
「ちよ、ちよ、烏渡お待ち下さい、慥か令孃は薫同校、女子學院へお通ひですな」
鶴江夫人は苦笑ひして。
「女子學院へ參るのは、彼は雪子と申して、私どもの姪で御座います」
「雪子さん〳〵、唯今お話したのは、即ち其の雪子さんです」
鶴江夫人の顏色には、忽ち怖しき變化を來した。
「ア、左樣で御座いますか、彼ならば折角ですが、お斷り申します」
「外へお極りに、もなりましたか」
「まだ極つたと申す譯では御座いませんが、彼は私どもの兄の娘で、相續人で御座いますから」
「併し日外來部君のお話に、お二人とも嫁に行かれるといふ事を、慥かに私は承知しました」
「養子と申しても何で御座いますから、寧そ嫁に出さうかと、話した事も御座いますが、別に判然極めま

した譯では御座いません」
「ハヽア成程、イヤ夫では、一應梅田へ、其の事を話しまして、更にまた御相談を願ふやうでありましたら、重ねてお邪魔に伺ひます、ナニまだ當人や黨にも、話した譯ではありません」
「左樣で御座いますか、兎に角雪の方は御相談になりますまいと存じますから、萬望もう是きりで」
鶴江は手強く言切て、大山少將を擊退したが、雪子を疾む邪慳の心は、殆んど其の頂巓に達し、此の日掃除の仕方が惡いといつて、矢庭にはたき引攫り、雪子が富士額に加へた後は、往々わらけない擧動ばがり、雪子は眞に不憫であつた。
　姉さんと呼だ辰子が、雪子さんと改めたのは、もう二三年前からの事、今は雪子を召使同樣、追廻す程になつた、夫でも雪子は露ばかり、惡い顏をせず、鬼のやうな鶴江を、お母さん〳〵と恭ひ親しみ、出來る限り勤めて居たが、此の年の大晦日に至り、悲しむべき嚴命は、仲働下女列座の上、鶴江の口から下された。
「雪子、旦那樣の永煩ひで、家も改革をしなくちやアなりません、私のやうな者の力で、汝を今まで通り學校に通はしたり、お孃さん扱ひにして、養ふ事は出來ないから、學校は退つておくれ、夫に小間使といふ資格で、此家に居るなら居ても好いが、其のかはり私の事を、お母さんとは言ないやうに、元日から改めて貰ひませう」
　朝夕箸の上おろし、鶴枝母子が無理難題、心に泣けど表面には笑ふて見せた程の雪子も、此の時ばかりは泣臥して、暫しが間飯を呑だ、若しも慈愛深き叔父節造が、病氣でさへなかつたなら、下女奉公に出るまでも、斷然此家を去つたであらう。

「マア、何がそんなに悲しいの、鶴江は如何にも濟ましたもの、氷よりも冷たい言葉に、嘲りの意をさへ籠て。

雪子は漸く涙を收めて。

「ハイ、畏まりました、是から叔母さんと申上げます」

「小間使が叔母さんも不似合だから、夫人さまとお言よ、今から婢女も朋輩と思つて、お雪さんと呼ぶのです」

前に述た、かるた會の翌る一月七日の事、梅田からの案內狀に、笹部雪子樣同辰子とあつたのが、殊の外癪に障り、意地惡き奥樣は、雪子を小間使の服裝にこしらへ、辰子の供をさせたのである。

綿銘仙の綿入に、メリンスと漢江縮子の晝夜帶を、お太鼓にきちんと結び、不格好な島田まげは、何見ても小間使以下、高潔も見違へた筈。

惻然として稍暫し顏を瞬視た高潔は、雪子が答へを聞かずして、奥坐敷の方へ馳去り、程なくばた〳〵と驅て來たは、妹の薫子。

「アラ、雪子さんで居らつしやるの」と言たつきり眼を白黒。

「梅田さん、高潔默つて居て頂戴、私はね、今年から笹部家のお小間使、今夜はお孃さまのお供ですの、もう學校へも參られません」と僅かに語つて面を蔽へば、兼々事情を知た薫子、更に仔細を問ふまでもなく、雪子の胸に顏すり付て、共に悲憤の涙を絞つた。

此の年を終として、梅田家のかるた會は、滿四年間打絶た、夫は高潔が卒業後、直樣英國へ留學したのと、薫子が其の年の暮、お嫁に行た爲とであつた。

丸四年目の十二月に、梅田高潔は榮譽を擔うて、海陸恙なく歸朝したが、四五日は來客に忙殺され、一週間の後に至り、漸く桂夫婦を訪うて晩餐を共にした時、薫子は兄に向ひ。

「兄さま、お願ひがあるんですよ」

「ハヽア突然お願ひと來たね」

「早くお話したいと思つても、毎日彼の通りのお客でせう」

「長旅行は平氣だつたが、此の四五日の來客には、何も全く疲れたやうだ、時にお願ひは」

「夫人さんを迎へて頂きたいの」

「私に、ヤア大變なお願ひだ、心當でもあるのかね」

「兄さまの夫人さんは、もう〳〵此の方に限るんです」

「汝知て居るのか」

「知て居ますとも、兄さまだつて御存じです」

「ハテ誰だらう」

「笹部の雪子さん」

「ムヽ、雪子さん、彼の人は何したかね、とう〳〵叔母さんに虐待されて、驅出したといふ事は、汝の手紙で承知したが、彼は實に可愛さうだ」

桂法學士は代つて答へた。

「全く彼の位氣の毒な人はありません、第一心掛が感心です、恐らく彼いふ婦人は、世間に二人とありますまい、薫は大いに同情して、是非當家へお出なさい、充分力を添へますといつて、度々勸告したですが叔父の生て居る中は、何な苦しい思ひをしても、看病をするといふので、とう〳〵二年間辛抱して快く叔父さんを見送た上、笹部家を去たのです」

「而して今は」

「英國大使館の書記官で、ウキンターといふ人の細君が、日本語を習ひたいから、適當な教師を一名、選んでくれろと申すんで、早速其處に世話しましたが、非常に英語も旨いといつて、ウキンター夫婦は喜んで居るやうです」

「好く今まで嫁に貰ひ人がなかつたね」

「イヤ種々な方面から、蒼蝿程貰はれましたが、何しろ薫が嫂にする、外へ嫁る事は出來んと言て、一々斷つて仕舞たんです」

「隨分亂暴極るなア」

「ぢやア兄さんお否？」

「汝が夫程に言たのなら、マア貰ふ事にしやうよ、ハヽヽヽヽ、併し彼は實際えらい、全く感心だ、夫から辰子の方は何した」

「我儘な事から、雪子さんへの仕打が憎いんで、誰一人貰はうといふ方がなかつたんです、其の内詐僞師見たやうなものに掛つて、財產を失た上、諸方に借財まで出來て、今ぢやア母子とも、大變困つて居るやうです」

「當然の報だなア」

「兄さま、今年中に婚禮して頂戴な」

「夫は餘り切迫だ、特に笹部で承知すまい、先年の行掛りもあつて見ると」

「イヽエ其の分は大丈夫、雪子さんの事は構はないと、口を放して居るんですから」

「左樣かね、夫なら別に仔細はないなア」

「ねへ兄さま、今年中に婚禮を濟まして來年の春は久しぶり、かるた會をして頂戴な、其の時辰子を呼付けて雪子さんに唯た一言、それ見たかといはしたいんです」

「汝は相變はらず意地惡だな、今更辰子が出て來るものか」

「夫はいつでも來る事にちやんと、約束をして置きました」

桂法學士は微笑を含んで。

「何してなか／＼意地惡です、先日辰子さんが、金の無心に參つた時、いつでも私から呼に上げると、お出下さる事が出來ますか、その約束をして頂けば、御用立るといふ條件で、金を貸して遣つたやうです、大方夫等の爲でせう」

「イヤ、資本まで掛て、復讐をするとは、頗る、念の入た仕方だ、マア汝に任す、何でも好いやうにしてくれへ」

◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦

梅田博士が歸朝の新年、桂薫子と連名で、かるた會の招待狀、五年前の角帽連は、もう悉く立派な紳士令孃連も大方は、何某夫人と改まつたが、舊いお友達の會合と聞て、何となく氣も若返り、案内を受た人

は、良人を勸め妻を誘ひ、皆喜んで集つた。

手傳のずらりと並んだ梅田家の門内へ、怖る〳〵進入り、裏口からそつと上つて、薫子を呼立たのは、外でもない笹部辰子、以前の勢何處へやら、古ぼけた米琉の着物に、同じ飛白の色褪た羽織引掛け、何處ぞと見すぼらしい姿をして、勝手の隅に小くなり、薫子の來るのを待た。

「笹部さんは何方に居らつしやるのと、呼はりながら出て來た薫子、辰子は頻りにさし招いて。

「夫人さん、此方で御座います」

「否ですねへ、そんな處へ」

「先づ明ましてお芽出たうございます、昨年中はいろ〳〵お世話さまになりまして、また萬望相變らず…………、お手紙を頂きましたから、伺ふ事は伺ひましたが、私はお勝手の方の、お手傳をさして頂きます」

「マア辰子さん、其處では御挨拶が出來ません、責て此處まで來て頂戴、兄も久々でお目に懸りませう、夫に兄は結婚を致したんです、姉も是非御挨拶を致したいと申しますから」

此の時盛粧の新夫人は、薫子の跡から來て、嫣然と會釋したが、辰子は唯もうしりごみして、顔も仰ぎ得ぬのであつた。

「辰子さん、私です、萬望是から元のやうに、睦ましくして頂戴ね、ねへ辰子さん」

學校の往還手を引合た昔のやうに、優しい言葉を掛けたのである、若し辰子にして一點の良心があるものなら、百千の罪を數へて、笞を加へられたより、雪子が今の一言は、肝に應へ腸を穿つて、辛く苦しく感じたであらう。

（をはり）

我が子に

鹽井雨江

一

埴生の小屋の　出で入りに、
可愛や、とう樣　とう樣と。
位の影を　離れたる、
汝れに見るかな　神の靈。

二

つゝれの袖の　起臥に、
可愛や、とう樣　とう樣と。
錦の光りを　離れたる、
汝れに見るかな、神の情。

三

飢ゑねばかりの　朝夕に、
可愛や、とう樣　とう樣と。
おのれの空を　離れたる、
汝れに見るかな、神の愛。

四

汝れ過つて　人間に、
しかも、いぶせき　宿に落ちて、
かゝる親をば　とう樣の、
すくせあはれの　神の子や。

五

すくせあはれの　身にしあれど、
汝れ神の子を　汚すべき。
人間の塵　こゝに無し。
それを、ほこりの　我が宿よ。

六

それを、ほこりに　神の子よ、
汝れも生まれし　天のまゝ、
立ちて、清けき　一生を。
それを願ひの　とう樣ぞ。



嬰兒の食物に就て忽にすべからざる注意

醫學博士　加藤照麿

まづ過營養を禁ぜねばならぬ

過營養といふのは醫家の專門語であるから、專門家以外の人にはチョット分り難いであらうが、平たく云へば、彼も此も身體の爲になると云つて、小兒の年齢や、又は健康の强弱等をも詮議しないで、無暗に食物を與へる事である、此の事に關しては、是まで醫學社會でも餘り多く注意を拂はれなかつたのであるから、勿論專門家以外の者などが注意を拂はう道理も無いのである、されば此の過營養の事に就ても、一般世人は大體良い事に思つて居るけれども醫師の側から見るときは、甚だ善くないのであつて所謂過ぎたるは猶及ばざるが如きものである、

乳離れの遲いのも宜くない

從來小兒を離乳することは、何方かと云へば、早くするよりは寧ろ遲くする、成るべく永く澤山に母親の乳を與へる方が宜いと云ふ考へからして、最早小兒が稍固形の粥、又は鰹節の煮汁にて造りたる雜炊などを執るやうになつても、矢張乳を與へて居る者があるけれども、之は最近科學の進歩に依つて宜しくないと云ふ事が證明せられて居る、既に此く小

謹賀新年

○○○○○○○○○○○
歐米新流行化粧品入荷

◎家庭用美顏術料トシテノ米國デトロイト市
アクムケミカル會社製
アクムフレンチ**マッサージ、クリーム、**
（大金貳圓六十五錢小金壹圓卅五錢）
ハ使用極メテ簡易ニシテ只指頭ニテマッサージスレバ充分ニシテ色ヲ白ク艶ヲ徴ニ肌ヲ透明ナラシメ血色ヲ美ナラシム

◎**頭髮化粧料**トシテ佛國リヨン市ビーベル會社製
ペトロール、ハン
ハ歐米國ニテ有名ナル美髮毛生液ニシテ脫毛ヲ治スルコトハ勿論色澤ヲ濃厚美ナラシムルニ驚クベキ力アリ

◎其外歐米各國諸大會社製優等化粧品香料

特約日本一手販賣元

東京銀座尾張町二ノ二五
輸入部萬治貿易商會
販賣部めでた屋
（電話新橋四三三五番）

謹賀新年

明治四十一年一月元旦

株式會社 國光社
社員一同

女鑑編輯局一同

兒の身體が母の乳を必要とせざる時代に至りても、尙ほ哺乳を繼けると云ふ事は、大いに間違つたことである、何故かと云ふに、或一定の時期までは小兒が乳汁を要求するのであるが、最早それ以上には之が必要を認めないのである、旣に之が必要を認めないにも拘はらず、强て之を與ふるやうな事があつては、縱ひ乳汁が液體なるにもせよ、其爲に他の食物の消化を妨げるので、殊に小兒が他の食物を嚥下すや否や、直に乳汁を與ふる者があるが、此樣な事をしては、折角小兒の爲になるべき母親の乳でも、寧ろ有害となるのであるから、之が母たる者は、大いに此の點を注意せねばならぬ。

外見は肥滿しても其實貧血

過營養と云ふことは、前にチョット素人解りの仕易いやうに述べて置いたが、今専門家即ち醫師の立塲から簡單に之を云ふときは、脂肪營養の過ることである、小兒の身體に此の脂肪營養が過ぐる、殊に前に述べた如く時間外等に無暗に此の營養を取らしむる時は、皮下脂肪が增して來て、見掛は大層肥滿して、從つて體量は重くなるから、素人眼には如何にも丈夫さうに思はれるのであるが、決して専門家の眼よりは强壯の小兒とは見えぬのである、何故なれば、此くの如き小兒は、必ず貧血が伴ふのみならず、筋肉や骨の發達が不完全なるものである、一體我等の身體は如何なるものより組織せられて居るものであるかと云ふに、三つの元素より成立つて居るものである、即ち第一は脂肪、第二は蛋白質、第三は含水炭素である、此の三つのものが相待つて宜しきを得て居るものは、眞の强壯者である、若しその三つの間に不釣合を來たせば、不健康に陷るのである、ソコデ乳汁は如何と云ふに、その大部分は三元素中の脂肪より成つて居るのである、

乳汁の幼兒に對する價値

此の如く乳汁は他の二原素を缺いて居るのである

から、骨や肉や血と云ふ様なものに益する所が薄い爲に退歩するのである、併し乳汁の中にも、蛋白や含水炭素が少しも無いと云ふ譯では無いが、その分量は極めて少くして、その大部分は脂肪である、：次に蛋白質は如何なる物に多く含まれて居るかと云ふに、即ち鷄卵および魚肉獸肉等が最も多く之を有して居る、併し是また他の二元素を毫も含んで居らないと云ふのでは無い、第三に含水炭素は何物が最も多く之を含有するやと云ふに、植物即ち蔬菜の類である、此の蔬菜の類は、その主成分は含水炭素であるけれども、前の二者に比ぶれば、その主成分の外に脂肪と蛋白の二元素を比較的澤山に含んで居るのである。

是の故に極言すれば、乳汁と肉と野菜と此の三つの物を程好く混せて食すれば強壯になるので、之に反すれば衰弱に陥るのである、尤も我等人類は、他の二者を除きて、單に野菜の一方ばかりでも生活は出來るのであるが、脂肪や蛋白の何れか一方では生活は出來ないのである、と云ふものは、前述の如く乳汁のやうな脂肪質のものは、他の二元素を含むことが極めて少量であり、肉類の如き蛋白性のものは脂肪に比ぶれば稍他の二元素を含有することが多いのである、けれども野菜のやうに、その主成分の外に他の二原素を比較的多量に含蓄して居ないからである、故に成るべくは三者を程好く混食するのが一番宜いのである、

病氣の治療より病氣にならぬ用心

此く人類と云ふものが生活を持續し、身體の強壯を希ふには三元素を要するものであるにも關らず、單に脂肪の過營養に罹つて居る小兒を見ると、その親たるものは、その小兒に、生後一回の服藥せしめた事も無く、又は假初にも感冒を一つ引いた事もなくして、見らるゝ如く肥え太つて居ると自慢しても醫師の眼より見る時は氣の毒に堪へないのである、今も尙ほさうであるが、殊に以前は世人一般に、

醫師たるもの丶天職は、單に病氣を治療するだけであつて、營養法などに就て別に嘴を挾むものでない換言ふれば、病を未發に防ぐ等の事を世話するのは醫師の本分中に數へて居らぬ、之は素人の方ばかりでは無いが、殊に小兒科の醫師には、最も小兒の營養に就て常に深く注意を拂ふべき必要があると考へる、最早今日歐州に於ては、小兒の營養學に乏しきものは、小兒科としての資格が無いものであるとまでの定說があるのである、

牛乳に餘り多く信賴してはならぬ

凡そ物事は先入主となるもので、一旦沁込んだ事と云ふものは、容易に去り難いもので、之は東西共に免れない人類の惰性とも云ふべきもので、殊に我國の人は此の傾きが强いのである、例へば、昔日醫師が牛乳の滋養に富めるものであると唱導してより此の事が世人の頭腦に沁込んで居るから、昨今過營養に罹つて居る小兒の母たちに、その利害を委しく說て聞かせても、容易に之を改むる事をしないで、依然として之を與へて居るものがある、それは母親たる者の了簡違ひであらうと思ふが、又一方より考ふれば、從來醫師が餘りに牛乳の功能を囃し過ぎたのに原因するものであるから、その一部は夫等の醫師に於て、其責任を負はねばならぬのである、

尙繰返して云ふが、過營養の小兒は脂肪が勝つて居るから、顏色は蒼白で、而して一體に貧血であるのみならず、毛髮には光澤が無く、皮膚は軟弱であり、性質は痴鈍で氣慨が無くつて、何所とも無く呆乎として居るのであるが、その親たるものは、單に其小兒が生後一回の服藥もせず、且つ身體が肥え太つて居ると云ふのを誇りとして居る者がある、けれども之を醫師の眼から見ては、決して眞に强壯の狀態にあるものとは認めないので、時としては慢性の疾患と診るのである、

一體醫師が認めて强壯の身體と云ふのは、決して病氣の有無に依つて分つものでは無い、縱んば痲疹

腸質扶斯、實扶丁利亞、過食に原因する下痢病等に罹つても、醫師が認めて强壯なるものと斷定することもあるが、單に素人が見て前段に述ぶるが如く、是まで一回も服藥はなせしこと無くとも、心臟の搏動に雜音を聞くとか、又は淋巴腺に浮腫が發見せらるゝ時は、醫師は決して認めて健全强壯なる身體とは許さないのである、此く專門家と素人では眼の着け所が異ふのである、

幼兒を持てる親の心得

全體是等に就ては前にも少しく述べて置いたが、醫師に對する一般世人の考が違つて居る、即ち醫師たる者は單に疾患を診療する事のみが天職であるから、平常病氣の無い時は醫師の許に出入すべき必要は無いものであると臆斷して居ることは、恰も何か訴訟事件の起つた時に方りて、急に辯護士の許へ驅附けると同じやうに心得て居るが、是は抑も大いなる誤である、何故なれば、是は醫師たる者は單に疾

患を治療するものであると云ふ天職の半面を認めて未だ醫師たる者は、その疾患に罹らざる以前に於ける、所謂疾患を未發に防ぐべき相談役であると云ふ半面を忘れて居るのである、尙親切に云へば、小兒科の醫師は、自己の小兒の體質を强壯にすべき要項を胸る所の顧問官である、然れば未だその小兒が疾病に侵され無いに先だちて、時々健康の强弱、又は常時の攝生法等に就て相談すべき人であると云ふ事を腦裏に置かねばならぬので、苟くも世人が一般に醫師の天職を全く解して來られたならば、啻に現時のやうに小兒をして過營養に陷らしめないのみならず、父母たる者は速かに愛兒を不幸の淵より救ひ得るのである、而して醫師も亦今日の如く、所謂その病膏肓に入ると云ふやうに、凝らして持ち込まれると云ふ事は有るまいから、大いに治療も困難を減ずるであらうと考へる、此くなれば一擧兩得どころでは無い、一擧三得四得にもなるのである、如何か世の父母たる者は今よりして此の過營養い事に關して

は、十分に愼重の注意を拂はれん事を切望するのである、此の事は今日尚ほ多く唱導せられないから、或は奇異の感を懷かる丶か知らないが、之は決して予が一個の學説として奨むるのでは無い、即ち多年の實驗と最近科學の示す所とに依り、幸に此の機を利用して敢て奨むるのである、

母の乳に次ぐ乳汁

右の問題に關聯した事であるから、此に少しく乳汁の撰擇に就て注意を促がして置かうと思ふ、固より尚ほ未だ乳汁を要する時代の小兒に與ふる所の乳汁は、母の乳に優るものは無いのであるが、時としては種々なる事情の爲に、母の乳を與ふる事が出來ない場合もある、然る時は大抵是までの習慣として牛乳を與へるのであるが、之は成るべく山羊の乳に更へて欲いのである、その理由は後に譲りて、母乳又は牛乳を與ふるの傍、早きは生後七八ヶ月から硬い物などを小兒に取らしむる事が行はる丶が、是は甚だ宜しくない、若しその頃より與ふるならば、まづ初めは稀薄の米汁からして、漸次に緩い粥とか又は雑炊とか、若くは鳥か犢のソップ抔を徐々に與へるが宜い、決して突然に固形物を與へてはならぬ、若しもさういふ事を爲ると、消化器を害する事が少なからぬのである、

乳汁外の食物を與ふる注意

一體生後七八ヶ月位の小兒に乳汁外の食物を與ふると云ふのは早過ぎるので、大約生後一年位すなはち誕生時分から徐々に與へ初めるが宜いのである、而して其遣り初めは魚肉殊に小魚の鰈や鱚のやうなもの丶肉が可い、此の肉を與ふるにも、その調理法は炙たものよりは煮肴としたもの丶方が効力がある然るに近來頻りに鷄卵を滋養品として奨勵せらる丶のであるが、之は大いに思考を要すべき問題で、餘り早くから小兒に與へるのは宜くない、何如も素人の側では、僅か風評の片言を聞いて其を信じ、醫師

にも相談しないで無暗に小兒に物を與へるが、之は實に危險である、此の鷄卵もその一つで、まづ與へるなれば一歳生頃からするが可い、次に野菜類は程度にも依るが、まづ生後一年半位から與へ初むるが宜い、而して其種類は馬鈴薯、蕪菁、大蘿蔔等の如き物を、魚肉と一緒に煮るか、又は鰹節の煮汁にて克く煮て與へるが宜い、此くして前に云へる三元素を程好く調和して與へるやうに爲ねばならぬ、

羊乳は牛乳に優る

ソコデ前に戻りて、山羊の乳が牛乳に優つて居ると云ふ事は、何も予が新たに發見した事實では無い最早以前より大家名家の定説があるのである、それは何故であるかと云ふに、山羊の乳の成分は頗る人類の母乳に似て居るのである、依つて予が是まで手掛た小兒には常に此の山羊の乳を奬勵して居るが、その結果は何れも良好であるが、何分遺憾な事には此の東京にも尚だ原料が澤山無いのである、併し追

々需用者が殖えて來たならば、從つて供給する者も増して來るのは必然の理であるから、乳が不足であるとか、或は他の事情の爲に乳を授ける事の出來ない世の母たる人は、出來得る限り山羊の乳を用ゐるゝ事を推奬るのである、

一體予が此く世の母たる人に山羊の乳を奬める動機は、決して昨今に起つたのでは無い、今を去ること約二十年前、獨逸に遊學の次で、或時佛國の首都巴里を見舞うて、種々自家の研究に資せんが爲に取調べた結果、恰かも我東京の育兒院の如き所を訪ひしに、巴里は名に負ふ風紀紊亂の地であるから、從つて生れながらにして親の顏を知らぬ小兒が澤山に在る、それらの小兒が皆此所に收容せられて居るのであるが、是等多くの小兒は凡て山羊の乳で育てられて居る、而して其健康狀態は實に驚くばかりの強壯で、その原因は全く山羊の乳にある事を確めたので、歸朝以來大いに之を奬勵したいと思つたが、何分前述の如く原料が乏しいので困つて居た所、近年

少しく供給機關が出來たやうであるから、兩三年來大いに之を奬勵するが、その結果は實に良いのである、

第一山羊の乳の特長は、牛乳のやうに小兒が消化不良症に罹る患が無い、而して牛乳は之を用うるに方りて水との割合は、一と三乃至一と四の割合であるけれども、山羊の乳は水と等分にして、元より甘味はあるのであるが、倘ほ之に少量の砂糖を加へて用うるのである、

凡て牛乳でも又は山羊の乳でも、若し彼等に結核性が全く無いとすれば、恰かも母乳のやうに直ちに乳房に口を接して吸收せしむれば良いのであるが、牛羊孰れにも全く結核が無いとは斷定が出來ないから、搾取したものを煮沸して殺菌するのである、その時間はまづ、山羊の乳は沸騰點に達してから、十分乃至十五分程で火より下して宜いのである、牛乳も略同じであるが、予が是まで見聞する所に依れば牛乳の如きは殆んど四十分以上も煮沸すると云ふのが十中の八九である、而して一般に長く煮沸さへすれば、比較的多く殺菌の効を奏するものであると誤想して居るのである、

決して牛乳も山羊の乳も、或一定の時間以上煮沸したからとて、毫も殺菌の目的を多大に達する事が出來ないのみならず、却つて乳汁その物の効力を減損して仕舞ふものであるから、是等を用うるものは藥を變じて毒としないやうに意を留めねばならぬのである、

Success.

成功

The secret of success is constancy to Purpose.
成功の秘訣は目的を捨てざるにあり
(註) Constancy 貫徹なること

Nothing succeed like success
成功の如く續々來るものなし

Confidence of success is almost success.
自ら成功と信ずるは九分の成功なり

茶の毛蟲

農學士　新野良吉

毛蟲といふものが、梨、桃、柿、栗等の植物に寄生ることは世間の人が大抵知つて居る、けれども之が茶の木に寄生ると云ふことは餘り多く世人に知られて居ないやうである、實は毛蟲の話などは、モハヤ毛蟲と聞いたばかりでも悚然とするのであるが、我國人のやうに、往つたと云うては茶を呑み、來たと云うては茶を出すと云ふ風で、三度の食事よりも好む所の茶に此の害蟲が寄生るのであるから、丁度昨今は茶の木の花盛りで思出したから聊か話して見やう、

一體毛蟲と云ふものは、後に蝶や蛾の類に化生する者の幼蟲で、凡て身體に毛を有して居るものを云ふのである、即ち梅毛蟲とか又は松毛蟲の如きものを指すのである、然らば彼の蠶の如きものは、別に身體に毛が無くとも、之を蠶蛾類と云ふ中に組入れてあるのは何故であるかと云ふに、成程蠶の成長した者には毛が無いけれども、之が小い卵から孵つた時には全身に毛が生て居るから、之を毛仔と名づくるのである、故に之は特に蝶蛾類と區別してあるが一體に毛蟲と云ふものは、幼蟲時代から毛を有つて居て、成長するに從つて延るものを云ふのである、

ソコデ毛蟲は何が爲に毛を有つて居らねばならぬ必要が有るかと云ふに、斯の毛は即ち彼等に取つては此上も無き大切なる武器である、換言すれば敵を防ぐ唯一の道具である、然らば其毛には凡て吾人の恐るゝが如き毒のあるもので有るかと云ふに、それは一樣で無い、彼の金毛蟲や薔薇毛蟲などは全毛に毒を有つて居る、けれども松毛蟲とか桃毛蟲の如きものは僅に或局部に毒があるのみで、梅毛蟲又は桑毛蟲等は少しも毒は有つて居らぬのである、何故に此く異るのであるか、若し或物の如く全く毒が無いとすれば、寧ろ邪魔ではあるまいかと云ふ疑も起るのであるが、其は擬態と云つて、例へば、役者が太

閑になつたり、家康になつたり、又は石川五右衛門や熊阪長範に扮裝つたりするやうなもので、毒の無い毛蟲でも、己は毒のあるやうに裝うて敵の目を眩まして居る例へば、尺蠖が桑の枝のやうな色と形をして居るのも擬態である、併し之は彼等が自己の生命を安全ならしむると同時に種族の蕃殖を計るには必要なる條件で、之に就ては種々興味のある話もあるが、其は他日に讓つて置かう、

偖茶の木の毛蟲が如何に人類に害を及ぼすかと云ふに、皮膚の薄弱な人などは、之に觸るれば直ちにカブレルのである、此の茶毛蟲の雄は黒色で雌は鬱金色をして居て、幼蟲の時代から全體に毒毛を有して居るのみならず、成



蟲になると其翅の鱗粉までが毒を有つて居るのである、此く幼蟲でも成蟲でも毒を有つて居るものは毒蛾蟲と名けてある、即ち茶毛蟲も其一種で、今は丁度卵の時節であるが、之は單に茶のみでは無い、彼の椿の葉の裏などに細かい澤山の卵を産みつけて、其上、母の體内から毛を出して覆ふて置くのである、之が大抵春の四月下旬から夏の初めの五月上旬頃に孵化つて毛蟲となるのである、而して初め孵化した時分の體軀は淡い黄褐色で頭は黒色である、けれども一向に毛は分らないが、皆一緒に群集して、その葉の裏の表皮を食するので、七八日を經ると此に第一回の脱皮、俗にキヌをヌグのである。

その後約十日程を過ぐれば、此に第二回の脱皮をすると同時に、體の毛が漸く認めらるゝやうに爲るのである、それより一週間程を經ると乃ち第三回の皮を脱ぐと、最早背面の第四第五の關節と第十一の關節の部分とに黑點が現はれて來る、尤もその他の關節にも黑點が認められないでも無い、けれども之は顯微鏡の力を假らなければ、極めて小さいから判然しないが、その後約十日も經つと、第四回の脱皮をすると共に、體の黑點も分明になり、且つ體毛も餘程成長したのが分るのである、

既に第四回の脱皮をしてより約一週間を過ぐれば此に第五回の脱皮をする、最早此の時に達すれば體軀に三筋程の縱筋が出來るばかりでは無く、彼の黑點も餘程大きくなつて恰も疣のやうな形をして各節に現はれて來るが、それより復一週間程を經ると此に最終の第六回の脱皮をなすのである、此の時に至りては體の色も美事になり、縱筋も疣形も突起して判然するばかりでは無い、毛も隨分長くなる、殊に腹面の毛は一層長くなるのである、

此の脱皮即ちキヌをヌグ事を通俗之を眠ると云ふのである、而して此の脱皮の回數は蝶蛾の種類に由つて異なるので、或は三回のものもあれば六回乃至七回のものもあるが、まづ通常は四回である、然るに茶毛蟲は前述の如く六回の脱皮を爲すのであるが此の最終の脱皮を爲してより凡そ八九日を經ると、今度はその色が灰黄なる繭を造り、自分は其内に閉ぢ籠つて蛹と化するのである、それ故に孵化してから繭を造るまでの幼蟲期は大抵五十四五日である、爰に面白き事は、是等の幼蟲は、まだ小い時分には常に群居して居る、けれども漸く成長するに從つて四方に散居するが、眠期すなはち脱皮の時期に近づくと、誰が命令を下すでも無いが、必ず一所に集つて首を駢べて眠に就き、脱皮を了れば再び四方に散ずるの一事である、

既に繭を作り蛹化してから約半月も經つて、七月の上旬頃になれば蛾と成り、繭を破つて出て茶や椿

の葉に卵を產みつけるのである、此の產みつけられたる卵は、その年の七月下旬か乃至八月の上旬頃に孵化して葉を食害して、復前の如く成育したる後蛹となり、次で九月頃蛾となるのであるから、都合年に二回の發生をなし、第二回目の蛾の產みたる卵が其儘冬を越して翌年四五月頃に至りて前陳の如く孵化するのである、

茶毛蟲の成育したる者の雄は、其翅を開けば八九分程の大さで、翅は黑褐色であるが、その前翅の端だけは黃色であつて、其所に小さな二箇の黑點がある、且つ前翅の中央には、弓狀に曲つた二條の黃色の線を有つて居る、雌は雄に比すれば稍大きくして一寸乃至一寸二分位の擴がりを有つて居る、而して翅の色も雄とは違つて鬱金であるが、前翅の隅にある二箇の小黑點は雄と同樣である、けれども二條の弓狀に曲つた線は甚だ不分明で、餘程注意をしなければ判然しない、

以上は第一回の成蟲であるが、第二回目の者になると、雄は餘程變化して、雌と同じやうに翅は鬱金色になる、之は全く氣候の爲に變化するので、單に茶毛蟲ばかりでは無い、他の蟲類や獸類等にも此の變化はあるので、之を稱して氣候變化と名くるので時としては第一回の時でも、雄の翅は種々であつて往々全體黑色のものさへもある、

この蟲は如何にして退治すべきやと云ふに、前段にも云へるが如く、凡て幼蟲の内は群集して居るから、其枝と共に剪りて燒棄るか、又は群集して居る所を松明にて燒き殺すか爲るのが最も簡便であり且つ害を除く便法である、

Speech

言語

Many can argue, not many converse.

議論を能くする者多しと雖も談話を能くする者少し

Discretion of speech is more than eloquence.

言を愼むは雄辯よりも其効大なり

諸人種婦人の裝飾（上）

理學博士　坪井正五郎

昔から可愛兒には旅をさせろ、と云ふ事が言觸らされて居るが、是は何時の代何人が言ひ出したものか、今それを問ふの必要は無いのである、ソコデ此の諺に就て是まで世間一般の解釋によると、旅は辛いものである、また難儀のものであるから、一たび旅を爲せるときは、世の中の憂ひ目辛い事に接して來るから、ソコデ是まで親の側に居て安樂であつた事の有難味が分るものである、それ故に可愛兒には旅をさせなければ不可ぬと云ふやうに解釋せられて居るのであるが、是を以て見るときは、他人と云ふものは同情の少ないもの、世間と云ふものは薄情であると云ふに歸するのであるが、私は其は左樣で無からうと思ふ、

一體旅と云ふものは、是まで自分が見も聞きもした事の無い土地に行つたり、又は珍らしき山川風光に接したりして、謂ゆる非常に見聞の區域を擴むるもので、從つて其より得る所の智識は莫大なものである、斯の見聞の智識を得るには、如何しても自分の親の膝下にばかり密接て居ては得られぬので、必らず旅行を爲せねばならぬ、又親たる者は是非とも之が爲に我が可愛兒に旅行さすべき必要がある、と云ふ所よりして斯の諺は出たものであらう、決して他人と云ふものは同情心が薄いもので、己が父母の如く親切にして呉れるものでは無いから、その辛き經驗を嘗させんが爲に旅行をさせると云ふ意味から出たものでは有るまいかと考へる、

併し斯の俚諺を作つた者の意は、果して左樣であつたか、但しは左樣で無かつたかと云ふことは、今此に明確の證言は出來ないのであるけれども、恐らくは予が今解釋を試みた意味のものであつたらうと推察せらるゝのであるが、若しも斯の俚諺にして、今予が試みたるが如き意味のもので無かつたとした

ならば、今より後は予の云へるやうに解釋を施して貰ひたいのである、何故に予は今此くの如き、本題に縁遠いやうな事を述ぶるのであるかと云ふに實は縁遠くないので却つて之が本論の基礎を固むるに極めて必要なる事であるから、特に冒頭に於て斯の言を爲して置くのである、凡そ物事を判斷するに方りて、先づ其以前に多くの經驗を積むと云ふことが肝心である



その多くの經驗を積むには、自己の生れた處ばかりでは不足であるから、交際もし又旅行もせねばならぬ、その交際や旅行を澤山いたして、多くの事物等に接して居れば何事に應じて判斷を下すに當りても間違と云ふものが無い、けれども其交際や旅行もしないで、單に自己の生れたる或區域を限り、又は物の本などを僅かに見たばかりでは、

經驗が少ないから判斷を誤り易いのみならず、往々その判斷が間違つて居るのである、故に多く旅行して經驗を積み見聞を擴むると云ふ事は、單に自己の利益ばかりでは無い、世界全體を通じて利益ある事と考へる、

此の題は別に說明するまでも無く、大凡推して知らるゝのである、乃ち廣き世界の中には種々雜多の人種がある、之に就て二つの硏究法がある、一は何人種は斯うとか、斯の人種は彼あと云ふ風に檢べるのと、他の一は事柄に就て硏究する事である、而して今日爰にお話するのは其事柄に就て述るのであるソコデ其諸人種の婦人が如何に裝飾するやと云ふに之を述ぶるに方りては、幾分男子の事も交るけれども、その主なるものは婦人に關して話すので、その裝飾も種々ある中に、まづ身體に屬する裝飾の事を示せば、

其の一　頭の裝飾

頭と云へば頭髮を意味するのであるが、その有樣は種々であつて、印度洋のアンダマンに至れば、男女共に盡く頭髮を剃つて、坊主頭になるのを以て頭の裝飾として居るが、暹羅へ行くと、頭の周圍は短かく刈つて居るけれども、上の方だけは長くして居る、さうかと思へば北海道アイヌの如きは、全體を長くして其を左右へ垂れて居のもある、一體アイヌ人の毛は內地人の毛とは異つて、毛の尖端が曲つて居るのであるから、恰かも鈍き鉤のやうである、又アイヌ人などよりも頭髮を長くするものになると、三つ組などにして背後へ下げて居る者などもあるが孰れも其を以つて頭の裝飾と心得て居ることは一般である、而して單に頭髮のみでは見立が無いと云ふので、人工を加へて裝飾を施すものがある、即ち暹羅人の如きは、周圍に南京球のやうな球を通して飾りとなしたる輪を眞中の頭髮に通して、丁度わが大原女の物を戴く時のやうな工合に頂上に締めて居る時として獸の皮などにて作りたるものを被ぶると云

ふよりは始めて居るのであるが、是等は孰れも頭に施す所の裝飾である、併し此く人種に由つて異ふのである、

其の二　顔面各部の飾

次は顔面の部分であるが、今日歐米に行はるゝやうな、目に藥品を注射て瞳光を大きくするなど云ふ進歩した術のものでは無い、又其樣な藥品なども無いので、至極簡單な裝飾である、便宜の爲に項を分けて示すことゝすれば、

其一は眼であるが、乃ち眼の縁に太く入墨をするので、埃及、土耳古、アラビヤ人等の間に行はるゝのである、是の故に太古の埃及の繪畫や彫刻等を見ると、孰れも眼の縁が黒く太く描てあるので、或は畫師や彫刻師の失策であらうなどゝ云ふものもあるが、間々それらの爲に使用せられた器物などが、今尚ほ發掘せらるゝに就ても、古來より此くの如き粧飾が行はれたと云ふ事は疑を容れないのである、

其二は鼻である、之も未開と半開とで多少の相違は有る、けれども裝飾を施すと云ふ點に就ては一つで、印度、アラビヤ、埃及の小部分では、孰れも鼻の小鼻に輪をつけ、又は釦をつけ、或は牛のやうに環を嵌入することも行はるゝのであるが、南洋の方へ行つて見ると、ニユージニーの女子は、鼻の眞中の仕切りの所へ、木或は骨または貝殼等にて作りたる棒を横に挿して居る、

其三は口である、之は男子に多くして、比較的女子には少いのであるが、亞非利加や亞米利加の西の海岸へ行つて見ると、唇の上に穴を明けて、直徑約二寸の擴がりを以つて、下の方は夫よりは餘程細くしたものを通して居るので、之をボトキユードと稱して居るが、ボトキユードとは元來西班牙の語で、之を譯すれば德利の口と云ふ事になるのである、之は上唇に施すのであるが、亞米利加のバンクーバーの土民は其と反對で、海獸の骨などで、上の大きさは約二錢銅貨程のものを皿形に作りたるものを下唇

に挿入して居て、常に飲食物等を此に載せて吸り込むのである、けれども固より飲食物を載せるのが本來の目的では無い、要は裝飾である、

其四は耳である、此の耳に施す所の裝飾は分つて三つとなるので、一には棒、二には環、三には鈎狀である、今日歐洲人は第二第三を總稱して耳環と呼んで居るが、實は二種に分かるゝのである、尤も今時歐洲人の用うるものは孰れも形が小さいのみならず、漸次此の風も衰へて、單に穴のみの者もある、その環の大きいものを箝るのは印度、北海道のアイヌ等で、棒を挿入するのは、マレイ半島のボルチオジャヴア、臺灣の土人等であつて、ボルネオ人等はその棒の前面に種々の裝飾を施したる物を用ゐ、臺灣土人は木のみならずして、或は竹の筒に種々の絲類を卷きて裝飾を施したるものを用うるものもある

其の三　顏面全體の裝飾

是は主に塗るので、今日我國に行はるゝ白粉の如

きものである、併し色は單に白のみには限らない、マレイ半島のジャヴアでは、素より黄色であるのに尙ほ一層黄色に塗るのである、さうかと思へば、南洋の中に行つて見れば、全く黑く塗るものもあれば或は眞赤に塗る者もあり、又は彼此と取交せて隈取て居る者もある、印度に至れば、一は宗教上の關係もあるのであるが、孰れも顏の一部に裝飾を施して居る、尤も前述の如く、宗教の異なるに從つて色合も異ふのである、例へば、黄色は禪宗で靑色は法華宗であると云ふやうに宗教上の標識となつて居るのであるから、その宗旨々々の人に依つて一樣では無い、而して之は毎日施すのである、別に身體に傷を附けるのでは無くして、恰も商標のペーパのやうにゴムの類で毎日貼り替るのである、併し其印は前述の如く其宗旨〱に依つて極つて居て其は年中替る事は無いのである、斯樣の事は曾て歐洲に於ても全く裝飾として行はれたのである、即ち顏面の或部分の黑子のあるのが却つて愛嬌があると云ふので之を

附ける、これも其初めは小さいのであるが、漸次それが進んで大きくなるのみならず、その極端なる發達は舟を描き、花を彩り、甚だしきは馬車の二臺以上も描くと云ふ風に奇妙に發達したのである、現時尚ほ歐米の婦人が羅のヴエールを顔に被ふのも其遺風である、と云ふのは、彼のヴエールには所々に小さい黒點がある、此の黒點は古へ小さい黒子を施した所の遺習である事を證據立て居るのである、

新年と虚禮

松崎双葉

昨日とすぎ今日と暮して飛鳥川、流れて早き月日なりけり　と春道列樹が詠まれしも、げに理りであつて、まだ程遠く思つて居た四十一年も、いつしか後ろに近き大晦日となつて仕舞ひましたが、過ぎし月日は、あはれ夢の夢、何一つ仕出かしたる事もなくて、唯空しく明し暮したのみである、併しながら既往は咎めずで、今更悔るとも六日の菖蒲十日の菊詮なき事と斷念て見れば、流石は一と年の始め、軒に飜へる日章旗、門毎に樹て連ねたる常盤松、鞠に羽子は戯嬉として餘念なき童部、かれこれ何となく懐しき心地のせらるゝのである、

彼の一休和尚が、門松や冥土の旅の一里塚、目出度もあり目出度もなし、と云はれしも實にもと頷かれて、自分ながらをかしくも感せらるゝのである、又彼の親族故舊のものは云ふに及ばず、日頃左程に親しからぬ友達をも、かたみに訪ひつ訪はれつして年頭の祝詞を捧げて打廻るのも、是は我國の風習として、古へより禮といふものを重んずるからであらうと思ふのである、

昔時聖賢の、禮は民を率うるの道なりと云はれた事も、今や此の我國に於てこそ見ることが出來るのであるが、一體我國は古より、外に侵す敵のないのは何が爲であるかと云ふに、其は國に禮といふものが存して居るからである、また中に犯すところの仇

の無いのは、民に禮といふものが備つて居るからであらうと考へらるゝ、然るに世には、往々禮と云ふものは不足より生ずるものであるとか、又は富裕にして始めて禮節を知るものであるとか、古人の言を引きて彼此と論ずる人もあるけれども、古人は必ずしも是等の意義で言はれたものでは無い、即ち富裕となるに及びて、人は始めて氣が附いたもののやうに、禮節の必要を感ずると云ふ意味であると考へる、何故なれば、孔子の禮といふは玉帛にあらず、又禮は奢らんよりは寧ろ儉せよと云はれし事を咀嚼すれば判る事と思ふ、然れば禮といふものは、彼の人々の云はるゝが如く、そのやうに果敢ないものでは無い、即ち禮は其眞心の形に表はれたるを節制して、更に過不及の無いやうにするのである、故に往古の賤の女は、殊更に禮といふものを學ばなかつたけれども、猶ほ禮に合ふ節の多かつたのは、みな此の眞心を以て事を取つたからである、今は何れの地に到るも、學びの庭の設けもあり、又名うての師もある事なれば、皆爭うて禮式作法などを學ぶけれども、如何せん、皆形の上にのみ注意するのであるから、之が何の役にも立たずして、只一つの贅物となつて仕舞ふのである、

　或は眞心さへあつたならば、殊更に之を節制するの必要はあるまいと云ふ人も有るかも知らんが、決して左樣いふものでは無い、若しも唯眞心のみで節制する事が無かつたならば、必ず時に臨んで行はれぬ事がある、例へば、古來人を愛するの極、己が身に禍を蒙りしものが澤山あるのでも分かる、それであるから孔子は、恭しうして禮無ければ勞す、愼みて禮無ければ葸す、勇にして禮無ければ亂す、直にして禮無ければ絞すと云はれ、有子は、和を知つて和すれども、禮を以て節せざれば亦行はれずと云ひ、左丘明は、國にして禮無くんば、何を以てか榮を求めんと云ひ、禮記には、鸚鵡能く言へども飛鳥を離れず、猩々能く言へども禽獸を離れず、今の人禮無き時は、能く言ふと雖も禽獸の心を離れずとある、

此の外古人の言題は、和漢洋ともに枚擧に遑なき程であるが、何れも皆心を本として說きたるに外ならぬのである、

凡そ心に禮ある者は、縦ひ其技に熟しなくとも、猶ほ見るべき所のあるものであるが、苟くも心に少し禮を解せない所の徒は、其動作が故意的で見苦しいのである、故にチエストルは、達士の敬禮は自然にでゝ局促の狀なく、野夫の敬禮は倉皇恐縮の陋態をなすと云はれたのである、まづ是等を見ても、吾人々類に對して、此の眞誠の禮の大切で有る事が分る、それであるから、各國皆此の禮を重んずるのである、然るに我國は、維新以來泰西の文物を盛んに輸入して、僅々四十年間で、善に善を重ね、美に美を添て、今や歐米の列强と比肩しても、更に恥づる事の無いやうに至つたが、獨り千古の美風として、海外に誇稱するに足べき、禮法は、日に月に退歩して、今は僅に其形式の一部を存するに過ぎない、それであるから、禮法を習ひながらも、尙ほ人に接するのに巧言令色を以てしたり、人に交はるに阿諛便佞を事として、更に耻ぢざるのみならず、是を以て、却つて交際の奧義、世渡りの秘訣と心得て居るものもある、

此く云ふたならば、或者は言ふであらう、歐亞互に袖を交へ、東西共に居を同くして、生存競爭に勝敗を決するの今日に方り、設令我國の美風美俗であるとするも、爭でか悠々閑々として古禮古式を温ねて居る遑があらうやと、成程是等の言も一應最ものやうに聞ゆるけれども、予が今此所に說く所のものは、何も古禮を温ね古式を鄙めよと云ふのでは無い、又反坫を供へて客に對せよと云ふのでも無い、禮は、固より其時々に由りて違ふものであるから、有子の如きも、禮の用は和を貴しと爲す、先王の道斯を美と爲し、小大之に由るも行はざる所ありと云ひ、孔子は子張の問に答へて、殷は夏の禮に因る、損益するところ知るべし、周は殷の禮に因る、損益するところ知るべしと言はれたのである、此の如く禮は時

世に因りて損益し、民俗に因りて推移せらるゝものであるから、現世紀の人は現世紀に適する所の禮を採用するならば、何も憂ふるには足らないのであると難ずるものは又云ふであらう、然らば何として本邦の禮に通じなければはならぬ必要があるのであるか別に無いでは無いか、寧ろ西洋の禮儀作法を知つて居たならば、事は足るのでは無いかと、是も亦一を知つて未だ二を知らざるものゝ言葉である、それは前に述べたるが如く、時代に因りて損益し、民俗に因りて損益するものなれば、東西堺を異にし、風土その趣きに差ある以上は、禮も亦多くの異點が無くてはならぬのである、之は必然の理である、然るに自國の禮を捨てゝ、只他國の禮をのみ羨望するに於ては、恰も自己の錦繍を棄てゝ他人の弊裳を羨むの痴兒に等しいのである、それのみならず、若しも外人が我國の禮を問はるゝに臨んで、予は貴國の禮には通じて居るが、未だ自國の禮は解せぬのであると答へたならば、諸孃は果して如何なる感を惹起されますか、之は恰も他家の家風は熟知して居るが、自家の家風は知らぬと云ふに異らぬのである、

凡そ禮は貴賤男女を分つべきものでは無いが、殊に女子は一家の主婦となりて内務を處理し、子女を教養すべき責任あると同時に、また社會に出でゝ交際塲裡に立つて活動すべき者なれば、その多くの人々に接するに方りて、その禮容の虚僞に流れぬやうに注意しないと、怨を買ふの基となるのである、

監獄に於ける新年の御馳走

東京監獄典獄　藤澤正啓

入監中の人々が、新年を迎へて、如何なる感想を有つて居るかは、十人十種で、私が引受けて斯うであらうといふことも云へぬが、それは監外は戀しいに違ひない、また監獄の方でも平素とは違うて、食物の上にも注意を與へて、幾分の御馳走を食はすことにして居る、さてその献立はと云へば、左の如き

ものである、(平常は昨年の女鑑誌上にあり)

◎一日 ▽朝 は醤油汁にて材料と分量は、醤油二勺、切餅二合、小蕪菜五匁、竹輪二匁、鱈二十匁、數の子五匁、切昆布二匁、澤庵三匁△晝 煮付にて醤油一勺五才、田作五匁、黒大豆二勺、昆布巻十六匁、澤庵三匁△夕 煮染にて醤油一勺二才、蒟蒻五匁、胡蘿蔔五匁、大根五十匁、澤庵三匁、

◎二日 ▽朝 味噌汁にて味噌十匁、肝油四厘、甘藷五匁、澤庵三匁▽晝 煮付にて醤油二勺、切鯣二匁、數の子五匁、大根十五匁、蓮根十匁、澤庵三匁、△夕 醤油汁にて醤油二勺、豆腐五匁、竹輪三匁、澤庵三匁、

◎三日 ▽朝 味噌汁にて味噌十匁、肝油四厘、切干二匁、澤庵三匁▽晝 煮付にて醤油一勺五才、數の子七匁、鮭二十匁、澤庵三匁▽夕 醤油汁にて醤油二勺、鱈十匁、葱五匁、澤庵二匁、

◎七日 ▽朝 味噌汁にて味噌十匁、肝油四厘、なづ菜五匁、澤庵三匁▽晝 煮染にて醤油二勺、數の子五匁、揚豆腐五匁、干瓢七匁、胡麻油二才、澤庵三匁▽夕味噌汁にて味噌十匁、肝油四厘、若布二匁、澤庵三匁、

◎十五日 ▽朝 味噌汁にて味噌十匁、肝油四厘、芹五匁、澤庵三匁▽晝 煮付にて醤油一勺、數の子十匁、田作五匁、澤庵三匁▽夕 味噌菜にて味噌五匁、胡麻油一才、白大豆四才、麻の實五合、牛蒡一匁、澤庵三匁、

◎二十日 ▽朝 味噌汁にて味噌十匁、肝油四厘、若布二匁、澤庵三匁▽晝 煮付にて醤油一勺五才、豚肉十五匁、葱四十匁、澤庵三匁▽夕 味噌汁にて味噌十匁、肝油四厘、切干二匁、澤庵三匁、

記者曰く、東京監獄は重に未決被告人を收容する所なり、されば無辜の人にして偶々かゝる淋しき悲しき新年を迎ふるものなしとせず、されど煙の昇る所火なきにあらずと云ふ諺もあれば、瓜田に履を入れぬやう、殊に婦人は深くつゝしみ、書生、下女などを置くにしても、隨分注意し、證人として法

廷に呼出ざるゝ位はまだしも、過つてかゝる所に嫌疑の身となりて、この何夕、何才の御馳走に預からぬやうにしたきものなり、さわれ行届きたる献立のつくり方、分量のよくきまりたる、多くの家庭にて參考とするに足るべき價あり、その品目の代りたるなど、大に注意して見るべきものとす。

料理及製菓の實驗談

富田豊春

圖辨當

圖辨當は製造法とは申されぬが、初春の御慰みに述べて見やう、先づ十人前として、其内六人前は、お客と、主人の分として、口取、さしみ、燒肴、椀盛、或は茶碗むし、でま煮、香の物、其の四人前は御供の分として、椀盛と、燒肴、香の物位として、拵へ置き、十本の圖へ、主人一本、客五本、御供四本、として、集まりし十人にて之を引き、圖相當の膳部を其人の前に出し、食すると云ふ遊びなり、

▽意注　本式は辨當箱に詰めて出すのであるが、如上述べたのは、膳部としたのである、いよ〳〵食する時は、客と主人とに相當した者より、御供に當りたる人々へ分配して、出品を平均なし、睦まじく食すべし、夫故口取の蒲鉾杯は、人員丈になし置くべし、

異形ゆで玉子

本美濃紙を四つに切り、四角なり三角なり、隨意に折り、其中へ玉子を割りて入れ、口を二つ折として、白の木綿糸にて縫ひ、鍋に湯を沸し、其中へ投じて凡十五分位ゆで、網目のある金杓子にてすくひ揚げ、冷水に投じ、廻りの紙を剝ぎとるべし、水より引揚げ、水氣をとり、茶碗盛の種に用ゆ、

肉入り寄せ豆

靑き干した豌豆を、凡五時間程水に漬け、別に牛肉を賽の目に切り、前記の豆を、水氣を絞り、二品共に適宜に酒醬油砂糖にて鹽加減し、凡二時間も煮

葛粉を水にてとき、加入して、暫時能く攪交せながら煮、他の器に移し置くと固まる、それを程よく小皿に盛り、客に出すべし、

沙魚の酢漬

上等の酢、凡一升鍋にて煮たて、瓶に入れて冷し置き、沙魚を焼きて前記の酢の中へ、焼立のを投入して、魚の浮かぬやう瓶の中へ、目笊の如き物を入置き、凡五週間經過して出すべし、頭骨とも柔かになる、

からかは

辛皮と云ふ物は、山椒の内の皮なり、日光或は上州伊香保邊に製して出すと聞く、日本橋近傍の干物販賣店にあり、其辛皮を堅く巻紙の如くに巻きて、鋭利の庖丁にて小口より、搔ずるめの如く極薄く切り、さつと煠で水氣を絞り、砂糖醤油にて氣永く煮詰るべし、

▽附言　予が幼年の頃(嘉永安政年間)正月元日より七日まで、江戸市中を辛皮や――からかはと高音に四本の調子、則神仙位の聲にて、凡二丁も隔て其美聲が、初春の高音をうたふ鶯に等しく、一の名物の翁あり、齢八十餘と記臆せり、

打栗　甲府漫遊製造場實驗

栗の上皮をむき、澁皮の儘、蒸籠に蕎麥の殻(皮)を入れ、其中へ如上の栗を埋めてふかし、別に竹筒(底無し)に合せて堅木の棒を拵へ置き、ふかしたる栗の薄皮を剝ぎ、右の竹筒に入れ、上より前の木にて押し、叩きつぶす、

柚皮の甘露煮　(廢物利用徳用向)

前に述べた、柚ジャミを製した皮を適宜に切り、白水(米の洗ひ汁の濃きのが最もよろし)にて、煠で夫を引揚て能く洗ひ、清水に一晝夜漬け、(度々水取替へるべし)、夫を目笊に揚げて水氣を去り、白砂糖にて暫く煮、別に味淋酒と食鹽とを加減して、煮立て前の煮た柚と合せ尚煮るべし、

▽注意　始めより、味淋酒を入れると色が出です加之柚が堅くなる恐れあり、

犯罪の動機

東京控訴院判事　石井豊七郎

犯罪と云ふものゝ惡むべきものである事は、固より論を俟たぬのであるから、何所までも之を除去る事に努めねばならぬのである、併し其動機に就て仔細に觀察を下して見ると、その惡むべき犯罪も、頗る可憐なる事情に思ふのである、

同情すべき犯罪の動機

近き例を示せば、既に相當の教育を受け、更に進んで高等の學科を修めんとの志を懷き、鄕關を出て、遙かに東京に來つて　苦學の位置に甘んじて居た一靑年は、當時薄給を受けて某官省の雇となつて、勤務の傍ら勉學に餘念の無かつたので、實に感ずべき苦學生の模範とも稱すべき者が、不圖苦學の手段としてか官金を着服したのである、之を手初めとして段々恐るべき罪惡の淵に近寄つて、遂に官の文書や印形までも僞造したのである、斯樣な大罪を犯すに至る次第は、先づ普通なれば酒に溺れたとか又は色に耽つたとか云ふのに基くものである、けれども此の靑年は左樣で無い、家には最愛の妻や子までも遺してあるのみならず、その品行に付て聞いて見ても、別に鄕黨間に不評判も無いのである、

然らば何故に此の靑年が罪惡を犯すに至つたかと云ふに、丁度それは昨年の東京博覽會の開設に際しての事で、豫め田舍より父兄親戚の者が見物に上京するとの通報があつたので、其等を款待するには、現在の座敷借では如何にも外聞が惡いと云ふので、何か無理工面をして不相應なる手廣い家屋を借り受けて之に轉じたのであるが、家屋のみ廣くても不釣合であるから、それに相應したる器具その他來客を迎ふるの準備をしたので、それが爲に莫大の費用が嵩

んだのであるが、已れの收入のみでは迚も之を支拂ふに堪へないので、止むなく不義理の借金をしたのである、一時借金政略で此くは爲したもの丶、追々時日を經るに從つて是等を返濟せねばならぬ期日が迫るので、此の一青年は如何にして此の目前の難關を通過したものであらうかと、頻りに頭を腦まして居たのである、斯様な事實は能く有勝ちで、單に之のみに就て見れば、氣の毒でもあり、又馬鹿々々しくもあるのであるが、兎に角此の如き事はあるらしく思ふ狀況である、

犯罪は慾望の急迫より起る

元來犯罪は大いなる外見を飾るより來るもので、此の青年の如きも、父兄を悦ばせたいと云ふのだから、その例から見るときは、父兄を饗應するのも宜いのみならず、出來得る限り歡待を盡すべきで、此點から見ると其犯罪は可憐で、自分は知らず〳〵陷つたのであるから、その犯罪の動機と云ふものは、毫も惡むべからざるのみならず寧ろ憐むべきである

一體犯罪の動機と云ふものは如何なる所より生ずるものであるかと云ふに、多くの場合は慾望の急迫であると思はる丶、此の慾と云ふものは人間に離れぬもので、古へより之に就ては種々の說もあり、又之を誡めてもある、けれども吾人が生存して行くには最も大切のもので、實に無くてはならぬものであるが、此の慾望なるものが或程度を越えて、所謂急迫が一轉すると犯罪となるのである、學問の上から佛家や儒者で說き方に區別はあるもの丶、兎に角此の慾望と云ふもの丶始末は困難なものである、而して此の慾望には二種類ある、即ち一は動物的で他は精神的である、此の二つの者は社會の進步に從つて進化するもので、原始の時代に在りては、所謂精神的の慾望なるものは皆無では無いが、比較的に動物的のものが多いのであるが、人文の發達すると共に漸く精神的のものが增殖するのである、とは云ふもの丶、原始は原始、今日は今日に二者の慾望は存し

て居るのである、

遠き我等が祖先の事は歴史に於て知る事は出來ないが、假にアダムとイヴが人類の祖先としたならば此の兩人は時代相應に慾望があつたので、その慾望の急迫よりして遂にキデンの林檎を盗むの罪を犯したのである、此の如く、如何なる時代でも慾望の急迫と云ふ事は免れぬので、從つて犯罪の種類も一樣では無い、故に社會の進歩と共に如何に慾望が發達して千種萬樣に犯罪が分れやうとも、その動機なるものは一括する事を得るものである、即ち美名の慾望、平たく云へばホメラレタイと云ふに外ならぬのである、前に掲げたる實例を見れば、その青年の犯罪と云ふものは、如何にもして親兄弟や故舊の者に譽めて貰ひたいと云ふに歸するのである、此の如き卑近の例は、日々の新聞紙上等にて見受くる事で、彼の博徒や土工等の社會に於ては決して珍らしく無い、彼等の親分と呼び又は親方と稱せらるゝ者は、概して人を毆打し創傷し、更に進んで人を殺すと云ふやうな、到底常人の忍びざる事を行ふと云ふ風儀を爲すので、之を爲す事が乃て親分或は親方等の美名の慾望を充たすの因となるのである、又近き例に於て、此の東京市内に於ける不良の學生の如きは、白晝に市井を横行して所有害毒を流しつゝあるのであるが、彼等は何が爲に此く忌むべく厭ふべき所謂バクリ學生などゝ云ふ、實に修養時代に於ける、最も人生の大切なる時期に於て此の醜名を贏ち得たのであるかと云ふに、當時彼等の社會に於ては、白晝敢て市井の間を横行して、ヨリ多く害毒を流すものを以て這種の白眉と崇め、且つ自から誇りとして居るのである、故に或者の如きは、三三伍々隊を成し軍を成して之を行ふに至りしのみならず、若しも之を爲す事の巧みならざるものは指揮せらるゝと云ふ有樣であるから、如何にもして巧みに他人の財物を掠めて同人間に誇りたいものであると云ふ誤解よりして、倍々犯罪を重ね惡名に甘んじて居ると云ふやうになつたのである、

此の外實例に乏しくは無いが、まづ其は略するとして、其美名は何人から求めんとする者であらうかと云ふに、試みに一二を舉ぐれば、一は自己が常に崇拜する所の人、二は自己が常に愛情を捧ぐる人此の二者であるらしい、尙ほ見地を換へて之を大別すれば、即ち一般の者より得んとするものと、他は特定の人より得んとする者の二となるのである、例へば、財力を得んとする多數の者は、之を得て榮耀榮華を試みんとし、或者は、一人よりヨリ多くの人々より美名を買はんとする者



の如きである、ソコデ國家は、其動機から撿べて、犯罪に對して夫々法律の制裁を加へ刑罰を科するのであるから、その刑罰が肉體に若干の苦痛を與へるのは云ふまでも無いのであるが、精神的慾望の進んだ今日に於ては、全身美名の慾望に充たされた者は、左程刑罰を苦とも思はないで、却つて獄窓の底に自ら慰安を求めて居るのである、結局慾望の存在する限りは其は免れないのであるから、之に對して刑罰の制

裁は無効となるのである、けれども國家は國家の立場から之を科するのであるが、それは問題外であるからサテ措て、前にも云へる如く、慾望と云ふものは人間の存在に缺くべからざるのみならず、又名譽心と云ふものも發達せしめて行かねばならぬのである、約言すれば、

慾望と名譽とは個人的成功の要件

なると同時に社會的發達の要素である、若し此の二者が無かつたならば殆んど人類の價値は零となるのである、

家庭に於て幼者に對する注意

或者は陰徳と云ふ事を奬むるが、これ即ち自分が將來の陽報を豫期するのである、又毀譽褒貶は眼中に措かぬとか、或は毀譽褒貶の外に立つて居るなどと仙人氣取りの者もあるが、これまた永遠の後に譽れを望むのである、此の他宗教上の訓誡等も此の範圍を出でぬのである、然らば美の望みと云ふものは人を成功に導く所の光明であると云ふも過言では無いのであるが、その之を捕ふるに於て間々手段を誤まる時は、その弊は測るべからざるに至るのである、

然らば此の點に就て、一般の毀譽褒貶、就中幼年の毀譽褒貶は、吾人が衣服に於て多く試みる事であるが、之は大いに父兄たる者が注意を拂はねばならぬ事である、何となれば、習慣は幼時に於て頗る注意をしないと、謂ゆる第二の天性となつて、容易にその習僻を除き去る事の難いものである、それにも關はらず、世間では往々今日に至るまで、殊に幼者に對して之が措置を誤つて居るやうに考へる、奢侈を禁ずると云ふ事は到る所に見聞するのであるが、試みに美服を着けたる小兒を見れば、家庭は勿論、隣佑の者までが其美を褒めるのであるが、此の褒言は小兒の頭腦に如何に響くであらうか、顏の美くしいのを以て心を知る事は出來ないと云ふ歟は行はるゝが、可愛らしいとの譽め言は、その幼けない頭に

如何に響くであらうか、善い事を行つた爲に、之れ賞するに金錢を與ふる習慣は良いのであらうか、此と反對に衣服を汚し又は破り、或は惡戯をしたからと云つて、金錢を與へぬと云ふが如き賞罰法が行はるゝのであるが、是等の賞罰法の間に成育せられたる人物は、幼時に於て已に業に心の奥の奥に大いなる誤解を植えつけられたのである、其誤解を植えつける者は誰であるかと云ふに家人である、家人の中でも、父親よりは殊に母親たる者は常に幼者に近接して居るのであるから、母たる者は幼者に對して毀譽褒貶するに就ても餘程注意を拂はねばならぬ、と云ふものは、前述の如く、習慣は第二の天性となるもので、俚諺にも、三ッ兒の魂百までもと云ふやうに、一たび幼者の頭腦に深く印象せられた事は容易に芟除せらるゝものでは無い、其爲に長じて後、餘り其美を慾望するが爲に、思はざる罪惡に陷るやうに爲るのであるから、第一に場合、第二に目的、第三に賞罰の方法、此の三者を撰びて適用を誤らないやうにするのは、蓋し世の母たる者の寸時も忽がせにすべからざることである。

社頭の松

山岡超舟

「元日は嬉し二日は面白し」と古人の云ひけん如く實にうれしき明治四十一年の元旦は來たりぬ、天地と共にゆるぎなき大御代の榮ゆく松は、千年の緑とこしへに翠嵐を吹いて歳寒の操いよ〳〵堅く年々歳々變らねど、今年は畏くも社頭の松と御歌初めの御題おほせ出でさせ玉ひしに殊更芽出度くて、瑞氣こむろ、代田の宮や、八百萬の神の社の松はさらなり山また山の岩根松、賤が伏屋の門松さへ一入色榮て美しさ云はん方なく、君が八千代を祝ふ風情あるぞいみじき、さらでだに見渡す限り今日は昨日に變りて、家々の軒端にかゝぐる日の御旗の朝風に飜るも長閑に物みな新しき心地し、何處ともなく梅匂ひて嬉しさ云ふべからず、されば先づ聖壽の無疆をほぎ奉り、雜煮祝ひて屠蘇酒の機嫌に赤面ながら、三つ四つ松の事ども書き綴り、聊か新春の賀辭に代へ

んとす。
抑も社頭の松とはあながちに祠の大前、又は華表の邊のみに限らず、極めて廣き御題にて即ち祠に因める處の松、例へば住吉、春日の如き、やがて皆社頭の松とは云ふなり、我師從二位清綱翁かつて詠ずらく、

住吉の神のいかきは岸に生ふる
　松の千世もてかこふなりけり

あはれ神韻標緲たる白砂靑松の處、木の間がくれに神殿を直接おろがみ奉り、幾千世かけて神の御稜威を仰ぐ尊さ、然れど老松蒼苔を裝うて昔ながらに神域を守もれる景致に至りては、翁又詠じて曰く、

住よしの岸の姫松老まつに
　成りにし後も久しかるらむ

更に能因法師は

春日山岩根の松は君がため
　千歳のみかは萬代ぞ經ん

又古今集には讀人知らずとして

我見ても久しくなりぬ住の江の
　きしの姫松いくよ經ぬらん

とあり此のほか幸文、成章の歌に

春日野の峰の松原かせふけは
　遠きむかしの聲そ聞ゆる　（幸文）

かきりなき君か御代にそ住吉の
　松も八千たひ生ひかはるらむ　（成章）

等何れも神さびたるさま見る如く、社頭の松の題意にそむかず、さりながら一の華表二の華表をくゞりて神前にぬかづき、頭上高く亭々たる千古の老松常磐の色濃かに、千木さへ見えわかぬまで梢生ひ茂りて神々しき書題に接しては

住の江の浦ふく風にきこゆなり
　おまへの松の萬代のこゑ

と瀧園の大人口吟給ひき。
夫れ松は本邦到處に繁茂し四時鬱蒼として霜に堪へ雲を凌ぎ千歳色を同うす、故に松はもとタモツの上略にてモとマと相通ふより起る、蓋しこれ久し

く壽を保つの樹なるを謂ふ。神仙傳に
偓佺好んで松實を食ふ能く飛行すること走馬の如し其服する者は皆三百歳に至る。而して松の文字に就ては百木の長たるが故に木扁に公の字を用うと云ふ。又呉書には、

初め丁固尙書となる松樹其腹上に生ずと夢みる、人に謂て曰く松の字は十八公なり、後十八歳にして吾れそれ公たらんかと、卒に夢の如し。と十八公の名此處より起る、尙松に五大夫の異名あり、即ち史記の始皇本紀に云ふ。

始皇泰山に上り石を建て封じて祠祀す、下る時風雨暴に至る、依て松樹の下に休み其樹を封じて五大夫とす。この他門松、立松、飾松、松囃、松の内、小松引、子日の松等の起原に就ては世諺問答、日本書紀、紀事、月令集、史記龜策傳、秀吉公家譜などに散見すれど餘りくだ〳〵しければ略し、松村理學博士の松に對する見解を擧げん、その著普通植物に曰く、

古き諺にも峯には松を植ゑ谷には杉を植うべしと云へり、以て松は如何なる惡地にも生長する事を知るべし、松は林をなす事杉よりも宏大なるが如し、常綠なるが故に公園に植うるに宜しく又並木と爲すは松より勝れるはなし、殊に海邊に在りては、靑松白砂の配合畫圖の觀を成し、蜑の苫屋も沖行く帆影も一層の景致を添ふ彼の松島の如きも松に依つて名勝たるもの、八百八島の松風松雨は即ち松島の生命なり、海邊に生ずる松は風の作用に依りて屈曲百態頗る雅趣をなすものなり、松は杉樅等と同く松柏類に屬する常綠の喬木なり、其主なる種類を擧ぐれば赤松、黑松、最も普通なり、赤松は一名メマツとも云ふ、其葉軟にして弱く且つ小なり、ヲマツは之に反して其名の如く雄々しく葉は剛く強し、木皮稍黑色を帶びたるが黑松の名あり而して西南には雄松多く、東北には雌松多し、一種アヒサンマツと云ふあり、こは雌松と雄松との間の松と云ふ意なるべし、以上の種類は其葉二針より成る所謂二葉の松な

り、普通ならざる種類には五針のものあり、即ち五葉の松の類なり、松の葉は針葉樹の名に好く適へるものにて人の知る如く杉或は樅よりも一層針の形を成せり又松の花は他の松柏類に屬する樹木と同く人の目を惹くに足らず、四五月の候嫩芽を發すると共に花咲く雌雄の兩種なり、雌花は赤色を帶びて綠芽の上に少しく生じ雄花は稍黄色を帶びて綠芽の本に多く簇生す、雄花は盛を過ぐれば脱落し雌花は長く止まりて後松毬と成る、二年或は三年を經たる秋に至りて熟す、而して綠芽は後松の枝となる、松毬の枝上に在るを見るは此の故なり、松は杉檜より品質劣れるも生長する事速にして薪炭となり又大なるものは棟梁となり板として船に造るべく其他種々の建築材とす、雄松の材は石垣の土臺となす時は千歳朽つる事なし、松脂を採るは黒松を第一とし赤松之に次ぐ又松の若葉を水に浸し惡汁を去り酒にて蒸し之を打ち柔らげて煙草に代用し、樹皮は饑饉の時食用に供す、吾人の松茸を採るは多く松林に在り、松茸は雌松の生ずる所に多く、茯苓は松茸と同く菌類の一種にして雄松の生ずる所に多し、一種朝鮮松は葉極めて長く五葉にして本邦の東北地方に產すチヾリ頗る大なり果とし食ふべし、一種姫小松は葉短く五葉にして山中に產す。一種五葉の松は名の如く五葉にして往々庭木に用うるものなり、一種ハヒマツは高山の頂にのみ生ずるものにて性として地に這ふが故に此名あり又琉球には琉球松あり、臺灣には臺灣松あり、各別種類にして葉は二葉なり、以上は松の主なる種類なりとす、猶他に落葉松と文字に書きて一にフジマツ又カラマツとも稱ふるあり、こは富士山に多きを以て富士松の名を負へど實は松の種類に非ず混同する勿れと云へり

因に東京市中にて歷史的最も知名の松を擧ぐれば芝白金三光町の三鈷の松、四谷霞岳町の遊女松、高田老松町の鶴龜松、淺草川畔の首尾の松、深川猿江町の五本の松、下谷根岸の御行の松等なり、而して不忍祠前の老松、三廻り神社の古松等趣きなきにあらざれど特別の名稱なきが如し。(そはり)

家庭に於ける心理學の應用

高島平三郎

第七　想像（上）

●●●●●●●●想像は如何なる作用なるか

可愛い娘を遊學させて居る母親が暑いにつけ寒いにつけ娘の身上を案じ煩ふ心は愛情と想像との混じて居る作用で有ます「この寒さに今頃はどうして居るであらうか、寄宿舍は此樣な處であらう、敎場はあの樣であらう東京はこゝよりは寒いといふからさぞ困るであらう風邪でもひきはせぬか」など母は自分の經驗と娘の歸りての話、手紙の模樣などから得た觀念をいろいろと組み合せてあり〳〵と眼前に娘が寄宿舍で勉强して居る狀を心に畫いて或は喜び或は案じるのであります、さうすると娘の方でも亦讀書に倦んで机の前の壁にかゝげてある母のなつかしい寫眞を見るともなしに見て此の夏休に歸つて樂しい日を送つたことなど想ひ出すと共に母のことについていろ〳〵と細いことを心に畫き出し眼前にある寫眞の母が動き出し物語りし或は笑ひ或は眉を顰めるなど全く實際の母の如くに心に現はれる場合もあるでせう。すべてかやうに現在自分の經驗して居らぬことを過去の經驗に基いていろ〳〵に組み合せて宛も今經驗して居るやうに新しい觀念を作る作用を想像といふのです。

併し想像の作用はいつもかういふ複雜なものではありません、過去の經驗がそのまゝに現はれずに多少でも形をかへて心に浮んで來ればそれはもう純粹の記憶ではなく想像の部に入るのであります。それゆゑ學問上ではかういふ想像を再生想像と申しまして普通にいふ想像即ち構成想像と區別して居りますかういふことが想像作用であるとしますれば吾々の

平生の心の作用は想像が大部分の働きをなして居ることが分ります、何故といふに記憶のところでも話しましたやうに吾々が過去の經驗を思ひ出すに少しも變化なしにちやんとその時處までもおぼえて居るといふことは少く大抵幾分の變化がある、時としては全體の經驗の中の或部分ばかりを心に浮べるといふやうなことが多いからであります、それで想像が人心に於てどんなに重要な働きを持つて居るかも分りますし、隨つて家庭に於ての必要なることも分ります、併しこれは後に特別に詳しく話したいとおもひます。

想像は如何にして生ずるか

一家の主婦が家庭に於て晩餐の料理を考へて作り出すにしましても先づ其材料がなくてはならぬでせう、魚にするか肉にするか野菜にするか、何れにしても其材料を集めそれから其調理の方法即ち形式も定まる譯です最も主婦の心の中の心算では材料の考と調理法とは同時に定まるのでありますけれども、それを實際に

現はす場合には先づ材料が手に入らねばなりません料理のやうな形のあるものを作り出す働も觀念のやうな形の無いものを作り出す働も同じことでありまして想像に先づ第一に必要なものは心の材料であります、心の材料とは取りも直さず各自の過去の經驗であります、その經驗の中には形もあれば色もあり聲もあれば重さもありその外天地山川草木鳥獸ありとあらゆる、此世の中のものが觀念となつて殘つて居るのです、そこで何かまだ經驗せぬことを心中に新しく作り出す必要のある時には、その經驗の中から自分の氣に入つた材料を選んで、隨意に組み立てるのです、その組み立て方にはいろ〳〵ありませうが、つまり大別すれば過去の經驗すること、又之を他の經驗に結合すること、の二つに過ぎないのです例へば婦人方が新に羽織を作らるゝ場合でもまだ羽織の實物の影も形もない時から、心の中には立派に羽織が出來て居るわけでありますが、その時はに地質は誰さんの召して入らしつた樣なのがよいからあ

丶いふのにしやう、縞柄は何子さんのやうなのにしやう、丈はどこの奥さまのが丁度よかつたからあの位にしやう紋は誰さんも誰さんも大きかつたから大きくしやうといふやうにわれやこれや多くの經驗を分離結合して一つの新しい精神上の羽織が出來上るのです、それゆゑ想像の内容即ちその材料といふものは全く過去の經驗を出ることは出來ないのでありますがその形式即ち想像して出來上る觀念はどんなことでも自由自在であります、羽織の例にしてもその考へる材料はどうしても



經驗と離れることは出來ませんが心中で拵へ上げる羽織は今まで人の着たことのないやうな奇妙不思議なものをでも作られぬことはありません、想像の働の自由であるといふのは全く此の形式の方面のことをいふのです。

●想像の種類

普通にいふ想像作用は大抵前に擧げた例のやうに自分が何か目的を以てかういふ事を企て丶見やうとかかういふ繪を書いて見やうとか自分の心から出て自分が主になつて思慮して後に出來るのであ

ります、それ故かういふ想像には心の高尚なる作用が入用で又非常に努力を要するものであります、かういふ想像は之を發動想像又は思慮想像と申します、これは前に擧げた構成想像の塲合に現はれる作用であります、併し又別に自分が意を用ひて定まつた觀念を作り出さうといふのではなく心の自然の働きで出來る想像があります、前に聯想の働を說明する時にも例に引きましたやうに吾々が別に何等の考もなく靜坐して居る時に續々と現はれて來る觀念には前の經驗がおのづと、色々に組み合はされ、まとめられて出て來るものが多いのであります、是等は自分がさういふことを考へやうさういふ觀念を組み立てやうとするのではないけれども、その結果は全く前の構成想像と同じことであります、それゆゑ是等も亦想像の作用中に入れて受動想像又は自發想像といふのであります、吾々が他人の話を聞いて理會してゆくのも實は受動想像が働いて居るのであります、何故といふに人の話を聞く時にはその話される事柄に應じて聞いて居る方の人の心の中にはいろいろの觀念が組み立てられて居るのでその働は自分の考で組み立てるのと別に變りはないからであります話をして聞かせてもよく分らぬ人は必ずしも經驗が乏しいといふわけでもなく又推理力の少いといふわけばかりでもなく、つまり想像力の足りないといふことも主要な原因であります。

以上に說きました想像の種類は作用の上から分けたのでありますが、その外構成想像（思慮想像）は更に目的の上から之を次の四つに分けることが出來ます。

（一）學問上の想像　此は學者が種々の學說を立てる時の心の作用です、どんな確かな說でも初めはたゞ一人の學者の頭の中に畫かれた想像に過ぎぬのです、その想像が口に出り筆によつて世の中に發表されますと他の學者がその說に基いていろ〳〵と實際の研究して見ます、それが一々その說の通りの結果を得ればもはや想像說に止まらず　立派な學

説となるのであります、すべて人の意見といふことは多くは其の人が自分の經驗に基いて立てた想像に過ぎぬのであります、それですから想像力の乏しい人はたゞ詩歌のやうな文學上のことに成功せぬばかりでなく科學上のことも更に新發揮をすることが出來ぬのです、此の點は婦人の缺點でありますから學生である時は勿論家を持つやうになつても何か見たり聞いたりした度每に自分は自分だけの考を想像によつて作つておくことが必要です、又自分の子供などが何か分らぬことを尋ねてもすぐ敎へてやるのは深切のやうであるけれども、却つて不深切です、必ず先づお前はどう思ふかといふことを尋ね、努めて子供の想像力を働かせるやうにせねばなりません。

（二）美術上の想像　演劇は勿論のこと小說でも繪畫でも詩歌でも音樂でも彫刻でも苟も人の美觀を滿足させる爲めに作る者は想像の產物でないものはありません、想像は人の心のすべてを滿足させるものでありますが取り分け感情を滿足させることが多いのであります、若し世間の美術が寫實主義自然主義でたゞ實際のことかばかりを現はすものであつたら繪畫は寫眞と何等の差別もなく演劇は裏店の喧嘩と同じやうなことになるでありませう、然るに美術にはすべて人の想像力が加はつて通常實際の經驗で得られぬ美はしい快いものを作り出すから價値があるのです、繪畫にしても全體の景は松島に取るが松の枝振り、岩の形、海の模樣舟のさま人の姿などは、繪を畫く人の過去の經驗から最も之に適した美はしい材料を取つて新しい景色を作り出すの類であります、此の出來上つた景色はその畫工の手ぎはによつては天地間に二つとない美しいものであつて眞に造化の工を奪ふというてもよいものともなるのであります、此の外音樂でも小說でも皆此の通りでありまして、自然に任せておいては到底聞くことも見ることも經驗することは出來ぬ美はしいものを作り出すのが美術の美術たる所以であつて又人の諸動物にすぐれて神に近い所以であります、併し美術上の想像

は必ずしもかやうな純粋美術の製作品に限つたわけではありませぬ、家庭の装飾でも花の生け方、幅のかけ方、其の外諸物の配置など各自の想像によつて最も見ばえのあるやうに美しくかざるのはやはり美術上の想像作用に屬するのであります、又人の作り出した美術品を賞玩するのには此の想像力が必要であります、若し此の力に乏しい時には人の想像をも理會することが出來ぬわけであります。

（二）**實際上の想像**　學問上の想像は知力の滿足を主とし美術上の想像は感情の滿足を主とする樣に實際上の想像は意思の滿足を主とするのであります、それ故實際上の想像に於ては其心の中で考へたことが實際に行はれねばならぬのであります、前の二つの想像は必ずしも實際に行はずとも毫も不滿足を感ぜぬのでありますが、實際上の想像は行ふことが出來ねば空想というて卑まれるのであります。

此の想像は更に二つに分けることが出來ます、一は道德上の想像で他は事業上の想像です、全體人が

平常道德上のことを考へ、或はその敎を受けるのは何のためであるかといへば、かねて敎へられたこと又は考へておいた事を應用すべき場合が來たら直ちに之を實際に現はす必要があるからです、例へば子供は親孝行の話をして聞かせるのは、たゞその話をおぼえさせるのが目的ではない、之によつて子供の心に私も親にかうして孝行をしやうといふ實際上の想像を畜かしめ之を行に現はさしめるのが目的であります、それゆゑ道德上の話はあまり極端の行であつて通常の場合には行へぬやうな例は避けねばなりません、曾て或る地の高等女學校で一人の敎師が貞女の例話を話して貞操の貴ぶ可きことを敎へました、然るにその例話が何れも夫の死んだ後再婚をすゝめられても肯んぜなかつたといふ話であつたものですから、その校の生徒の中には「私はお嫁にゆくなら肺病やみの所へゆく」といふものが出ましたそれは何故と聞きましたら「肺病やみの人は早く死ぬから夫が死んでから貞操を守るのだと」申したさ

うであります、これは作り話のやうでありますが實際のことであるといふことです、是等も敎へる材料の選擇を誤つて居るからかやうな想像を少女の頭に畫かせるやうになつたのであります、その外大坂のお富が强盗の來た時兄さんを助けた話を聞いた少女が「我家へも强盗が來て兄さんを縛ればよいさうすると私がお金を持つて往つて兄さんを助けて上げて下さいといふのに」と申したさうであります、是等も亦何百年か何千年かに一度あるかないかの例を擧げて敎へるからかやうな實際に行はれぬやうな想像を畫くことになるのであります、それゆゑ道德上のことは極めて平凡で誰にも出來るやうなことを喜び勇んで實行するやうに導くのが最も巧な敎へ方であります、いづれにしても道德上の想像は實際に行ふといふことがその特色として價値のある點であります。

又いろ〳〵の事業をするに目論見とか企とか申しまして初にその考を畫き出すのは是れ亦實際上の想像であります、事業といふほど大したことでなくとも婦人の方々が着物をお作りになる時「つもり」といふことをなさるのは、是れ即ち立派な實際上の想像でありまして、內閣で國務大臣が政事上のことを計畫なさるのも參謀本部で參謀官が國防のことや戰爭のことを豫定せられるのも同じことであります、其の外商人が前途のことを見越して商品を仕入れるとか或は賣り出すとかいふやうなことや、農業家が耕作法や肥料に就いていろ〳〵と考をめぐらしその考に從つて實際に行つて結果を試ることなども皆此の實際上の事業想像の中に入るのであります、是等の想像は處世上實に大切な心の働であります、人の成功するとせぬとはこの實際想像の如何に出ることが少くないのであります、犯罪人の多數はこの想像力に乏しいものでありまして、先見の明といふことがありませぬ。それゆゑ通常の人が見ればその現はれるのは分りきつて居ることを盜賊などは分らぬつもりで平氣で惡事をするのです、一家を治めるものが

一年又は一月の豫算を定め或は年中行事を豫定するなどいふことは即ち此の事業上の實際想像の働に由ることであつて家を齊へるに極めて大切のことであります。

(四)宗教上の想像　宗教上の想像は以上に述べました眞(學問上)善(道德上)美(美術上)の全體を極めた理想であります、吾々は、現在實際の有樣に滿足せず、常により良き狀態を求め自分の心に於て考へ得る最も完全最も圓滿のものを神又は佛と崇め、之に憧れ之に賴りすがるものであります、これが即ち宗教心でありまして吾々を向上の一路に導くに大切な力となるのであります、理想といふのはつまり完全な想像でありまして自分の心に此の上はないと考へる觀念であります、それゆゑ自分の學問知識が發達するに從ひ理想もだん〲高く複雜になるものであります、神や佛の考もその通りで吾々が子供の時に考へた神佛と成長して高い教育を受けた後に考へる神佛とはその性質が非常に異つて來るのであります、理想はたゞ宗教上の神佛の考ばかりでなく一般の人に缺ぐ可らざる大切のことでありますからなほ後に詳しく說くことにいたしませう。

百合の菓子製法

梅田矯菓

凝集百合球

原料調合率　△茹百合百五拾匁　△上等粗目糖百六十匁　△片栗粉二匁　△淸水八勺　食料紅等

百合を能く洗ひ、淸水中に暫時浸して惡汁を拔き土鍋へ入れて淸水を注ぎ入れ、七輪火に掛け柔かに茹覆して下ろし、笊に掛けて煮汁を絞り、前記の量の加く百五拾匁を計つて琺瑯塗鍋中に投れ、次に粗目糖百六拾匁の半分だけを加へ、七輪烈火に掛け、杓子で間斷なく攪きまはし　暫時煉合せ、更に殘部の粗目糖を投じ、鍋底へ焦着かぬ樣に注意して濃流體に煉煮詰め、試みに、煉物を杓子で掬ひ、ボタ

〳〵と濃く垂れ落つる加減を見計らつて、更に其中へ片栗粉貳拾匁に清水八勺程加へ、溶き延べた葛汁を注ぎ込み、手早く攪拌し混ぜ合して後四五分間、満遍なく煉混ぜ煉返し、火から下し、其儘又は食料紅液を少許注ぎ交ぜて淡紅色に着色し、直に深一寸横縦四寸位の漆塗重箱か、陶器製の角狀の蓋器類内へ移し入れ、上面を搖均し、半日間程風に曝して熱氣を發散し、凝固て後、平板上へ裏返しに移し出し、庖丁を濡布で撫つけ濕して、幅一寸長さ二寸位の拍子木狀に押切て斷ち離し、其切口を段々と下げて附合せ列べ、菓子皿へ盛つて出すべし。

甘露百合

百合球を五合程水中に投じ能く土氣を洗ひ落し更に清水に浸し、貳拾四時間位惡汁拔をしてから笊に揚げ、水を絞つて土鍋に入れ、清水をピシヤ〳〵と注ぎこんで七輪に掛け、暫時煮沸し、煮崩れぬやうに注意して程良く柔かに茹復し、火から外づして煮液を捨て置き、別に琺瑯塗鍋へ上等粗目糖百五拾匁と、清水一合貳勺とを投れ、七輪烈火に掛け、時々杓子で攪まはしつゝ糖塊を融解し、暫時沸騰せしめて下ろし、其蜜中へ前の茹百合球を入れ、半日間漬しおいてから其蜜ばかりを琺瑯塗鍋へ取分け入れ再び七輪烈火に掛けて、七八分間煮沸し、稍濃く煮詰て其中へ百合球を加へ、靜かに杓子にて攪拌つゝ粗と煮騰して下ろし、以前と同じく百合球と蜜とを取分け、再び蜜ばかりを七輪烈火に當て、暫時煮返し、其煮蜜の泡粒が細かく整て吹上がる樣になりたれは、試に煮汁を少許杓子で掬ひ取り、水中に浸し忽ち柔かく粘々に冷め、凝結するを程よい煮詰加減として火から外づし、其中へ百合を加へ、靜に攪きまはし、混ぜ合せ、其儘一兩日間蜜漬になし置き、充分蜜を浸みこましめおき、用ふる際は、金網杓子で掬ひ揚げ、蜜を能く垂し去り、其儘にても、又は鳥渡遠火に翳し熱してから、周圍を銀色鉛紙で、體裁良く捲き包んで、御使ひなさるに最も宜しい。

百合餡

調合原料率　△、百合茹肉五拾匁　▽、上等粗目糖貳拾五匁

先づ百合球五六個を土を能く洗ひ落し、清水中に一日程浸して、悪汁をとり、土鍋へ一片づゝ散々に解ぐし投れ、清水をビシャ〳〵に注ぎ込んで、七輪烈火に掛け、充分柔かく茹覆して下ろし、煮液を流し去り、其熱い間に茹肉を毛張りの裏漉篩へ上げ、手早く杓子で擦漉出し、其漉肉五拾匁に對し、上等粗目糖貳拾五匁の割合の量目を計り置き先づ漉肉の全體を銅鍋か土鍋へ投れ、次に粗目糖は全額の半分ほどを、七輪烈火に掛け、杓子で間斷なく攪き廻しながら、暫時煉り合してから、殘りの砂糖を加へ、鍋の底へ焦着かぬ様に注意して、満遍なく攪き交せつゝ濃く煮詰め、其煉餡を少許掬ひ取りて、乾いた掌中に押附け見計り、粘着せず、容易に引離れる位を程良い煉加減として下ろし、乾いた容器へ移し入れ、熱氣を發散し、風通しの宜しい室内へ入れ置いて、お使なさい。

七男五女の養育談

農學博士夫人　松井喜伊子

折々小兒が澤山あると云ふのでお訪ねがあつて、その都度育兒上の注意などの御質問があるのであり、ますが、別に私は學校等へ參つたものでも無く、又小兒を育てる事に就ての物の本などを讀んだと云ふ譯でも無く、適々人様のお話を伺つた事もありますが、何分大勢の事で御座いますから、それからそれと育てゝ參りますので、十分皆様のお話を伺つて居ります暇も無かつたので御座いますが、甚だ後や先でありますけれども、是からは十分それらに就て伺はうと存じて居ります。

サヤウ二人缺げて、現在は十二人で、男が七人、女子が五人で御座いますが、女の總領は先年他へ嫁し附きましたから、十一人居るべきですが、男の總領は大坂に勤めて居り、二番目の男は志願兵に出て居りますから、今は大學、高等商業、中學、小學、

幼稚園に通ひます者とも九人であります、
　男子と女子とで孰れが育て悪いかと云ふ、之に就て世間では、女子よりは男子の方が、所謂蟲を起したり又は引きつけたりして育て悪いとお仰るやうですが、私の是までの經驗では、別に
　男子も女子も變りは無い
寧ろ
　女子よりも男子が易い
やうに存じます、而して是等を育てますには
　凡てコンデンスミルク
を、初めは二十倍に稀薄にして用ゐますが、日を經るに従つて濃厚にするので、之を約二年間程續けまして、それより生乳に換へたので御座います、唯五人目の小兒は、今は缺けて在りませんが、之は生乳の用ゐ方が少し早かつた爲かとも存じますが、實は痘瘡の熱の爲であるやうに考へます、併し何れも達者で仕合せで御座いますが、是まで此の多くの小兒を育てますに就ては、人樣のお話もあり、又自分も多少肩を休められやうかと存じて乳母に賴んで見ましたが、
　乳母はタッタ三年程
用ゐたのみで御座います、その外は皆一人の手で育てましたので御座いますが、
　何せ乳母を使はぬか
と云ふに、如何も乳母を使ひますと、人情は妙なもので、乳母は自分の侍く小兒を可愛がる、また其兒は乳母に懷くので、それは結構でありますけれども如何も
　兄弟の間柄が疎遠になる
傾きがあるのみならず、乳母も亦他の小兒と親しまない樣子が見えますので、餘儀なく之を斷つたので御座いますが、サテ乳母が居りませんでも、何うか斯うか一人の手で育つて來ましたもの丶、何分大勢の事で御座いますから、行き届かない場合もありますので、或時などには
　母ちやんが二人欲しい

抔と申した事もある位であります、

それから幼稚園や小學校へ通ふやうになりましては、別に之と申して干渉せずに、唯

時々學校へ參つて先生に伺ひましては注意を與へる位で、後は自然に放任いたして置きますが、

中學時代になりては

最早餘程智慧づいて參りますのみならず、遊びますにも餘所に參つて膝下には居りませんから、餘程注意に注意を加へなければならぬやうに存じます、

家庭と下婢

家庭の事に就きましても、前に申します如く、大勢の小兒を有ちました事とて、如何しても在宅勝で御座いますから、自然他の御家庭へ參つて之を伺ひまする機會が少ないので、彼が善い此が惡いなどゝ申す識別は付かないので御座います、只ホンノ自分の宅のみでの狹い考へをお話しして見ますれば、手前の宅では、家族同樣に

誰さんとさん附けにして呼ぶやうにするばかりで無く、凡て家族と同樣に取扱ふやうにして居りますが、如何も私の行屆きませんのか、但しは當時の女中達が學校へも通ふ物の本などを多く讀んで智慧が優つて居る爲か、割合に忠實のものが尠ないやうに感じますが、之は强ち女中の方ばかりを責める譯には參りますまいけれども何んとか

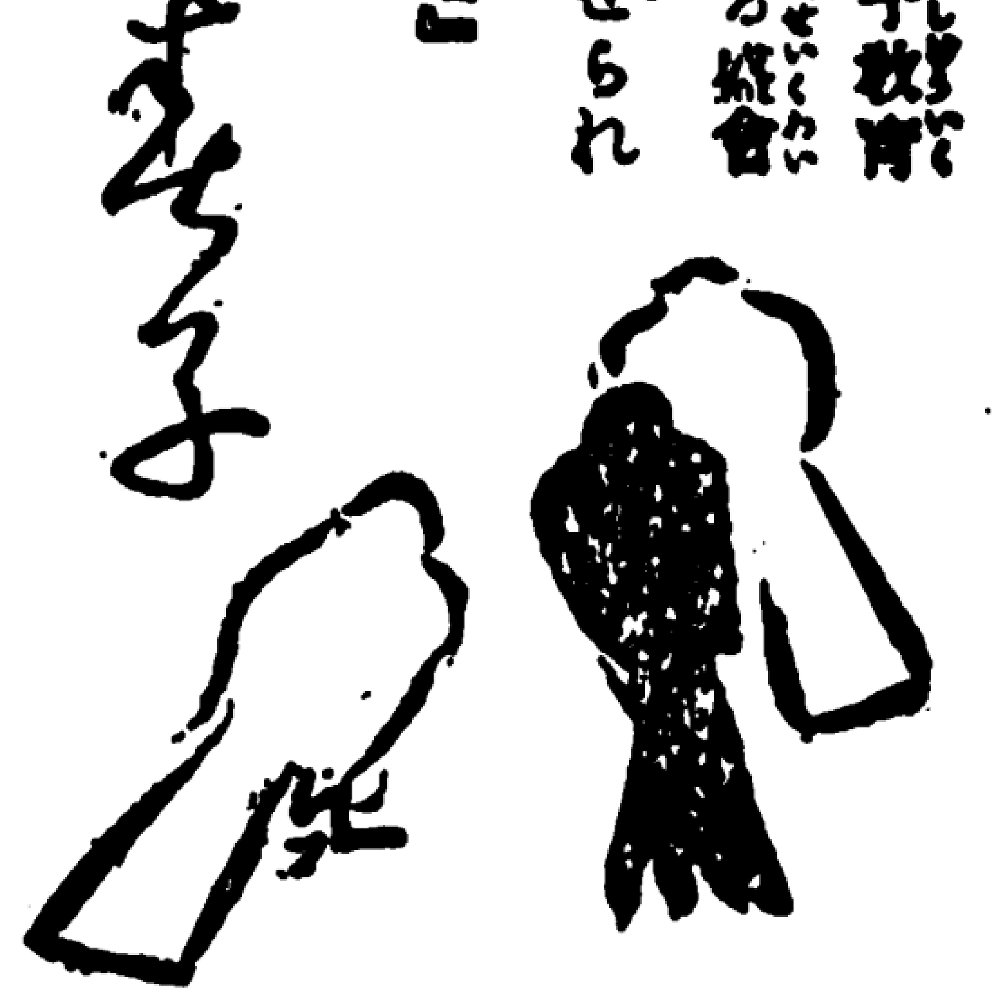
下婢の改良

は無いもので御座いませうか、之は下婢には限りませんが、殊に下婢と云ふものは、口の人で無くして實行の人で無ければならぬ筈であると考へて居りますのに、如何も現今の下婢の多くは實行の人で無くして口の人のやうに見受けますのみならず、自分の力の如何をも顧みないで、無暗に給料の高下ばかりを口の端にかけて居りますが、是は却つて自分に不利益ではあるまいかと思ふので御座います、



母の責任

鳩山春子



昨年十月十九日本誌編輯局の催にかゝる、第二回女子教育講演會は、東京諸新聞に依つて傳へられたる如く頗る盛會なりしが、前々號紙上より其筆記を掲載して、來聽せられざりし諸友諸嬢の一讀に供することゝせり　『記者』

餘り平凡のことでございますが、母親の責任の重いといふことをちよつと申上げやうと思ひます、私が此處で彼是申しませぬでも、平生聞いて居らッしやることですから分り切つたことに思召して、餘計なことのやうでございますけれども、併し大切なことでありますれば、幾ら分り切つたことでも幾度聞いても又それを思ひ出す度に一層強く頭に印象されるかも知れませぬから、良いことであれば、分り切つたことでも繰返しても、時に依つては宜からうと思ひますから、それで申しますが、母親の責任の重いことは、子供が此世の中に生れ出ました時には、私が考へますのに白い紙のやうなもので、それをどういふやうに染めやうかといふことは、子供に始終密接な關係を有つて居る所の母親の心の儘になるだらうと思ひますそれですから母親の責任といふものは實に重いものだらうと思ひます、西洋で人を雇入れます時には、あなた方も御聞きになつたでありませうが、日本では桂庵や何かゝら大概は雇入れますが、西洋では前の雇主の紹介を以て參ります、此者は私の所に幾ら〳〵居つたけれども不都合なことがなくて、斯ういふ事が出來るとか、或は身體は弱いけれども親切に働くとか、正直に働くとか、或は皆良ければ良い點ない皆齊くと

か、其者は信用すべきものか信用すべからざる者かといふことを、前の雇主が知るのでございます、けれども新しく人を雇入れます時は紹介のしやうがないからして、どうして其人が信用すべき人であるかすべからざる人であるかを知る方法がありませぬから、其母親を詮議するさうでございます、母親が善良であるならば大概雇入れても間違ひはないさうで御座います、二度目のは前の雇主の紹介を得て雇入れますけれども、始めての時は母親の性質行為を聞いて、母親が善良の人ならば安心して雇ふさうでございますから之を以ても母親の其子に及ぼす感化は如何に偉大なものであるといふことが分るのでございます、是は尤も西洋の話であります、西洋では其母親の感化が特に大變に大きいと思ひますのは、西洋では宗教々育が大變普及して居りますから、母親が大變善良な人であると隨分貧乏な人でも宗教の觀念を子供の脳裡に小さい中から侵込ませる機會が容易く得らるゝのでございます、隨分慈善家があつて色々な便宜を與へられ聖書などは只呉れることもあるし、それから食堂にも只やつて呉れるといふこともあるし、母親が善良であれば、勉めてさういふ機會を求めて、自分が貧乏でもどうか子供だけは良くしたいといふて氣を附けるから、子供の徳育に大變便宜がある、それ故に母親が子供の爲に心配して居る者であるといふと、子供の徳性を良くする機會が大變得易いのでございます、それで母親を見て直ぐに其子供を雇入れることが出來るといふ譯であります、若しさういふことになつて母親を見て子供の性質が知れる善惡が知れるといふ位に母親の感化が偉大であつたならば、母親さへ良ければ一般の國民が善良になる譯でありますから、先づ母親さへ良くなる、女さへ良くなれば、其女の生む所の子供は先づ過半數良いに極つて居るのですから、誠に是は御目出度いことでございます、

どうでございませう我邦の有樣は、母親が良かつたならば必ず其子は良うございませうか、善良の母親

を持つて居る子供は皆品行が良いでせうか、皆良い徳性を持つた人でございませうか、あなた方は能く世間を觀察なさいましたならばどういふ感じが御起りなさいませうか、私は大變悲しいことであるけれども善良の母親を持つて居る人が必ずしも所ではない、隨分徳性の感心しない人も世の中に澤山ありはしないかと思つて、是を私は甚だ嘆はしく思ひます、一體日本の婦人は家庭に於て誠に從順で、正直で、能く働いて良い人だと云つて西洋人が大變賞めます、其良い母親を持つて居る、即ち日本の婦人の貞操は世界萬國の人が賞めます、日本の婦人は實に節操が正しいと云つて皆賞めます其節操の正しい母親の子供達が皆節操が正しいでせうか、あなた方觀察して御覽なすつて、どういふ感じが起ります、私は良い御母さんを持つて居る良い家庭の子供さん達が屢々新聞紙上で其醜體を現はされることがあるといふ時に、どういふ譯で日本の婦人の感化力が少いだらうかといふことを非常に悲しく思ひますが、あなた方も定めて御母さんに御なんなすつたら非常にさういふ感じがありませう、



私も人の母でございますから始終さういふ感じが起ります、是はどういふ譯でございませう、實になさけないことではございませぬか、私が考へますのは是には幾らも原因があるだらうと思ひます、私がちよつと考へまして二つ程其原因と思ふことがあります。

其原因の一つは何であるかといふと一つは、日本の母親は其人は大變善良なるにも拘らず、家庭に於て餘り無氣力で無勢力でありはしないかと思ひます、其人自身は善良な節操の正しき人である、さうして娘の中には活潑であつたといふ人が、一旦妻になつて家庭に這入つて仕舞ふと氣力が無くなつて自分の子供を品性の良い者にしなければならぬと云に心付かぬのではありますまいか、誰にでもハイ〳〵云つて能く働いで居れば宜い、子供はマー大きくなれば自分より利巧だから自分は誰にでも從て居れば宜いといふので、何でも自分が責任を以てしなければならぬといふ、責任といふことは餘り心に自覺されない方が多くはないかと思ひます、それが無氣力だらうと思ひます、性質は善良で善く働いても氣力が足りなくはないか、それには種々原因もあります、今までの習慣が男尊女卑であつたし色々な事からして婦人の家庭に勢力のあるのは宜しくない、婦人が勢力をふるひ萬端にくちばしを入れて支配するを「牝鷄が晨を司どる」と申して、大層惡い事と致して居ります、さういふことがあつて女が默つて居るのは宜いといふので、子供の教育でも舅姑などの指導に御任せし、召使の者共の爲すに任す方もありませう、謙遜は良き德には相違ありませんが、此場合には責任を重んじないとになりは致しませんか、さういふ譯で自分は無月給の良い女中になつて居れは宜いといふので、女中と一緒に働いて居ればそれで大變良い奥さんだと自分も許し、人も許して居るやうな氣があるかも知れません、先づ奥さんが無勢力であれば其旦那樣がえらい人で家風が立派だといふやうに誤解をして居る人達も隨分あるだらうと思ひます、家庭で御母さんが無氣力で

あるがに、其人は善良であつても其子供を感化することが割合に少いだらうと思ひます、それで子供はどういふ者から感化を受けるかといふと、御母さんのやうに善良でない、周圍のモット不善な人の感化を餘計受けるのではありますまいか、それも能く分りませぬが、私の想像ですけれども、御母さんが善良であるから極く良い家庭であるべきものを、其家の子供が餘り人格が良くない者があるといふことを思ひますと、何かそれには原因があるのではないかと思ひます、即ち家庭に於て御母さんが無氣力無勢力の爲めに其善良の御母さんの感化を子供が十分に受けられないで、御母さん以外の周圍のよくない人の感化を受けて、不善な人になるのではないかと、斯う思ひます。

又もう一つは我邦の家庭では大概子供を學校にさへ出せば學校で皆人格までも作つて貰へる、總ての敎育を學校でして下さると安心して居る者が多いかと思ひます、學校にさへ出して置けば學校の先生が總ての責任を持つて下さる、何か惡いことをすれば學校で戒め直して下さると安心して居るのではないかと思ひます、それで家庭で子供の敎育に注意しないのではないかと思ひます、是も私の想像ですからハッキリ言ふことは出來ませぬ、あなた方も私と共に此問題を研究して戴きたいと思ひます、此原因は私は二つしか考へなかつたが、あなた方はモット澤山原因を御考へなさるか知れませぬから御相談するので御座ますが、私はさう思ひます、學校で何でもして下さると思つて家庭に於て餘り子供を抛擲し過ぎるのではないかと思ひます、學校は大勢の子供を一緒に敎へる所ですから知識の開發に重きを置く所で、大勢の生徒を銘々の性質に從つて細かい處まで觀察して、さうしてそれを燒直して行くといふことは無理なことなので御座います、學校でも良い事を言つて下すつて、子供の良い心を發達させる助力にはなるけれども、學校に皆御任せして、學校で人格を作つて貰ふ、學校で德育は十分だといふことは、言ふべくして行ふことの出

來ない無理な注文ではないかと思ひます、どうしても家庭に於て母親が一生懸命に子供の爲を思つて、深く子供の教育に注意し、知らず識らずの間に感化するより仕方がない、學校は一の助力、本部は家庭にある、本當の元は家庭にあるのであるから、御母さんが其子供の將來に付て責任を持つべきであらうと私は思ひます、是もあなた方と御相談で御座います、あなた方にもう少し良い御考があるならば新聞なり雜誌なりで御教へを戴きたいと思ひます、兎に角折角良い御母さんがありながら生んだ處の子供に不品行とか不節操とか、色々な惡い點が多くあるのは實になさけないことですから、どうか御母さんが折角良いならば其子供は御母さん以上に尙ほ良くなるやうにしたいといふので、之に付て皆樣も御研究なさることを偏に希望いたします、固よりどんな御母さんでも自分の子供を善良にして、自分の子供の將來の幸福を希はぬ御母さんはございませぬ、私も人の母でございますから其情は能く知つて居るのでございます、けれども其方法を誤りますと折角子供を善良にして、幸福にしたいといふ希望が幾らありましても、其目的を達することが出來ません、單に自分の子供を誤るのみならず、一人惡い人が出來ると大變方々に惡を振り撒くから惡感化が澤山あります、だから自分の子供を一人育て損ふといふことは、自分の子供を一人り誤るのでなくて、世間の人の澤山の子供を誤ることになるのであります、だから大變恐ろしい、自分の子供を一人り誤るのみならず社會に害毒を流すことになるから、寧ろ子供を生まないなら宜いけれども、若し生んだなら 育て損ふた曉は恐ろしいもので、大變害毒を此世の中に流すことであるから、人の母といふものは實に恐ろしい責任を持つて居るといふことを世の母親は皆考へ恐れて、實に之に付て深く心配すべきことではないかと思ひます。

母親が家庭に於て子供の教育に注意しなければならぬといふことは實に澤山あります、考へて見ると

—恐ろしいといふことに考へ附きますけれども、此處で以て一々それを申述べますことはなか〳〵晩まで掛つても言ひ盡すとは出來ないだらうと思ひますから、ちよつと考へ附いた點を二十五ばかり玆に書き記して來ました、それに付て先刻高島さんの御話を聽いて思ひ附きましたが、琉球の婦人は實に能く働くとの事で御座います、それは私も感心しましたけれども、自分獨り働いて居れば宜いといふものでない、若し子を生むならば、若し人の母となるならば、息子があるならば其息子が世の中を益する樣にしないといふと誤ります、又朝鮮から歸つた人から聞きましたが、朝鮮の女は能く働いて、水汲でも何でも男にはさせないで、女がする、男は長い煙管を咬へて一日寢て居るとの事であります、どんな貧乏人でも臺所のことは見もしない、日本の裏店見たやうな所でも女が働いて男は食べられさへすれば煙草を吸つて



は寢て居るさうです、それで日本人に較べて體格が非常に良いけれども、煙草を吸つては始終寢て居るから、日本の兵隊より生來の體格は朝鮮人の方が宜いけれども、戰つて見やうとか何とかいふ時は遙に劣るさうであります、それは練習の結果日本の兵隊の方が無論優るのであります、たゞ總ての體格檢査をして見ると生來の體格は向ふの方が宜い、それはなぜかといふと朝鮮は女の體格が良い、重い水を頭に載せて歩くやうなことまでして感心なものだといふことを聞きました、それならばなぜモット韓國婦人が自分の息子を自分以上に働く人間にしなかつたか、幾ら女が逆立になつて働いても男が其通り怠惰ものでは國は亡國になりはしますまいか、どうも男を貴ぶのは宜いけれども、自分の子を怠惰にして自分さへ働いて居れば自分の責任は盡したものと考へて居るのは間違いで、子供を生んだ以上は其子供に人間の義務を盡させるやうにするのが最も大切な事だと思ひます、朝鮮の婦人、琉球の婦人が自分の働くことは眞に良いことで實に感心しますけれども、其子供に付て責任を持たないといふことは私の深く遺憾とする所でございます。

それで私は母親が責任を取らなければならぬといふ箇條を二十五ばかり、ちよつと考へ附きましたから書いて來ましたが、此外に幾らもあります、何百あるか何千あるか、それはあなた方が御自身で御考へなすつて下さい、私はちよつと母親が其子供の性質に付て責任を以て考へなければならぬことはどんなものであらうかといふことを二十五程書いて來ましたけれども、是はどなたも御存じの事と存じます、それは

(1)其職務に忠實に、義務の遂行を重ずる人となるも然らざるも

人間の一番大切なことは自分の務を重んずるといふことであります、大切なことは澤山ありますから、之が一番といふ譯ではないけれども、先づ一番の中の一つであると思ひます、職務に忠實といふことどうも

人は兎角我儘になり易くて、自分が自由の身になると職務を怠る氣味がある、だから職務に忠實といふこと、人間は子供から大人に至るまで此世の中に出で命のある以上は皆務があると思ふ、皆務があるといふとおかしいやうでありますが、赤ン坊でも動かされていやな時は色々に泣いたり何かしますけれども、着物を着換へさせなければならぬ時は泣くにも拘らず着換へさせなければならぬ、それから乳の欲しい時には泣くけれども、飲むべき時に飲むといふのは何にも外の事は出來ない赤坊には務と云つてもよろしいとおもひます、乳を飲む時に人に飲まして貰つてもそれは務めと申されませう、或は大きくなつて遊ぶべき時に遊ぶのも務、勉强すべき時に勉强するのも務、さうしなければならぬといふことが即ち務だと思ひます、即ち色々ありますけれども、母親の心次第で其職務に忠實な人間にする事が出來、又職務などゝいふ考はなくて、寢たい時は寢るが宜い、起きたい時は起きるが宜い、食べたい時は食べるが宜いといふやうな、自分の慾に依つて支配されるやうになる、金があつたら務めなくとも宜い、貧乏になつたら仕方がないから稼がなければならぬといふやうな人間にするとか、それから又或はさうでない、人間が此世の中に生て居る間は幾らどういふ良い地位になつても、眞に人間が行ふべきことを忠實に行ふ人となるのであります、務と云つても必ずしも君に仕へるといふのが務ではない、しなければならぬ事を忠實に乾度チャン〱として行く人間になるのと、さうでないのと、是は母親の注意次第でどちらにもなると思ひます、それから次に

二　父親を愛敬する人物となるも、然うして之を畏怖する人となるも、

是も母親の氣の附けやうでどちらにでもなると思ひます、どうも日本の子供は御父さまを怖がる癖があると思ひます、昔から「地震雷火事親爺」と云つて、怖いものゝ中に數へてあると思ひます、怖いものだか

ら皆近寄りたくないやうに思ひはせぬかと思ひますが、父親といふものは子供に對しては世界唯一の恩人でございます、即ち子供が衣食住が足りて脊が延びて行くのは誰の御蔭でありますか、父親の御蔭でありませう、母親が働いて子供の生活を助けて行くこともありませうが、先づ大概の家では父親の御蔭で暮しが附いて行くのであつて、父親の勢力の御蔭で子供は生存して行くのである、だから世界唯一の恩人であるからそれを畏れ憚るやうなことではいけません、最も愛さなければならぬ、愛し敬ふといふ心を以て是れほど難有いものはないといふやうに思はせるのは母親の仕向け次第だと思ひます、私は怖いと思はせるのは宜くないと思ひます、之を愛敬するやうにするのも畏怖するやうにするのも母親の仕向け次第だと思ひます、此順序は必ずしも肝要な度に依つて分けたのではありませぬ、私の思ひ出した儘に書いたのですから色々になつて居りますが、其次には

三　忠君愛國の觀念に富む人となるも、然らざるも

日本などの國に於きましては是は大切なことだと思ひます、君に忠に國を愛するやうな觀念を子供に小さい中から持たせるのが宜からうと思ひます、それから

四　高尚なる人物となるも卑劣なる人物となるも

是は廣い言葉で御座います汚い人間になるのと奇麗な人間になるのとの違ひ、卑しい小さな人間になるのと度量の廣い立派な人間になるのとのこと、是も母親の考次第でどちらにでも分れるのでございます、次は

五　克己勉强家たるも、怠惰情慾の奴隷となるも

どうしても人は己に制せられ易いから、其己に克たなければならぬ、局外から見れば斯うなくてはならぬ

斯くすべきである、といふことは能く分りますが、自分が局に當るとどうしても迷ふもので、己に負けさうになる、餘程強い人でなければ己に克つことは出來ない、準備がしてないとツイ負けて仕舞ふけれどもそれに負けないで己に克つて勉強しなければならぬと云ふ樣な強い人間にならねばなりません即ち自分に克つて勉強家になるのと、さうでないで、いつでも善惡是非は能く知つて居ても自分の意志が弱くて、私といふものが出て來るといふと直きに負けて仕舞ふといふやうな弱い人になるも、矢張り小さい時からの教に依つて違ふと思ひます、



それから

六　人間は働く爲に生きて居ると云ふ觀念

を以て、有爲有益の人物となるも、然らずして有害無益の人となるもこれも母親の注意によつて分れます、時々考へて見ると、何の爲に生きて居るか不可思議に思ふ事も御座

いませうが人間は働く爲に生て居るから有爲有益な人にならなければならぬと思ふのと醉生夢死といふやうな何の考もなくボンヤリ暮して人の厄介、妨になる人間になり、害があつて益のない人間になつて暮して仕舞ふのとは、母親が子供の小さい中からの心懸でどうでもなると思ひます。又

七　正直に表裏なき人となるも、僞り多く人前ばかり飾る人たるも

あの人の言ふこと、することは公明正大だ、此處で言つたことが其通り何處に行つても間違つたことがないと云ふのと、又あの人は今うまいことを言ふけれども、蔭では違つたことを人に言ふといふやうなことでは信用がない、即ち正直に裏表のない人間になるのと、さうでない僞が多く、人前ばかりを作つてうまくして行く人間になるといふのも　小さい中からの躾に依ると思ひます。それから

八　頭腦の鋭き人となるも鈍き人となるも

斯ういふと、それはそんなことはない、人間の鈍い鋭いといふのは生れ附に依ると言ふ人がありませうがさうでない、生れ附や遺傳もありませうが、大部分は母親の力に依る、其方法や何かは色々別に又考究しなければ此處でちよつとは言へませぬけれども、併ながら子供を鋭くしやうと思つて却て鈍くするとか間々あります、勉强さへして居れば宜いといふので長い間同じことをさせるといふと活潑である子供を鈍くして不活潑にさせる、食物の如きも色々な注意に依つて鈍くしたり鋭くしたりすることも母親の注意に依つてどうにもなると思ひます。是から後は讀んで行きます

九　惡と戰ひ、身を正しくする勇氣ある人となるも惡に敗くる弱き人となるも

自分が惡事と思つたらそれと戰つて身を正しくして行く、是が勇氣のない人であると惡に負ける、それか

ら

一〇　品行を愼しむ人となるも、愼しまざる人となるも

一一　一擧一動に注意して、禮義ある人となるも、無禮無作法の人となるも

一二　規則正しく清潔に、身を處する人となるも、不規則締なき人となるも

一三　監督せざるも、充分信用し得る人となるも、監督せざれば不正を働く恐ある人となるも

一四　金錢を善用する人となるも、之を惡用する人となるも

金錢を良く使ふ人、上手に使ふ人、一體金といふものは貴いもの、之を善く使へば勢力のある善いものになるが、惜かな金を澤山持つと惡く使ふ、それ故に世の中の人が金といふものを卑しいやうに思つて來る、金持が善い事をするよりも害毒を流す方が多くある、金持が金を善用して呉れるならば金持を貴ぶやうになる、金が無ければ一日も暮せないが、十分に金を持てば多くは惡い事をするから卑しいと思ふやうになる、皆が善用するよりも惡用する方が多いから金といふものは手に觸るべからざるもの丶やうに思ふ人がある、是は惡用する結果である、それだから、子供の時から善用することを敎へて、惡用することを戒めるのが大切なこと丶思ひます

一五　同胞に親切に義俠心に富む人となるも、利己貪慾なる人となるも

一六　無法を排斥し、無辜を憐む人となるも、強きに媚び弱きを虐げる人となるも

一七　快活他人に喜ばるべき性質たるも、悲觀憂鬱的神經質の人となるも

一八　約束を守る人となるも守らざる人となるも

一九　常に向上進歩を樂しむ人となるも次第に惰落する人となるも

二〇　兄弟姉妹をして互に友愛し、一致協力して喜びも悲しみも別ち得る美しき間柄たらしむるも、互に己の利益のみを[illegible]る我儘者たるも

二一　まめによく氣の付く調法がらるゝ人物たるも、無性にして氣のきかぬ人たるも

二二　研究的精神に富み、學問好きの人となるも、然らずして學問嫌ひの人となるも

二三　高尚なる音樂美術及び健全なる遊戲に趣味を持つ人となるも、然らざるも

二四　常識を以て中庸を守り得る人となるも、極端に走る人となるも

二五　健康なる人となるも、虚弱なる人となるも

これ等は皆母親の躾次第でどちらにも分れ得る事と思ひます。

是で二十五あるのですが、斯ういふやうに數へたら幾らでもありませう、さういふやうに善くなるのも、惡くなるのも皆母親の注意如何に依つて分れるであらうと思ひます、私が斯う申したらばあなた方大きく

言過ぎると思はるゝかも知れませぬが、決してさういふものではありません、三兒の魂百までといふではありませぬか、一朝一夕にちよつと學んだよりも、小さい時から成長するまで長い間頭に浸み込まされたことゝいふものは容易に拔けることはない、一時其事を忘れることがあつても時を經ると若い時に長い間かゝつて腦に印象したことは忘れ切らず、再び出て來ます斯ういふ怖いものであるから子供の小さい時に密接の關係を持つて居る母親は注意して子供の頭に良く印象さして置くなら屹度大變に影響を及ぼすものでありますから、どうか良い影響を及ぼすやうにしたいと思ひます。



我邦の女子教育の目的はどなたも御存じの通り、良妻賢母を養成するのであります、此節世間の人が申しますのに、良妻となるには餘り學問はいらない、家庭に於て能く働いて、儉約に從順に能く裁縫、技藝、料理法などを心得て、家でも能く形付けて、家事を整頓して家族の人に親切ならば、深い學問などをして理屈を辨へるよりも良妻に適當である、よく働く點に於ては朝鮮の婦人とか琉球の婦などは良妻には誠に宜しいと、斯ういふことが大概世間の人に歌はれて居る、これは一應尤もで、私も之に反對することは出來ないけれども、賢母となるにはどうでございますか、それ丈けで十分でありますか、賢母となるには琉球の婦人、朝鮮の婦人の如く能く働いて、それで十分だと申しませうか賢母となるにはどうしても判斷力が必要と思ひます、判斷力があつてさうして此複雜な世の中に當つて——日本は今過渡の時代ですから、實に迷ひ易い、こつちの人が良いと云つてもあちらの人は惡いと言つて、教育でも總ての方針が迷ひ易くなつて居る時代、此複雜なる過渡の時代に當つて、能く子供の教育を誤らないやうに、適當に子供を取扱つて、其目的を達するといふことはどうでございませう、今の良妻として丈けの資格を以て足るでありませうか、私はもう少し夫れ以上のことが必要だらうと思ひます、賢母となるにはどうしても普通教育も必要だらうと思ひます、それから又學校卒業後も學校を卒業したから是で知識も十分だといふ考がなくして、常に向上進歩しなければならぬ、自分が修養して常に自分を進めて行かなければならぬといふことを始終心に思つて行かなければならぬと思ひます、先程高島さんから或人はえらがり或人は謙遜し過ぎるといふやうな御話もありましたが、私めさう思ひます、或人は高等女學校位卒業すると大層えらいと思つて、是で知識も十分だと思つて、それ以上修養することもしない、自分の向上進歩を心掛けぬ人もあります、或人は謙遜し過ぎて、學問がないから子供の教育などは十分出來ないからと云つて抛擲して居る人もありま

すがどうでございませう、私は二つ共に間違つて居はしないかと思ひます、高等女學校位を卒業した婦人は常に向上進歩する爲め修養に心掛けて居なければ忽ち世に後れて、學問知識は日々に退歩して行きます若し又自分は學問が十分ないと思つても自分が人の母たる以上は子供の爲めに能く物を研究しなければならぬ、勉强しなければならぬ子供の愛の爲めに自分はどうしても奮發勉强しなければならぬといふことを決心すべきものであります、自分は假令一朝一夕に理想のやうな人物になることが出來なくても、子供はどうしても本當の人間の道を知らなければならぬ、どうしても子供は眞の人間に育て上げなければならぬといふことに努力すべきでありませぬか、あなた方も能く御覽なすつたことがありませうが、彼の禽獸が如何に其子供の爲めに自分の身を犧牲にするが、自分の子供を外の敵から保護する爲めには母親たる禽獸が如何に其生命を犧牲にするか、を御覽なすつたことがありませう、私は田舍に行つた時に見ますが、まだ子供が獨り立ちの出來ない時に鳥の子とか獸の子に付て母親の注意することは實に非常なもので、子供などがそれにからかいでもしやうものなら自分の身を抛つて保護致します、それを見ても人間の親が自分の子供を世の害毒に接せぬやうにどの位熱心でなければなりますまいか、萬物の靈たる人間の母親が鳥獸に劣るやうなことではなりますまい、萬物の靈長たる人間が其子供を世の害毒より保護することに如何に熱心になつても熱心過ぎることがありますまい、如何に身を犧牲にしても其子供を、世の中の害毒に染まないやうに、熱心に盡力すべきではありませぬか、斯くして其子供に良い習慣を附ける、此習慣が大切なもので、良い書物を讀んだり、良い人の言葉を聞いたり、非常に感心してさうしたいと思ひましても、習慣といふものは恐ろしいもので、一朝一夕に改まるものでありません、それだからどうか子供には幼き時より良い習慣を附けて、どうか自分以上の眞の人間にしたい、眞の人間の義務を果させるやうにしたいと

いふことを一生懸命に努力すべきではありませんか、天が母親に與ふる特別の愛凡ての愛情に比類なき無我の愛を以て偏に其子供の將來を慮つたならば、私は思ひます、其子供は必ず一層親より優れた人物にならなければならぬと、あなた方はどう御思ひなさいます、私はさうなければならぬと思ひます、どうか自分の子は自分よりも一層優つた人物になるやうに母親が注意すべきではありませぬか、斯ういふやうにすれば世の中は次第に向上進歩すべきものと思ひます、又斯ういふやうにして世の中は漸々向上進歩せんことを私は偏に希つて止まないのでございます、甚だつまらぬことを申しまして失禮しました（拍手）





佐々木信綱先生選

新年

天

美濃　芳翠敏子

船人はむろのとまりに船を出で、
若水くめり新年の朝

評　着眼の奇警なるをもて天に選びいでつ

地

下野　井上倘子

朝あけやきしの松原とりなきて
川波ゆるく初日のとけき

評　川をおりのぼる舟にもしめかざりうつくしかるべし

人

岐阜　杉山省三子

若水を汲む人もなき山の井は
落葉しづみて去年のまゝなる

評　物しづかなる山里の新年まことさる事なるべし

秀逸

越後　岩本芳子

皇みくにすめらみかどに事なくて
新しき年はけふたちにけり

岩代　岸野せい子

伊勢の海初日まばゆく照りはえて
神代ながらの浪の音たかき

東京　中村はる江子

初かせはみ注連をすぎて消え残る
大つもごりの市の灯をふく

美濃　杉山繁子

新玉の年祝ぐ今朝を門に入る
猿曳若き初姿かな

都なる伯母にもらひし護謨手まり つきてゝろみつとしのはじめに

美濃 西村きん子

甲

○ 奈良 栗山俊子

あら玉の年立にはの梅が枝にことほきすらんうぐひすのこゑ

○ 和泉 稲原すみれ子

何よりも年のはつ日のうれしきにのきはの梅もほゝゑみにけり

○ 常陸 岡田蔦子

崖の上に群れて遊べる山猿に今朝長閑にもさす初日影

○ 名古屋 荒木とみ子

百八の鐘の音いつか絶えはてゝほがら〳〵と初日のぼりぬ

○ 土佐 秋月廣江子

ふりまさる年はとはざれ一とせの我にはわかきけふにあらずや

○ 東京 吉岡亀子

新らしきあらたへ衣かされきてことほぎかはすとしたちにけり

○ 東京 西村直子

松竹をたてゝみやこのやちまたに みよのとしたつさかえをぞ見る

○ 佐賀 藤松りか子

琴の音もしづけきかどの松がえにそよくもゆかしけさのはつ風

○ 岐阜 日島細子

年きけば羽子をたもとに頬をそめて十二と笑める少女ぶりかな

○ 秋田 齋藤たけよ子

うら〳〵と昇る初日ののどけさやいつこのはても同じかるらん

○ 岐阜 山田はき子

初鳥羽たくなる大宮は雪に明けゝり白金ひかる

○ 韓國 原野みき子

蓬莱や初日に映ゆる峯の松につるの千羽はことぶきて舞ふ

○ 茨城 金澤すゑ子

賤が家のやれたる軒も注連ひきて神代にかへる心地こそすれ

○ 岩代 岸野常子

伊勢の海初日うら〳〵とたちて神代ながらの浪の音たかき

○ 東京 松原岑子

家毎に屠蘇くみかはしあらたまの年のはじめをいはふのどけさ

○ 千葉 金子操子

病む床に年むかふ我のなぐさめとやさしき妹が梅手折り来ぬ

○ 千葉 金子知子

初荷ひく若衆すぎてたかどのにまたかるたとる人のこゑする

○ 美濃 目島まる子

美しき朱ぬりの鳥居年たちて松にうつろふ初日かげかな

○ 美濃 吉田のぶ子

あし田鶴の聲も聞えて小松原かはらぬ色の年たちにけり

○ 美濃 吉田よし子

初日影松の梢に見えそめて榮え行くべき年は来にけり

○ 東京 中村千代子

あら玉の年立つ今朝ののどけさにたつが音たかくひゞきけるかな

○ 相模 渡邊比佐子

朝川や波枕の寶藏を乗せたる船に春霞する

○ 甲府 名取正代子

年たては老もわかきもほど〳〵にたのしくあそぶ松のうちかな

○ 東京 青木たま子

年ふれどかはらぬものはあら玉の春をむかふる心なりけり

○ 清國 富成梓子

とつ國の人にほこらむ初日かげまつ日の本のうみににほふと

○　神奈川　飯田白露子
あら玉の年のはじめはうち日さす都もひなもかはらざりけり

乙

○　神奈川　中島光子
ちよとほき八ちよと祝ふ大君のみかけを仰ぐみ世のはるかな

○　名古屋　山根しげ子
大君のみいつあふぎてから山もみはたかゝけて年むかふらん

○　越後　伊倉彌壽子
きのふわが賣りつくしたる門松のみどりきそへり今朝の初日に

○　京都　船津澄惠子
あら玉の年のはじめのことぶきに賤がふせ屋もしめかざりして

○　東京　田代糸子
とその酒のみてゑひたる顔のうへにとしの初日のかけもてりそふ

○　東京　原三幸子
あたらしき年のよごとを關宿にゑみそへにけるさき草のはな

○　東京　河合清子
しゞにみし髮もひたひにはり出してをとめ花よめあそふにひとし

○　美濃　飾島曉子
この歌は師にまゐらせてこの歌は友に送らむ新年の朝

○　淡路　古東壽美子
年たちぬいざ歌はなむ濱千鳥千代よぶこゑにしらべあはして

○　美濃　長濱關子
初春てふ札おしたてる荷車の上うつくしき今朝のゆきかな

○　美濃　飾島みゆき子
としほぎ人のたもとに入りしかなしめにふれたる妹がそれ羽根

○　秋田　細矢はる子
竈ばのみ焚てけふりをたつるみも嬉しかりけりあらたまのとし

○　秋田　黒田せつ子
古さとの母のおくりしはれきをもかされてうれしあらたまの年

○　名古屋　中村濱子
萬歳や猿曳き過て門松にはさはらぬほどに吹くや初風

○　淡路　古東靜子
しめはえて朝日のみはたをしかざし都大路はときめきにけり

○　伊賀　山村りやう子
みとりする母の枕に夜はあけて初日むかふる古庇かな

○　旭川　佐藤央子
むつましくへだても見えぬ妹とせの中にもかはす年のほぎこと

○　岩代　菅野みわ子
富みたるも貧しきものも年たちてかるたよ羽根と遊ぶたのしさ

○　青森　川合りく子
あら玉のみ年を祝ふまつがえにゆたかにかゝる今朝の白雪

○　秋田　齊藤とめの子
遠近のうからやからとまとゐしてさゝくみかはす新たまの年

○　埼玉　横田秋子
永代の橋をわたりてはつ日の出霜ふか川に年は來にけり

○　埼玉　横田須磨子
世につれて物みなすゝむ年は來ぬまことの春はそこにみゆれど

○　越後　杉山節子
ことほきの聲はちまたに里にしてうらやす國は年新しき

○　越後　松永繁子
遣羽子の音も響きて大路ゆくみ車の人ほゝゑみかはす

○　廣島　鈴森きみ子
はつ光りかゞやきあひる松が根に千代をいはひてたづぞなくなる

○　岐阜　後藤奐子
晴小袖着かさる妹の愛らしき笑顔ながむる年の新玉

○　名古屋　不破きみ子

ばした女が萌立鏡をうつしつゝ年の若水くむもたのしげ
○ 岩代 菅野和子
鬼となり蛇ともなりにし人心あけてたのしき初日かげかな
○ 東京 秋田とし子
除夜の鐘終を告けて新しの年の賦聞きぬ賤が園頭に
○ 東京 高橋まさ子
年ほぎのさけによひてや千鳥足ひくべき稚子に手を引かれつゝ
○ 大坂 小西まつ子
うけら焚く煙の末のほの〴〵としらみて明くる新としの空
○ 埼玉 横田政子
水上の貢船おろしも年立て春めきわたるかもの大橋
○ 東京 平塚白百合子
ふもと路は吹雪にくれて草の家のたみこゑもるゝ初春の宵
○ 東京 橋本袖子
家遠き山里なれど朝まだき年新たなる神に灯しぬ
○ 土佐 秋月嵐江子
國民の歌のしらべもおのづから改まりてぞ年たちにける
○ 岩代 岸野薫子
神路山杉十丈の初空をたづかれ高く日の立のぼる
○ 伊賀 佐々木いすゞ子
はや三月たよりは聞かぬ占守島今日は均しく春いはふらむ
○ 千葉 金子鶴子
女あまたこゝに集ひて追羽子の遊びにふけるやますその村
○ 東京 松村とし子
おい人も幼きものも安らかに新年むかふ幸やうれしき
○ 岐阜 文好さかえ子
松たてる門を出でゆく振袖のはらからはしき我宿かさむ
○ 美濃 遠藤やゑ子
しめかざりあらたなれども三人していだかむまでの松かざり哉

○ 美濃 長縄みの子
新玉の年たつ峯の松が枝に旭日のとかにてりそめにけり
○ 美濃 松田せき子
わら玉のとしたちかへる初日影小松の枝にてりまさりつゝ
○ 埼玉 横田やな子
都人くみやしぬらむ玉河の下樋つきせぬ年のわか水
○ 東京 土田八重子
したしみの母子が仲も言葉さへけさ改まる年のほぎごと
○ 美濃 杉山末野子
旅かせぐ父はかへりて新玉の年祝ふかどの松風の聲
○ 美濃 杉山すゑ子
神垣の老樹の梢新しくしめゆひかへて年立にけり
○ 美濃 杉山芳子
新らしき年の男の子の産着かもふりてつもれる今朝の白雪
○ 美濃 杉山藤枝子
新玉の年を迎へて豊にも賤がのきばに立つけむり哉
○ 神戸 梶原京子
注連かざる船に初日はうら〳〵と磯松原を鶴の舞ふ見ゆ
○ 長野 北澤千枝子
幸多き春もうれしゝ見わたせば年の初日の影にのとけき
○ 伊賀 菊山かれ子
元朝やうしほの果に日の帝は珊瑚の門をいでましにけれ
○ 千葉 海上峯子
つくばねの音もひゞきて聞ゆなり治まれる御代の新年の幸
○ 越後 水野やすゑ子
汲みまつる釣瓶のなはの末もあれど恩ひあふるゝ今朝の若水
○ 横須賀 柏原みな子
東に明け放れゆく朝空に仰ぐもうれし富士の神山
○ 相模 高橋つれ子

新玉の年たちかへる大空の雲井はるかに鶴の一聲

○　神奈川　服部八重子

ほの〳〵とあけ行く門の松の風遊びておりぬ小雀の影

○　美濃　西村うめ子

年たちて楽みおほき中にしもかるたあそびそこよなかりける

○　相模　一ノ瀬よし子

思出を海士は小磯に白帆ほす松に奏づる年返る朝

○　愛知　後藤のぶ子

新玉の年を我が家のみどり子はふたつとなりて迎へつるかな

○　須磨　石原綾子

榮なりてかへりし君と新き年ほく今朝のまとゐたのしき

○　美濃　西尾靜子

年祝の歌をし寄す文とのゝ窓あたらしく見ゆる今朝かな

○　伯耆　錦織よし子

たのしみてよそひこらしゝ姿見にはつ日まはゆき振袖のいろ

○　伯耆　錦織幸子

かさね來し年は二十とせ此春は我子抱きてあふぐ初そら

○　伯耆　錦織千代子

あたらしき年をむかへて更にまたおもひあらたにゑがき見るかな

○　大坂　岩橋花子

今日ばかり祝はぬくまぞなかりけり治まる御代のとしのはじめを

○　神戸　今西操子

春立ちしゝるしなるらん追羽子の音も賑みて里の長閑さ

○　東京　安田粲子

さしのほる年のはつ日も人こゝろきよらなるこそめでたかりけれ

○　千葉　中川千鶴子

なにとなうみなもろともに嬉しきは年の初めの心なりけり

○　廣島　平城淳子

春立ては我をまな子のほゝゑみの數もまされる心地こそすれ

あら玉のとのし初日ののどけさにかきねの梅もほゝゑみにけり

○　奈良　栗山高子

かすみ立波路をうつす鏡山まだ幼けなき春の面かげ

○　神戸　足立ゑい子

とり初る筆のはやしに此春のことばの花を咲せてしかな

○　神戸　足立あさ子

梅

天

梅咲きぬ木立の上を行く雲の
にほふがごとき朝月夜かな　東京　山下里子

評　初句にていひきりたる格。いひざまも巧に着想も幽艶の境に入れり。

地

梅の花影さす窓の日わたりに
姉も妹も書を讀むかな　神奈川　服部八重子

評　よむ書はいかなる書にかあらむゆかしき家庭

人

襁褓ほす新藁屋根に鷄なきて
梅うつくしき橋ぎはの家　岩代　岸野常子

評　むつましき若きいもせ此橋ぎはの家あるじなるべし

秀逸

梅かをる南の窓の日當りに
都の友の詩集ひもとく
東京 佐々木壽子

緋梅ちる緑の水よ白き石よ
粋の多摩川春風のして
美濃 川上寛子

よき袖にひな鳩いだき伏目して
君まちましぬ白梅の軒
大阪 小西まつ子

あるじ逝きて十年あれにし裏庭の
老木の梅のはな一ッさく
神奈川 鈴木まつ子

日こと〳〵鶯なきて山里の
梅のさかりの長閑なるかな
神戸 足立ゑい子

只ひとり文よみ止めて窓おせば
梅か香消く月は更けゝり
伊賀 佐々木いすゝ子

開拓のいさをしなりて新村の
紀念の梅はいま盛なり
東京 鵜澤喜舞子

梅白う山紫に夜はあけて
乳母住む里か煙たゝよふ
伊賀 山村りやう子

朝戸出や星のこと〳〵地におりて
集ふとぞ見る白梅の花
長野 北澤千枝子

くずほるゝ思ひもしばしわすられて
ながむる窓の紅梅のはな
伯耆 錦織幸子

詩の神の春のよそひの梅のはな
榮えゆく御代にゑみほころびぬ
伯耆 錦織千代子

うぐひすの古巣の初日うらゝかに
　春をわか世とうめの花さく
名古屋　荒木とみ子

新墾の十戸の村に年たちて
　村長の家に梅の花さく
横須賀　柏原美奈子

鴨川の流れのほとり刀磨ぐ
　翁がかどの白梅の花

甲

○　奈良　栗山たか子
夕月のかげもおぼろにほふなり梅のはやしは香にくもりつゝ

○　淡路　古東靜子
窓おせば初日の光りまばゆきにうめさへにほふ文机のもと

○　千葉　金子操子
わが家の軒の小梅をほの白う月はてらしぬ君送る朝

○　千葉　金子瞳子
鯉ある池の浮島梅さきてをしひとつかひ夢まとかなり

○　福島　深谷けい子
うらゝかに雪も晴れてし賤が家の軒端に匂ふ白梅のはな

○　秋田　細矢はる子
わがやどの庭の梅がえさきしより月はおぼろになりにけるかな

○　越後　岩本芳子
日かげさすかたえばかりに春みえて梅か香床し軒の朝かせ

○　東京　高野文子
ふみまなぶ窓にかをりてうれしきは梅さかりなる庭の春風

○　東京　五十嵐清子
中垣の梅さく見ればまちわぶるはるもとなりになりやしぬらむ

○　東京　原三幸子
雪消えて梅のはなさくこしばがきこゝより年はこえてきぬらむ

○　東京　河合清子
ひあたりの窓に咲けりあら玉のとしもたちえのうめのはつ花

○　岐阜　芳翠敏子
梅の花二ひら三ひら咲きそめて訪ふ人多し春の山里

○　美濃　鵜島曉子
日あたりの岸につどひて紙さらすいさゝ小川に梅の花ちる

○　三重　中村花子
なき兄のみ墓つめたく月冴て捧げし梅に淡雪のふる

○　美濃　加藤里子
亡き君が瞳の如き星ゆれて白梅苑のしのゝめ時を

○　美濃　吉野花子
梅が香に人なつかしき此頃と筆まづ染めぬ京へやる文

○　神奈川　中島光子
さきかけのいさをはたかし九重の大うちやまに香ふ梅かゝ

○　名古屋　不破きみ子
おとめ子の晴着の袖ににほふ哉まつ咲きそむる梅の折えだ

○　韓國　原野みき子
如月や鶯啼ぬ月によれば梅が香高う日は董にして

○　岩代　菅野和子
一年を其折々の品はあれどみさをも高き白梅の花

○　埼玉　横田秋子
里長がせとのへたての綾檜垣にほひかはして梅咲きにけり

○　東京　秋田とし子

讀者文藝

縫日傘をたゝみて寺に少女子二人稚子髷にかざす白梅の花
○　　東京　高橋　夢子
なさな子のとりてとさけぶ聲きゝてみればわかきの梅咲きにけり
○　　岩代　岸野　菊子
ふみにそへて都の友におくらばやいで湯の里の梅のはつはな
○　　美濃　落合かき子
春知らぬ翁が宿のしをり戸になり〳〵にほふ梅の下風
○　　美濃　林　こう子
雪とけぬ園にも春やきにけらしかをりゆかしき梅さきにけり
○　　美濃　西村うめ子
初雪もまたみぬ庭にさきにけりみなみひなたの梅のはつ花
○　　東京　鶴澤　菫子
白梅や歌をよくする姫君の孔雀養ふ椽先に咲く
○　　美濃　杉山末野子
しら梅の匂ひもつれて日の御旗輝きにほふ藪明かな
○　　美濃　杉山　繁子
聞れとも鶯來鳴く山里の白梅にほふ春風の家
○　　美濃　杉山藤枝子
梅が香のもつれて匂ふ大殿に七人ならふ舞衣かな
○　　神戸　梶原　京子
中垣のへだてはあれど隔てなく匂ふとなりの梅の花かな
○　　越後　水野やすゑ子
月かげのおぼろにかすむ夕暮を人まつ門に香ふ梅かな
○　　東京　安田　崇子
いに匂ふ風をとめきてうれしくもうめの初はなみいてつるかな
○　　千葉　中川千鶴子
梅の花たかきかほりを慕ひつゝはからずしりぬ君がみ許を

乙

濁り流に添ひて村百戸叢屋〳〵の梅咲にけり
○　　常陸　岡田　萬子
みよしのゝ花もまされるながめなり梅さくころの月のせのやま
○　　奈良　栗山　儉子
外國のいろせの君にみせはやな軒端のうめは咲きそめにけり
○　　和泉　藤原すみれ子
春風はふけど吹かれど山里の垣根はうめの匂ひなりけり
○　　下總　高木美代子
數ならぬ我庭さきの梅が枝に初音聞かまし鶯の聲
○　　福島　會田たみ子
露だにけはひの水とわれやせむにほひめでたき梅のはつはな
○　　甲府　名取正代子
散らぬまなさかりの頃なと乳母が文に誘はれ來つるしら梅の村
○　　東京　堤　いく子
いづこより手折きにけん妹がかざしに匂ふ白梅の花
○　　旭川　佐藤　央子
まなびやの神のなしへなわすらはて年毎にほふうめのはつはな
○　　秋田　長田せつ子
神の吹く笛の音たえに塵土の森匂ふなり白梅月夜
○　　名古屋　中村　濱子
誰が爲めに咲にほふらむ梅の花かをりみちたりわが庭の面に
○　　東京　田代　糸子
案山子より外にひと見ぬはた中のよへともしろくにほふ梅かな
○　　東京　吉岡　龜子
とへかしな賤がわらやの軒ばなるしら梅のはなけふのさかりを
○　　東京　松本まつ子
　　　東京　金子　逸子

鶯はいつまで谷にこもるらむそともがけとも梅のさかりに
○　東京　小島粂子

あたらしき年やうれしき梅の花しろきもこきもさきそめにけり
○　東京　西村直子

つちかひて田舍のおちのうつしたる梅は咲けりとしのはじめに
○　佐賀　藤松りい子

となりなるかき根をこえて我やどの軒にさきそむ梅の一えだ
○　岐阜　長濱絹子

いさゝ川梅の花ちる小板橋妹のりぼんに春の風吹く
○　美濃　傍島みゆき子

來まさんと梅の初花さし置きて小瓶むなしく二夜すぎにけり
○　美濃　目島綱子

こぼれふる花一つだにすてがたし君がたまひし梅の一枝
○　美濃　桃井萩子

梅の花薄く匂へる背戸垣に鶯なきて朝戸出迎ふ
○　美濃　小坂いく子

朝あけのよき野よき森よき梅の黄鳥の夢に揺う鶯もて
○　岐阜　山田はき子

高殿の箏のさらへの姫千人梅見し給ふ春の夜の月
○　廣島　鈴森きみ子

うれしともこゝろまちせし我庭の白梅今朝はほゝ笑みそめぬ
○　岐阜　後藤英子

梅咲くやまちし温習の箏の會開くと友の回章きぬ
○　秋田　齋藤たけよ子

ほゝゑみし梅にうかされ鶯もうたひそめけり我もまはなん
○　秋田　齋藤とめの子

冬は一そさひしかりけれ春くれど人の山なすうめの花その
○　埼玉　橫田すま子

花みんと龜井戸なのこ道とへばゆひるすかたや梅園の庭
○　越後　松水粲子

鶯のゆかしき初音つゝまむとおもふ小袖に通ふ梅の香
○　下野　井上尙子

猫ねぶる日向小縁にまゝごとの主ゐまさず梅さき匂ふ
○　埼玉　橫田秋子

小向井の梅は盛りになりぬれどけふは蒲田の花を見て來ん
○　東京　橋本袖子

海見ゆる丘なる梅の奥の小さき家に女住みなん
○　土佐　秋月廣江子

附の風暖かくよき村と友にほこりの梅の初花
○　美濃　高橋てう子

梅ちりて後の一日のつれ〲や妹好ます〲春雨きゝぬ
○　東京　松村と子

外國にゐますわがせに送らんと文にまきこむ梅のはつはな
○　神戸　足立あさ子

窗の外ひとつの曇りもなき物をほこり香のある早咲の梅
○　東京　松原峯子

鶯はとまれかくまれ咲き初めし梅の香りのはるらしきかな
○　美濃　遠藤やゑ子

梅たなる尼君わかしいさ訪ひてきかばと思ふ戀ものがたり
○　美濃　目島眞砂子

一群れの少女の袂布のふきふきて群風消し梅の花ちる
○　美濃　遠山よし子

手折きし梅ちらさじと少女子は風をさけんと路にまとへる
○　美濃　金森じょう子

おとつるゝ友も日ごとに増しにけり梅さきかをるしづの伏屋に
○　美濃　長繩みの子

我が宿の梅の初花咲きにけり雪と見る日は友を招かむ
○　埼玉　橫田やな子

梅園は花も人目もさかりにて世に香くはしき木下川の里
○　東京　土田八重子
梅一本ほかには友のなき庵も人さきがけてたれしぞ知る
○　東京　中村千代子
千里へし親しき友の玉章に添へてぞおくる庭のしら梅
○　美濃　西村きん子
くれなゐのうめ咲にほふ朝窓にゆふ日のうつるこゝちこそすれ
○　愛知　後藤のぶ子
いたづらに子らのたをらぬ其ひまにながめにさゝん梅の初花
○　須磨　石原綾子
新年の晴着模様に母君がみたてたまへる庭の梅かな
○　美濃　西尾靜子
花咲けと御師の君にまひらせむ美き枝もなき鉢の梅かな
○　美濃　杉山芳子
初春の風なつかしき君が家の梅が香のせて音訪にけり
○　伊賀　菊山かれ子
梅を見にこよとのらしてわが叔母はうめの歌のみしひ玉ふかな
○　伯耆　錦織賜子
おもしろき梅の姿や初日さすまどのかけさへうちかほりつゝ
○　伯耆　錦織よし子
咲くやこの花のはしめの香は高く雪もおらしもふみてむつふる
○　大阪　岩橋花子
降りつもる雪まながらに立つ春ののどけさ見ゆるうめの初花
○　神戸　すい子
山里はいまだ雪氣の空なれど薫つめたく梅やさくらん
○　神戸　今西操子
今朝咲きし梅の一ひら卷きこみぬ年の祝ふみ如何に薫らん
○　東京　青木たま子
たをらねど袖にいたくそ匂ふなる梅が香をこす家つとにせむ

○　清國　富成禪子
なにはつにさくやむかしも今もかもあかぬは梅のにほひなりけり
○　廣島　平城淳子
霜の夜も雪の朝も永久にあらはと匂ふ白梅の花
○　磐城　木幡きよ子
咲き續く花に漂ふ月影に匂ひみなぎる難波津の梅
○　神奈川　飯田白露子
わが宿ははや白梅のほころびぬ朝日にとけし雪とまがひて
○　淡路　古東すみ子
鶯も梅が枝高く宿しめて御代の春をばうたふなるらん
○　越後　杉山節子
人ならば共に語らむ朧夜の月に色ある紅梅の花
○　飛騨　南みれ子
學び終てかへり來つれば故郷のあれたる籬梅の花さく
○　茨城　金澤すゑ子
ゆきませしあるし忍ふやなれも亦風なきに散りぬ梅の花びら
○　名古屋　山根しげ子
かり人のみちしるべにもなりぬらん山路にかをる梅の一もと
○　千葉　金子智子
有明や置く霜しろき葡萄棚のしたに梅さく師の家を訪ふ
○　横須賀　高橋つれ子
鶯の聲をしるべにたづぬれば奥山里に匂ふ梅が香
○　横須賀　渡邊比佐子
家毎に校の遠音のもれ出でゝ梅の花咲く草葺の里
○　相模　一の瀬よし子
鳴き合ひし三つの鶯一つにはふりかゝりたる紅梅の花

短文

文學士鹽井雨江先生選

天

師走　　名古屋　橘たか子

師走が來た。

縹色の幌を張つたやうな空は、今日も雲母の如き白雲が、むら〳〵と漂つて、淡い日射に樺色の枯草が風にそよぐ野は、一面に黝づんだ土、美しい若芽を伸して、彌生の空に咲く小草の花の紫雲英や蒲公英も、暫は此の黝んだ土に隱れて、暖い日を待つのであらう。霜解けの地面からは、夢のやうな白い水蒸氣が、ゆる〳〵と昇つて居る。

軒の南天に百舌鳥が鳴く。と、靜かな野を馬の鈴がなつて、信州から來る荷駄馬の一群は、美音の追分節に、ひつそりとした師走の空を響かせながら通つて行く。この唄聲をきくと、晴着や餅つきに村人の心は忙しうなるので……今日も畠をへだてた作爺の家は、簞笥や雨掛や、箱のやうな家具を、軒に運んで、煤掃の支度にかゝつて居る。遙に見える社の森は、黄金の小扇幾千枚、はらはらと風に篩ひ落した銀杏の裸木に、社の屋根が畫いたやうにあらはらて、社頭に焚く落葉の煙は、低く森の腰を這つて居た。

また百舌鳥が鳴く。

あゝ師走である。鳥の聲や風の音が悲しう耳について、夜着にのみ引籠る身にも、逝く年の寂しさは、しみ〳〵と胸にしみるのであつた。

「また炭燒竈の煙が東へなびくから、明日は雪でせうよ」と、お茶の間にお母樣の聲。

私は、そつと衾に戻つて、咳き初める胸を抑へた。

（雨評）優美に詩趣のこもれる作、愛すべし。

地

牧場守　　埼玉　高橋いく子

仰いではコバルトの空を見、伏してはみづ〳〵し

い青草を眺め、許多の牝牛の起臥してゐるのを友としてゐる私は、立身の望みとか、榮華の望みとかいふとは、毛頭ございませぬ。只願ふ所は、父の病氣が一日も早く全快すればよいといふ、夫れだけであります。然るに、他人の事には極めて冷淡な樣で、實は甚だ神經質な世間の人樣は、私の身に就いて、色々心配して下さいます。

學校の先生は、「お艶さんはたちがいゝから、金を掛けて勉强させれば、どんなにも立派なものになれる。あゝして置くのは惜しい。父をば親戚へでもたのんで、女學校へ出す譯にはいくまいか。學資の出しては、いくらもあらうに……」と。

容色の好い娘をもつた爲め、今では樂隱居になつてゐるおせい婆は、「牧場の吉兵衞爺位無慾の者はあるまい、あれ程の容色にできたお艶に、かう穢い畜生の世話アさせて、己れは貧乏で、毎日ピイ〳〵してゐる。つぶし島田に結つても、友禪の着物でも着せれや、箱とまとまつた金にもなんべいものを」と。

父もそれと聞いてか、私が昨日の朝、藥を煎じて持ていつた時、やつと體を起して、「喃、お艶、巳は濟ねい、お前に對してとんだ罪を作つたよ。出世のさまたげをする、此の上リウマチなんて、こんな病に掛つて、餘計な世話を……己さへ居なけれや、お前も好きな學問もでき、いきたい處へいつて、すきなことをすることが出來たものを。それを思ふと、いつそ首でも縊つて死んでしまつた方が、お前のために……」。詞は涙に濁つてしまつた。あゝ、何といふ悲しい情、有難い親心でありませう。吾が子に出世させたさに、死んでもとは！しかし、私はかう申しました「いえいえ、私は紫紺の袴をつけて、肩で風を切る樣な境遇や、白粉や紅で容貌をつくつて、榮華を極める樣な事は、決して〳〵望みませぬ」と。

先生樣よ、お婆樣よ、私は只一人の父に事へて、美しい〳〵牧場の中に、可憐の牝牛を友として、自然を樂しむ事ができれば、それで充分であります。

（雨評）詞はなほ練熟を欠くものあれど、意氣愛すべき文である。

人

姉さんのたのみ　岩代　岸野常子

民ちやん、お變りもなくて、何よりですね。昨日はお手紙を有がたう、民ちやんはいつも悲しい事ばり云うて、姉さんを泣かすのですもの。どうして、そんなに聞きわけのないお子になりでせうね。そりやわ、世が世なれば、せめてお父樣でも御存命なら、何で他人樣の家に奉公などさせませうか。民ちやんも今頃は、屹度あの民ちやんの大好な英雄樣の樣に、白の筋の付て居る帽子を被つて、學校にお出でせうが、是も是非ない事ですからと、常々姉さんが云ふでせう。其の時はハイハイと云うても、直にあんな悲しい事ばかり云ふのですもの、困りますは。けれど、悲しいのは民ちやんばかりぢやないよ。姉さんなども、お内に居る時は、夢にも知ない辛い事ばかりですよ。それでも、辛抱して居る積りです。民ちやんも辛抱しておくれね。つまり、私しら二人が、此樣に艱難をするのも、みんな神樣の深い〳〵み情で、人は皆この荒浪にもまれ〳〵て、初めて眞の人となる樣に、世の中に生れて來たのですから。それを恐れず、悲しまず、耐へ忍べば、軈て、希望の港に着く事が出來るのですよ。だから辛抱しませうね、民ちやん。そして、お暇の時は、勉强なさい。ですが、勉强ばかりして、大切な御主人の御用を忘れてはなりませぬよ。姉さんも勤がすんだ後では、勉强します。人が寢靜まつて、犬の遠吠や按摩さんの笛が、遠くに聞える頃、それは〳〵、神棚の燈よりまだ小さい火の豆ランプの下で、勉强するのよ。そして、其時はいつも民ちやんを思はぬ事はない、ほんに木枯の寒い日などは、お店の門から入りくる身をきる樣な寒風に、風を引きはせぬか、お店の朋輩にいぢめられて、火の氣もない片隅に坐り居りはせぬかなど思ふと、女の愚痴とは知りながら、ついあきらめてと敎ふる口から、かうも書きたくなるのですから、堪忍して頂戴ね。どうか風を引かぬ樣氣を付けて、御主人を御大切にね、辛い事も辛抱しておくれ、姉さんがおたのみですよ。

（雨評）詞ほどに情の動かぬ嫌ひはあるが、筆はやさしくすなほに綱に整つて居るところがよい。

秀逸

◎元日の學校

越後　水野やすゑ子

あらたまの年たつあした、天さかる鄙にしあれば、雪をふんで學校へと、式に行く。自分の前を一、二間、一つのしよーるから二つのおこそ頭巾、たど〳〵しき道を睦ましさうな話。

「そこへ行くのは誰れ、と誰れ……、うしろは見ないでよ、あてるよ。」

頭巾は鳥渡動いて、「くす、くつす。」

「ひとりは永田さんね、ひとりは石黒さん。」

『くす、くす、きやー』と二人は雪の中へたふれてしまつた。そして、見上ぐる眼に、愛くるしい光を持たせて、雪を拂ひながら自分にあいさつをするのであつた。

嗚呼、これが、ことし初めての兒童から受けし敬禮であつた。

…………

式にはまだ二十分も早い。

人の子のいろ〳〵、衣の裝ひも今日を晴と、うれしさに包みかねかて、こぼるゝ笑顏。

「せんせい、學藝會の暗誦はどうでございました」といつて來たのは信子。「さうね、聲がすこし低かつた。」

「せんせい、ありたけの聲を出しましたので……」、下げ髮を一寸後へかきやつて、につこり。

おゝ彼女の暗誦した「天使」そのまゝの子。側にはよし子、わか子、まさ子もゐる。

尋常科の利ちやんは、よし子の弟。

「暗誦つて何……」

「おはなしのことさ」

「せんせい、おはなし、おはなし」、こんどは利ちやんがねだつてきた。

「あのね……昔……」

嗚呼、子供は天眞だ無邪氣だ、それを相手にかたり出すと、自分ながら陽氣になつて、浮世の何かに皆忘れてしまふ。

おゝ、この心で、また一年この天使の一群を敎へるのか、とうれしさに堪へぬ。

やがて、式の始をしらする鐘がなつた。

……

式がすんでから後、皆それ〳〵遊び事を考へたり、お友だちを誘つたり、して行く中に、ちやんと戸口にまつてゐる二人。

「せんせい一緒に歸りませう。」

これが、先程ころんだ二人であつた。

（兩評）捉り來たれる情景は面白いが、筆が少しく無造作にすぎるやうに思はれる。

◎輪飾掛けの音　藤澤ふゆき子

故鄕ほど懷かしい處はない。山と云はず、川と云はず、小田の蛙、辻の地藏まで、他國に見るの比ではない。われらは富貴を忘れ、名譽を忘れ、なほあらゆる人生の總てを忘るゝ事は出來るが、決して〳〵故里の情味を忘るゝ事は出來ない。あゝ故鄕、彼れは如何なる力があつて、われらをかくまで重く賴らしむるのか。そして、かくなつかしい故鄕、かく力ある故鄕のうちで、なほ私になつかしい思をさせるのは、昔私等稚どちが、唯一の遊び場所とした、觀音の御堂と、その境內である。

あられもない女の身で、蟬時雨を驚かしたのも、此處である、五段の階を雛段と見て、緋桃の花敷き、若草や翠の蒲團、きちんと座つて、丁髷姿と雛遊び、內裏樣よ奧樣よと、ほゝ笑んだのも、此處である。

お俠んの私、隨分とわるさをしましたが、この御堂の內では、曾て散り葉一葉ばかりの惡戲もしたことがない。しかし、只一度、堂裏の壁に、摘草の小刀で、三ッ目入道を刻りつけた事があつたが、それも、自我滿足の虐作ではなく、又人を呪ふ落書でもなかつた。今更語るもホヽ、ですが、此處の堂守りが目を病んで癒えず、片目になつてしまつた時、小供心に悲しかつたか、私を親切に歎待てくれた老翁のため、三ッ目入道ををどしつけて、あはれ彼の一眼を堂守爺に讓らせやうと、自刻の怪物を三日鞭笞つた。そは、三ッ目入道も、素は人間で、一ッ目小僧の前身と兄弟だつたが、その中惡しかつた前世の因果で、近世に、目數も異樣に輝いたのだが、若し修羅の相に、慈悲の鞭を加へて、その無間奈落迦の術を、瑜珈三密の靈

塲と化す事が出來れば、遂に入道の一目を小僧にゆづらしめて、各人間の素の姿にかへらしむるとが出來ると聞いてゐたので。思へば、自分ながらしほらしい行ひをした。又思へば、馬鹿な事をしたもの。自らが柔和忍辱の衣を着た、難行の苦を積んだものではないから、顯密の學には乏しい、舍利弗の賢ほども救護の力を持たぬ。有漏の幼稚、罪深い女の身でありながら、なに三ツ目小僧の一眼を奪つて、堂守の眼がなほせやう。

けれど、谷の石猿だつて、結緣して佛果を得た驗もある。とにかく虛心專念の女童の祈りに、多少の靈顯はあるべきはずだ、大慈大悲の觀世音は、平等の利益をさづくべき筈であるのに、盲龜の例現つにて、その後堂守は永く片目だつた。

この冬も亦、私は故里を訪づれた。あたりの風物、夏きたときと大した變りはなかつたが、只觀音堂の堂守が死んだと聞いた。なぜかとつかねてことを問うて目を轉じたが、舊山河徒らにもの云はない。颯と玉ゆらの松の風、瑠璃の色。

懐しさに古堂を訪づれると、此の頃來たと云ふ新

堂守、階でごろりと日向ぼつこ、北風が吹いて寒いのに。

何心なく裏にまはると、私が鞭笞の苦を與へた三つ目入道は、嚴然として稜威しい、いそ木の冬木立、年々に枝を廣げたのが、なんだかかう入道の指揮によつて、諸葉を戰慄かすやうですさまじい。誰が貼りつけたか、三圍もある御神木に、蛇の目の下に彫眼とある巡禮札。此の貼札、眞に後世安樂を願ふ善男善女の志のあるものが減つて、廣告の代用にされるのが多くなつたと、先の堂守いつも苦笑したが、まこと何町何番地と、宿所姓名を確然りさせて、其の商賣の品名を書き添へた部類が、目につく。丹塗の丸柱、梁の、欄干の、格子と云はず、桁と云はず、高いとこ、低いとこ、二度目三度目と巡拜回數番號うつたのも混つて。閑忙しい者は、人頼みして巡拜札貼つてもらひ、居ながら巡禮する世に、さりとは人の目につきにくい堂裏の、しかも杉の高みに貼りつけたとは、……をかし彫眼、世離れの道師めくよ。

と見ると、わが三ツ目入道に睇りあつて、新らし

くござつた墨塗の一ッ目殿、たれの所業か、ほくそ笑壺の遥ぬ憎、下しうつ向きにこう、石ころに一ッ目の注視は、將軍職の式に肯頭十見たと云ふ態。背を蛩に浮廓と世を送る鴟梟の棲から光る眼と、一つ目、三つ目、彫眼の巡拜札と、順に空の線を引くと、甲に似せて穿つた蟹の穴に、われからすつと流浪の癡騃者。

年末と云ふので、參詣の人もなく、いつも靜かなのだが、この日はわけて森として、神寂びた境内に、私は昔を思つて想ひに沈んだ。時に御堂の方で、がさり、かさこそ、ときどき音が聞えだした。輪飾掛けか、春の支度であらう。

（評）若心をせられたる文は。たのもしいが、輪飾りの音が、あまりにあつけない。

◎歸省　岩代　菅野和子

「姉さんお休みは何時からですか、休みになつたら、直お歸り下さい。阿母さんと毎日指をつて待つてをります。」

これは、妹から來た手紙の一節である。妾は女學校を終へてから、小學敎師となり、父母の空を遠く、兄弟の野を遙かに、現在の小學校に奉職して居る者。鄕里の或者からは、「女學校へなど入つて生意氣な！」。「お轉婆な！」。「出過ぎ奴！」。「敎師などになり下つて！」。「それでも角帽企望？」。「何ッ理想だと！」

こんな批評を受けてをる。然し、私の眞の理想と一致しませぬから、空吹く風とうけ流してをる。全く妾は女學校へ入校つたのも、眞に普通の學問を修めるに過ぎないのですし、他日家政、社交上にたづさはる圓滿を期する爲めばかり。敎師といふも當分丈。それも、將來自分の子を撫育する下稽古の積りなのであります もの。

妾は怎麼誤解された鄕里に、今歸へるのでありますす。昨夜から寢られぬ程嬉しく、汽車に乘つてをる間さへ、其の進行の遲さを喞つまで、跳びたつてをりました。私の奉職地は二十里の南、正月休みは徒十日、それに雪は暖かくなる迄消えぬ程積つてをる。殊更歸省せなんでも差支はないのです。然し、可愛妹を思ひ、老いたる母を思ひては、ど

うして他郷に――休みにも關らず――安臥してをられませう?

休んだ日から三日目が、一月一日で、妾の可愛子、四十五の敎子と、目出度四方拜をすまし、「先生かるたしませう」。「羽根つきしませぬか」。「毎晩先生の所へまゐります」。此の新らしき聲々をふりもぎつて、其の日の夜は宿屋に待遠く暮らし、二日の晝我が家の門をくゞつたのであります。

「アレ、姉さん!」と妹にいはれた時は、涙がでました。

阿父さんは益々健かに微笑んでをられ、阿母さんは、門松を潜るとき、かかつた霙をはいて下さる。未だ坊ちやん扱ひにさるゝうれしさ、有り難さ、何に譬へやうもありませぬでした。

すぐのお馳走は榾火。

汚れぬ雪に埋れた郷里の新年、前の山にかかつた、霞は、妾を入れる〻く焚いた風呂の烟。

指さゝれる方には今年收穫した米俵が梁まで積まれて。神棚にはお備餅。其側に、家内の數丈のまるめ餅。小猫の玉の分までとは、妾もふき出しました。

私の歸省の樂みはこれ限り。此の夏頃は、父母の膝下に家業を勤めねばなりませぬ。

（雨評）其の想の組み立て方の、其の筆も、すべて今一しほの文に餘。

この元日雜誌　名古屋　中村浪子

初鷄に去年の夢は破れぬ。戸外は何とはなしにそはそはして居る、東の空は、ほんのりと白み初めた。富士の森では、塒を放れた鳥が、一としほ啼き初め、瑞靄一筋棚びきたと思ふと、間もなく日輪は赫々と靄を破つて、二見ヶ浦の夫婦岩の間に、波はさながら金龍の躍るが如く、濱の上を走る白帆、漁艇やゝ烟の影もない。あゝ美なる哉、初日の出。あゝ壯觀なる哉、初日の出。

常は朝いするうなゐ子も、今朝は新玉の初めとて、またきに起き出て、晴衣着て笑ましげに、一家樂しく遙拜式は終はつた。腕白ものゝ太郎は、はや雜煮、雜煮とせがみ初める。すると、今年五歳の妹が「兄さん幾つ食べるのですか」と聞く。僕は?僕の年だけ食ふのさ。妹はきよろきよろ梟のやうな眼をしたとて、一家笑ひ崩るゝも、殊に可笑しい。

父上は御年始にとて出られた。學校より歸りし太郎は、凧あげにとて門を出るや否や、千鳥足あぶなげなる年始の客に突當つた。可笑しいと見て居ると乙女子の遣羽子に興じて、白粉つけくらに走り廻つてゐつたのが、道ゆく人のあごをはらうた。にぎやかに新玉の旭はいつか中空に高くのほつて、何とはなしにもの皆新らしく見ゆるのは嬉しい。

（雨評）雖もさしてなけれど、さて別に取り立つべきふしもまた。

、、、〇無花果　東京　山下里子

五年ぶりに姉とともに故里にかへり、已に人の手に入りしわが家を眺めて、赤々熟れた無花果の木を見、上枝から下枝にかけて、やゝに黄ばんだ葉が、うら淋しい夕風に煽られて、ひら〳〵と地に飜へるのを見た二人の眼は、いつの間にかうるむのでした。梭の音ゆるやかに納屋の戸をくるうら若き女が黒髪の長きにも、ありし日の姉女を思ひ、門途の池に泳げる金魚、鯉、さては、その背の菖蒲うゑにし花畑の、名残だになく取り荒されて、小鳥かふ家となれるを見ても、心は早ゝも幼き日に馳せて、いひしらぬ悲しさに打たれました。

あゝ、幼き日——それとても決して滿足な境遇ではありませぬでした。さもあらばあれ、姉は吾等に懐古の念をなしませぬのです。又わが懐ひ出の的ともいふべき母君は、此の里に永遠に残されて被居るのではないか、と私等はいひはあはされど、思ひ〳〵の同想に耽つて、呆然と暫らくは言葉もなく立ちつくしましたのです。あゝ、淋しい鐘の音は響き初めました。たとへば永劫に別るべき運命に泣いて、野に立ち泣ける人あるかとばかりに、泌々と胸にしみます。姉と私と初めて顔を見合はせたのは、この時でした。

（附評）眞に人を泣かしむべき材料であるが、さほどに泣かれぬは何故であらう。

、、、〇己が思ひ　淡路　古東静子

夜すがら物思ひにたへぬ身をなぐさめ顔に、はた意りの身の壁をはらへよとばかりに、聲を限りふりたてゝ、淋しき落葉がけも、うれしき宿とやすらひ、夜な〳〵出でては我が友なりし野邊の虫の音も、あはれ、吹き來る夜寒の風に、はかなく細るよと思ひしまに、いつしかとだえて、一聲をも聞かずなりつ、さびたる木末をならす風の音、滔々とうちよする濱の、徒らに高くなり行て、露おくと是も垣根も、ましろの霜と變り、早くも秋はすぎにし夢とぞなりぬ、已が思ひの伴を、秋の形見の菊の香にのこして、默哀の餘韻なほ深く、冬は來りて、暮近づきぬ。「この年も空しく過ぎし年の暮」こし方をかゝなへば、露をつかむ如くに、唯一つの心にとむる業も成し得ず、去年の「暮れちかひし言の葉も仇となり、またも暮れんとはする年のくれ、あゝ感無量、數滴の涙は深き恨みと共にとゞめんよしもなくて、うら淋しき夕の空をながめては、徒らに力なき大息のみもらさるゝを、如何せん、あゝ、こん年はまた何をかちかひおかんや。身は幾年悶えにもだえて、すゝむを得ぬ學びの道、成功おぼつかなくして、早も行かんとぞするこの年。あゝ、我が心、此の思ひは。

（附評）前半の言ひさしが面白くない。

、、、〇美文　東京　平塚白百合子

翌の白菊にほひさむき朝よ、すかれしコスモスの咲きのこりたるを手にして、色あせし唇は永久にひらかず、ふさぎ瞳はゆきぬ、ねむるが如くやすらかに。紫の糸ひきのぼる香のけぶり打まじり薫する柩の靈通ふが末は尾花波うつ山のかひに、午の日は淋しくこゑなき窓に落つ。

赤き心におくりくる村の人々いくたり、互に可愛き妹が生前の事しめ〳〵と語る。

塚はなりぬ、人々はつちの一塊、手に手をとりぬ。ともすれば涙の土に消ゆるを、やう〳〵に一つかみなげ入るれば、つゞく人々、口々に念佛となへて、小さき柩は、やゝにかくれゆく、今は涙のたえ間もなう、見ん術もなし。と見れば、はや柩はしづめられて……裏山の楢の木立落しくるもずの音、から〳〵と響きて、

山茶花の一片、音もなくちりぬ。

（同評）今一入の文に餘。

、、〇夜半の思出　青森　川合りく子

木枯寒き冬の夜半、折々ばら〳〵とまど打つ霰の音に夢さめて、ふと目をあけば、妾よりさきに目をさまして、枕もとの燈火を見て、にこ〳〵とほゝ笑む我子の愛らしさ。見るにつけても、思ひ出まるゝは夫の君。今頃は彼の地に、如何なる夢を結で居らるゝか。嘸ぞ、子供の事を思つて居らるゝであらう。愛らしい此の笑顔一目だに御目に掛けたいが、幾千里へだてし今日の身の上、如何して御目に掛ける事が出來様。あゝ君よ、夢にても見て下さいまし。妾も此の上は、何事も運命とあきらめ、再會の日を樂しみに心を励まし、子供の養育に注意いたしませう、と、果なき事を思ひ浮べつゝ、又もや我子の顔を見れば、いつの間にか、スヤ〳〵と眠れるつみなき顔に、思はず、ホロリと涙。

（同評）其の情は思ひやらるるものあれど調と筆が活かぬ。

、、〇短文　東京　檜皮よし子

今日はお書初めの日。毎年書くのに、今度ばかりよすのも、氣がすまぬので、下手ながらも筆を取ることにした。紅毛氈の上に唐紙をひろげ、硯ひきよせて、くんで置た若水をついで、墨すり流す。何と書かう、あれにしやうか、これがよいかと、しきりに首をかたむけて考へて居たが、ふと胸に波立つやうな事が思ひ出された。それは、去年の今日、やはりこの座敷のこゝへ仕度してさて書いたのは「一年の計は元日にあり」と。けれど、自分はどんな計をしたであらう。またどんな事を行つたらうと云ふ事であつた。が、自分は赤くなつた顔を上げて、ふたゝび其の言葉を書くことにした。字はちがはんが、只今年はそれをうそにしまいと決心して、書き上げた筆の跡は、前のよりはるかよいやうに思はれて、ほんとうにうれしかつた。母に見せてと、手にしたふでをさしおくとたん、玄關ににぎはしい萬歳の聲。

（同評）其の心は一寸面白いが、筆はなほたど〳〵しい。

、、〇暮秋の園　大坂　木村春江子

たれこめの三十日を、あだに過して、今日しも醫師の許しを得つゝ、そゞろ心にさまよひぬ。手入れの我れの病みしより、誰れ顧みる者もなき園は、行秋に痛みて、見る影もなう、落葉に落葉重なりて、苔の緑はあともなし。松、さすが千歳の齢とて、いたゞきにかつ〳〵殘る常盤の緑まづかたばかりはとてうなづかれつ。杉、いかなればかく我園にふさはぬにや。今度こそはと鉢植のまゝ置きしに、こもまた。柳、一葉も殘らず散りはてゝ、細き〳〵枝の幾筋、稲荷の社の屋根に垂れたり。紅葉、竹、裏の叢籬は隔てもあらじ、楓の二本殘らず色付たり、かたへの竹、こは新しく求めしもの。若葉の緑美しう一きははえて。山茶花、いつも嫁數は此の花よ。はやも咲つきたり。白きは赤よりもやゝふくらみたり。天長の佳節には、白き一輪いつも咲けるに。桃、丈いたく高ければ、花咲けばとて、座敷よりは見えず。實のればとて、誰がいたづらの的となればや、葉隠れのそれさへ、一ついまだ殘りしためしはあらず。黄ばみし葉はまばらに殘りて、風

なきにほらり〳〵と。

菊、青葉の色、勢よき樅の後ろに、時を忘れて黄菊のしほらしくも匂へる、これぞ我が友と、はさみとり出で、二本きりつ。殘る一本なりとも合せぬかんと、根元わくればあなあはれ、何に迷ひし憂身のはてぞ、片羽もがれし蝶のなきがらに集へる蟻の數十匹。

(兩評)　感情と想像とを今少しく活かして、庭前の樹木を見てほしい。

、、〇日記の一節

大分　佐藤家子

廿二日、鶯の聲に夢さめたれど、春のあかつきのれ心地よきに、起出でかねて、床の内にて、しばし讀みさしの女鑑をひもとく内、朝げの仕度も調のひぬれば、心を決して起き出でしに、花くもりにや、野も山も深くかすみにとざされて、あやしき空模様、盛りの櫻いと心元なし。

畫すぐる頃より、妹と共に午山の池に遊ばんとて至りしに、池の面は鏡の如くなぎ渡りて、今日は鯉つる人も少なく、いと靜なれば、かたへの小舟に棹さして、向ひの岸邊に渡り、もゆる根芹を澤につみ取りぬ。折しも、たれこめし空晴れて、うららかなる日影長閑に、黒髮なぶるそよ風の、水の面に小波立てゝ、岸の柳のみだるゝなど、風情言の葉につくしがたく、恰も一ぷくの畫中にある心地す。

(兩評)　整ひたる日記の一節にはあれど、ありふれたるをいかにせん。

、、〇元旦

越後　松永繁子

去年よりそだてし福壽草、今は美しく笑ひぬ。今朝くみかはし屠蘇の醉今もなほ殘れるは、新しき年を祝ひてのいろ。七つになりし妹、

「あら姉樣の御顔つたら、」のぞきこまれて、「急ぎ玉手箱引よせ鏡に打ち向ひたらむだにいと恥かしう、打ち見れば頰のあたりいと赤し。

妹は頻りに鶴の折紙せんとたゝみける。姿は歌などかく。父上と母上とは應接間に、弟は二本松のあなたに、凧凧あがれと唱ふ聲いさましく聞ゆ。

雀の聲は松の梢に高く、軒毎になびく國旗は、四方の國々を打ちなびかさではやまずとのけはひに……。

二日

「姉樣よりさき起きましたよ。」

北窓に黒髮けづり室へ歸り來れば、弟と妹、袖にすがりてほゝ笑む、

「左樣れ、今日はさう起き初めですもの。」

「立身しますわ、」弟の曰く「僕はえらい人になりますよ」と得意の姿、嗚呼はらからの立身、夢にだに見むもいと嬉しきを、目のあたり見んは、いつの世幾年の後ならうむ。

書初めをかき終りて、三人八疊の一間にて合奏。

「わたし音樂家になりたいわ、」妹のなかしき姿にていふ。……

太平の曲……心地よき程にひゞく。

父は母はこをきゝまさば否きゝまして、如何にゑみてかおはする。

御顔りしわさへのびやしつらん。

三日

「ほゝほけきよー」、清きこゑに、眠き夢はさめたり、あゝ今日は三日。

新年のことほぎ申し越されし又なき友の千代子の君、美な子の君。さては、女醫學校にゐます、いし子の君へ、取り急ぎて返り事す、せの君を迎へたまひし新年、さぞたのもしくや。いかに嬉しきまとゐ

やしたまふ。今年こそは玉の子をあげさせ給へ、必ず……いと美しき文字……。

さすがに恥かしう頰のあたり赤く熱したるよ。せの君みそなはしまさば、とかへりみられし。

近き家の方々あまた御出ましてけれは、奥の座敷にてかるた會、まけじ劣らしと取りかはす。節子の君は白き顔などつけられてをかしき樣なれば、一座こぞりて笑ふ。

興の中にして、母上の料理の御もち丸のみにすましきものよ、幼き折将に死なんとせし事もあればと、小さい子らを顧る。

口もとおしぬぐひ、亦しても取りかはすかるた。

耳は聾せんとし、目はうろつく。

巨細燒にゐれむる小猫、床をうつ、……。

（雨評）「せの君を迎へ給ひし新年云々」の一節が、突然にして、前段よりの續きわるし。

、、〇楓

紀伊　茨木とく子

我は一本の楓である。今より七八ヶ月前、吸き陽氣を受け、葉の顔を出したる時は、早や隣の櫻は、多くの蕾を持ち、程なく「烟霞濃々として花爛熳たり。」の繁開くよと思へば、昨日來し老人の盃に、一葉散りたるを初として、いつしかあと方もなくなつた。」實に潔きこと日本武士の樣だ、余も亦散り際はかくなん」と思ふ折しも、「美ちやんの手の樣だ」といつて、足下のすみれを摘んでゐる兒童が、我を評するやうになつた。萬樹綠の滴る頃は、我が陰に佇みて暑さを凌ぐもあつた。時到り、紅の衣と着代へ、水鏡にうつして居ると、「楓葉爛然として色渥丹の如く、返照倒垂影水中にあり」。といつて居る。日光を仰いで居ると、「照り添ふ旭に映じて榮ゆるもみち葉の色いと美し。」といふ。此れなん我等の全盛時である。折り柄、吹く風に伴はれた二ひら三ひらの行方やいづこと見てあれば、向ふの川の上に落ちて、流れて、白妙の水泡に紅の渦まかせる。又學び手の手に入りては文のしほりとなり、あるはまた知らぬ國に送らるゝもあらう。あゝ死ても角ても遂に別れくとなりて消ゆる身哉。

（雨評）意匠は苦心のあと見ゆるが、言ひまはしになほ苦心が足らぬ。

、、〇秋は來れり

武藏　鵜澤すみれ

秋は來たれり、白きものは兩親の髪。去秋も同じく白かりき。されど、其の白き事は、より濃くして、今日の如くにてはあらざりき。あゝ、今日は昨日より白きを嘆す。

止めよ、其思を學ぶを止めよ。去つて來ん秋は如何に白くなり勝るかを思へ。

秋は來たれり、白きものは蘆花。天高く星稀なるこの夕間暮、姿は山の麓の里、この橋に立ちて、危くも岸にたてる寂みしき蘆花を動かして靜かなる水の面に一輪二輪穩かに波を畫く風を見たり。

秋は來たれり、白きものは馬の鼻息、霧たち迷ふこの曉頰冠に懐手して、口笛に追ひつつ荷車挽かせ行く七公が馬の鼻息白く、それさへあるに、その髭を吹く風あるを見たり。

秋は來たれり、白きものは蕎麥の花。天高く氣清く氈を敷きたる如きの平野幾里、さくの麓に至りて益々曠し。今を盛りと咲き滿つる蕎麥の花は、秋草の露になやむをば笑ふに似たり、風のまにまに花と飛び立ちし白き蝶の姿の、何ぞ斯く衰へ斯く憐れなるや。彼れは青春に於て人の羨む所！、花を追ふて濕き翅を結びぬ。然るに、今や斯の如し。あゝ人世もまた斯の如きか。姿は其の蝶の飛びて流を越えんとする時、颯と吹き來る夕風に、身は水に落ちて、あやふく流れ行くを見たり。

秋は來ぬ、あゝ秋は來ぬ。

（兩評）趣向に工夫のあとは見ゆるが、其のいふところが苦心が足らぬ。

、〇二人の手紙

相摸　一ノ瀬　よし子

花子より。
昨日、庭の紅梅が二つ綻びて、眼白の鳴く音を、南窓で聞きました、
この頃、御便りがないが、また例もの御部屋で、「メマ」と一緒に御勉強ではありませんか。
雪枝さんより。
うそよ、毎日竹條で遊んでばかり。許して頂戴、私は編物の意匠に苦んで、日もすがら。
花子より。
竹條は何時も賑いでしよう。きつと、美妙に出來上つて、先生に御賞めを頂くのね、あなたは圖畫が御上手だから、うらやましくつて。
雪枝さんより。
昨夜、晩くまで、起きてゐたせいか、頭が重くて、學校を休みました、
花子さんの夢ばかり見て、寂しく、一人。床の間の梅が、なつかしい香りを。
再び雪枝さんより。
もう、御正月が來るのね。昨夜、窓から、春待つ松が、雪の帽冠りをして、内を覗いてゐるのを見ました。
私は、もう、うれしくて、姉さんと、買物に行きました。
花子より。
夕、月に結んだ氷が、今朝、朝日に解けて、御正月をよろこんで、久しく待つた。つかれを、一度に永く、東の方へ延ばして、御宮の森へ隠れました。
雪枝さんより。
今日、亦、遣羽子をして、あの松の木に羽子を二つ掛れました、
今夜は如何して遊ばうか、其れともあなたの所へ……。
花子より。
あなたの御上手には、兄さんも感心してよ。竹姉さんの御仕込……いゝのね、梅子さんも、松雄さんも、一緒に、今晩きつと……復讐を。

、〇若水

伯耆　錦織　よし子

一年の政は元旦にありと、まだきに起きいでゝ、身しまひもいそ〱と、やならたすきに袂かゝけて、井戸にむかふ、星美しくゐどりしまゝの清き〱若水は、手桶にあふるゝばかり、肉滿きわが肩に運ばれて、我家に向へば、朝寒の氷下駄に碎けて、足下、危し。ふみしめ〱かへり行く我家の門には、姑の君にこやかに立ち玉ひて、足もとに氣をつけよ、御腹が寒ぞとくり返しのたまふに、御いらへもなしえぬ迄にはづかしく。

、〇折にふれて

名古屋　山根　しげ子

十月十七日、いゝお天氣で御座いましたから、お心安い方々と、茸狩に出掛けました。此日、汽車に非常の雜踏で、御座いまして、車内に立ちつゝ、どうやらかうやら高藏寺驛へつきました。それより、一行は目ざす山にて、各々うれしさをかごにみたし、午後四時發の汽車にて歸へらうと停車場へ參りました。雜踏は以前に倍して、居りまして、一行は各々別の車に乘る事になりました。私も乘り後れじと、一つの車に飛び乘るや否や、海軍軍人がお立になつて、私に席をお讓り下さいました。私はお氣の毒でおじ退致しましても、再三のお言葉でしたから、腰を下しました。汽車が次の驛につきましても、少しも人數はへりませんで、軍人の方は立つていらつしやいます。私がおかはり致しませうと申し上げ

ても、宜しいとおつしやつて、とう〳〵千種驛へつきました。その上、五歳になる私の長男をだいて、安全の地へ下して下さいました。私は實に感心いたしました。かの日清戰爭より此かた、日露戰爭をへて、軍人は大變に威張つて居る人が多いのに、何といふやさしい方だらうと存じました。古人の言葉に「表面はやさしく内に勇氣のあるのが誠の武士」だと申されましたが、此言葉にふるはしい方だと、しみ〴〵感心いたしました。これも一つの思ひ出になるので御座いませう。

○元朝の一時間　下野　井上倚子

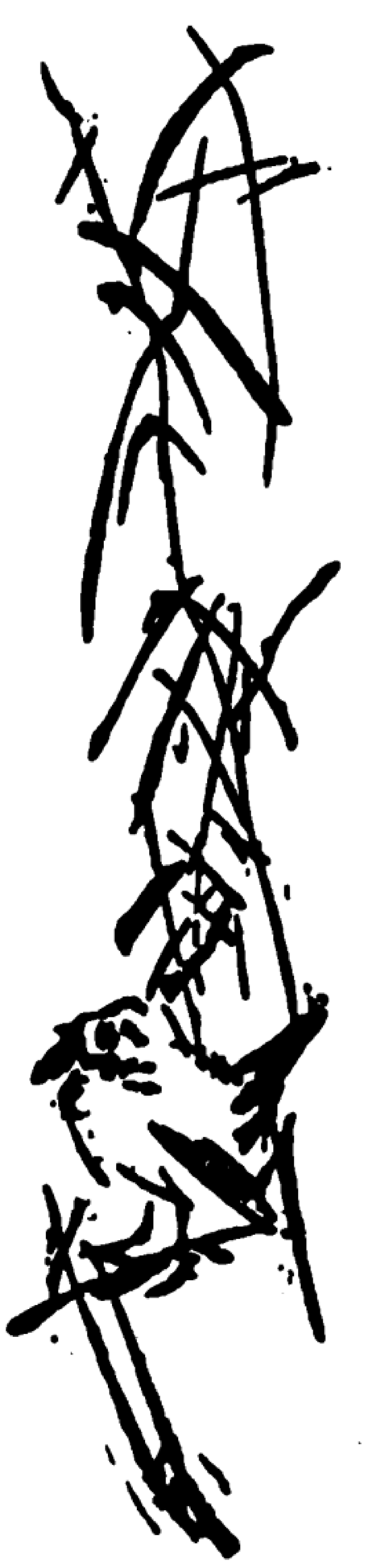
見馴れた町見なれた家も、門松〳〵飾り、國旗何となく賑かに、もう正月がきて、子供のやうだがうれしい。玄關に踞つて見ると、涼く蒼白い石壁に、鷄の足あとが、わざとらしく付て居る。朝風に輪〳〵がさら〳〵音してゆれる。隣で若水を汲むのかしら釣瓶の音がする。まあおそいこと。表の方で羽根つく音笑聲。かちんと音がして、剛からおちた羽根が、門松の中へ落ちた。勇しく鈴の音して少年配達がなげこんだ、初ずり新聞は、重いほど。忙しげになげこむ年賀狀、郵便の聲もいさましい。學校へゆくと、君子さんの誘ひに來たのに驚いて、妹の仕度にかゝる。彼のリボン、このかんざしと大さわぎ。やつときめた眞紅のリボンで、房々した髮を結び、紋付に袴、白襟がよく似合ふこと。可愛らしい靴に小さい音をさせて、君子さんと並らんで行く姿を見送つて、しらずほゝ笑んだ。折しも、靴の音して名刺片手に（あけましておめでたう（本年も相變りませず）毎とし同じことをくり返す。遠くから、樂隊の太鼓がひゞく。萬歳のつゞみがきこゆ。

○元旦　大坂　岩橋花子

一夜ばかりを呉竹の、明くれば今日し新年の、例變らぬ、祝ひの膳、父母君が美はしの御姿にむかひて、我が手にめぐりし屠蘇の盃目出度しとこそ祝きて呑む。かへりみれば、幾年振りの故郷の春ぞ。過ぎし年わが行末の業もがなと、はる〳〵別れて、草枕旅のみ空にわびしう年々むかへ來しも、夢とこそ。別れ居し年月のなつかしさも、樂しき物語りの種となりてつきず。母上が手づからの雜煮も、忘れやらぬ昔の味、あはれたのしともたのし。朝の祝ひ目出たう納むれば、ほの〴〵しらむ東の空、やがては出づる初日影、氏神の御社にて拜せんと、昔なつかしき社に詣づ。七五三新らしく結び、代へて御まへの御備へいといかめし。まづ今年の幸を祈りつゝ、ふとかしこきあたりの御歌、思ひ出でつゝ、御社かこむ老松のみどりそゞろにうち仰ぐ。

○元旦を迎へて　大阪　小野初枝子

榮えある元旦の夜は明けぬ。拂曉、妾は初日を見まほしく、家を出で、とある橋畔に立ちぬ。やがて空白み、悠々とさし登る初日は、紺碧の空に百千の榮光を投げ出しつ。燦々たる光を浴びて立てる妾は、此の瞬間？、云ひ知れぬ崇高の感に打たれて、日頃汚れし思の、空しう消え、清く新らしき念は妾の全身に滿ちたる心地のせられぬ。やがて萬有皆な死せるかと思はれし靜淨の朝の元旦は動きそめつ。見ゆる限り一様に翩々たる日章旗揺く所、雜遝せ、盛裝せる人往き、亦來る、直ぐ對岸の小學校の君が代の合唱の聲河面を渡りて消えつ。榮えある四十一年の元旦よ、妾は今此に其の第一日を迎へて年亦年と思ひて空しく得なざるりし凡ての惡しき行を改むべく誓ふなり。



新體詩

文學士　鹽井雨江先生選

天

柳かげ　　伯耆　錦織さち子

手を取り泣きてひた泣きて、辛らき名殘の春の朝、
西と東に別れしも、このかげなりやこゝなりや。
またあふまでのかたみぞと、もゆる柳の一枝を、
きりてかたへに君さしゝ、根ざしは深くはびこりて、
枝は地につくばかりなり。思へば十年の年月よ。
君を戀ひしの朝夕の、唯だ慰さめは此のかげよ。
あこがれ來ては此のかげよ、君と相見る心地して、
すがりて泣きし幾度ぞ。

（雨評）句も整ひ、情も深くこもりたるを愛す。

地

東京　檜皮與志子

垣にのこりし　白雪も、
いつしか消えて、　百くさの
みどりも淺く　もえにけり。
訪ふ人もなき　山家にも、
のどけき春は　おとづれて。
つくらぬ色の　ふくよかに、
ゑみもこぼれて、　白梅の、
破れし軒端に　かをるなり。
訪ふ人もなき　山家にも、
のどけきはるは　おとづれて。
井戸のほとりの　糸やなぎ、
やつれし身にも、　昨日今日、
みどりの衣　うちかけぬ。
訪ふ人もなき　山家にも、
のどけき春は　おとづれて。
のどけきはるは　おとづれぬ。
のきばにゝほふ　梅が枝や、
あなたこなたの　やぶかげに、
初音をきくも　近からん。

（雨評）想はありふれたれど、句の流暢にわかりやすく整へ得たるは、なか〳〵に、氣取りて其の意のきゝとり難きよりは、遙にまされりといふべし。

人

渡船　　横須賀　渡邊比佐子

夕の富士の紫に　遠く彼方に霞みつゝ、
日は今陰に入りつらん、　利根の流れのいと長く、
のせて一人の繪日傘を、　渡舟靜に唯一つ、
向ふの岸に進み行く。　風のまに／＼はら／＼と、
二ひら三ひら桃の花、　傘にすべりて音かすか。

（評）一寸詩趣あり。

秀逸

◎のこるおもひ　　大坂　木村春江子

露に匂ひて菊は咲けども、霜にさほひて紅葉は散れど、
そを樂しまむ我が心かは。
晴るゝ日もひねもすこもり、くるゝ夜は猶しぞ思ふ、
われ斷きて、あゝ、など逝きし吾子……
行く秋は霜置き添ひて夜は寒し。寒き日ごろを、
我もまだ見ぬよみの國邊に、母を尋ねて、はては、何處の
誰にすがるや、泣きもつかれて。一人わびねの夢は破れて、
うつゝ心に乳求むるも、誰れよりそはん、誰れ添ひ乳せな、
秋は更くれば、霜白し、夜は寒し。
寒き夜頃を、あゝいかに、我子は――。
まさ／＼と
まぼろしに見る吾子の面影、なつかしとばかり抱かしむれば、
豊よかなりし乳房しなびて、吾が胸のあたりいたく細りつゝ、
あゝ我がかいな、何を抱かむ。落る涙は、頬をつたひて、あゝ、さびしらの我が世はかくて、かくて、さびしく、我れは老い行く。

（評）其の情はきこえたれど、其の題の悲哀なるに對しては、情なほ動き足らぬをおぼゆ。わざとにはあらねど、句の亂れたるは面白からず。

◎新春偶作　　土佐　秋月廣江子

春、そは時の福音か、　醒めよの啓示仰ぐ時、
ふりにしかげも忘られて、　只に嬉しき心哉。
昨日の雲の空になく、　昨日の夢の人になく、
自然のさとり讃美歌、　我も古きは語らじな。
ちと濃に過し白粉を、　鏡の前に拭はずば、
春を二十年若からぬ　胸の血しほも湧くらんに。
肩あげとれし振り袖の　なれぬ姿をゑめばとて、
梅が香小さき窓にして、ふける思ひを誰れかしる。

されば、秘めし去年の史は、とふ事勿れ、春の日は、
紅もゆる八つ口の　其の色せめて褪する迄。

（雨評）調には詩韻あれど、組取りたる嫌ひあり。

◎北風　東京　鵜澤喜舞

春は胡蝶の夢をだき、秋は涼しき歌の主、
一度劒を振るらんか、萬物默し血潮なし。
優しく窓を訪るや、玻璃を叩きて玉の音、
一度怒憤に觸れなんか、海洋はさかれて魚すまず。
樂の宴を天にはり、松籟これに和すあらば、
塵榮に醉へる人の世は、小さくなりて死せる如。
一度興を殺ぎなんか、山は砕けて鷲生かず。
大浪寒き荒原は、陽光冷へて月氷る。

（雨評）想に詩はあれど、發表未だ洗煉足らず。

……○ひゞき　下野　井上倚子

彩雲たなびくひんがしの、みそらを領する天つ日の、
光に萬象あらたなり。あふぐ眼にまばゆくも、
金色なせるみひかりは、弱者を射んの征矢なるか。
ふもと松原あさかぜに、ふかれて枝のさゝなるも、
光に榮えて音高う。清く流るゝ川波や、
小どりのはゞき風の音も、雲の彼方に勇者の、
ことしをあだに過すなと、弱者をむち打つ響かと、
きこゆる時に奇しくも、　希望のうしほ胸になる。

（雨評）我れ先づ深く心の底に感じて發するにあらでは其のひゞきの人を動かす力はならず。

、、、○よき朝　越後　松永松葉子

梅の香はほのに匂ひて、六疊の一間ふくいく
新玉の春は來にけり。醉かけて願ひのぞみし
おもはくも、半ばなりえて、嬉しさにほくぞゑまるゝ。
丸窓にさすや初日の　新しき光あたれば、
鶯も躍りて鳴きぬ。くりやには餅やきすらし、
たまさかに風の吹く時、よき香かよひて來たる。
まるわげに袖をくゝりて、玉たすき赤きをしめて、
ふくやかの妹の姿や、美くしう胸にゑがきて、
繪筆とる腕ゆるめつ、金泥の屛風めぐらし、
明明と火ともる部屋に　相見たる胸のとゞろき、
まろらかに二人の仲を、いとかたくえにしの神よ、
たやすくはとける事なく　永久に結ひたまへと
祈りしも、去年となりたり。新しき年の始めに、
戀成りし吾が身思へば、嬉しさに胸をどるなり。
からかみをあける音して、御出ませ、朝めしあがれ、
頬のあたり櫻色して、わが妹は顔を出しぬ、
望みある光仰ぎて、たのしとも新しき年。

（雨評）かゝるほゝゑみは、少しく袖につゝむやうにしたるがゆかしう候はむ。

、、、○雪の朝　伊賀　菊山かね子

朝明け、雪は音もなし、抱かんに冷えし小火鉢に、
人なつかしく涙しぬ、町の家並は白々と、

雪に明けゝり、冬の朝。
「屑はないか屑や屑、ホヤのこぼれも買ひましよう」
なりはひ故の悲しさは、若き女の恥ぢもせず、
集めて満ちぬ、籠の蓄。ながきむかしも語りぬれ、
そけたる頬こそ、いくばくの知れぬなげきの責計ぞや、
つゞれ一重のむれの中、
たどるに足もなよ／＼と。
宿命おなじ世に生きて、身は悲しさに貧しさに、
紅恨ぞ秘むれ、はかなげに、涙して呼ぶ「屑や屑」
あゝ知人――と淋しく笑みぬ。

（附評）趣に詩はあれど、發表の工夫足らず。

、、○雑煮　名古屋　橘多賀子

昔美しう生ひ出でし若菜の色の淡緑、
然らば汁も實に染まん、雑煮の餅にうつる香や。
家族ならびて箸上ぐる楽しき膳、栗の膳、
島田に結ぶ嬉しさも今日十八の花少女。
掬ふ白米の餅搗に年々程とむづがれる
幼き妹はいぢらしき、今年片手をあけの春。
海老よ、鯛よ又昆布と笑ひさゞめく部屋の中、
春とこしへに咲き團欒の興は多けれど。
雲ばるかなる都路に、一人缺けたる兄君は、
雑煮もあらぬ朋會に。故郷戀しうおはすらん。

（附評）調を洒落にいはんとして、情の濃くならぬやうに注意せられよ。

、○弟の卒業　名古屋　不破きみ

百里に餘る學びやに、幼な心の涙もて、

送りし時はそもいづそ、十有餘年の昔より、
花のあしたも月の夜も、雪ふり積る朝風の
身にしむ頃は殊更に、道にたゆまず勵めよと、
西にむかひて祈りて、山ほとゝぎす名のる時は、
我が歸省も間近しと、父に語ひ母に告げ、
暑さわすれて待ちにしが。我も契ひし其の言を、
固く守りて、此の秋は功は積みて業成りて、
月の桂を手折りつゝ、歸へる心や如何ならん。
待ちわびませる父母は、老のまなこに涙浮見て、
うれし涙にくれまさん。共に契ひし我も又、
今はホームの主婦となり、かはゆき子等をはぐゝみつ、
君が成功祝すなり。

○海邊冬　神奈川　鈴木まつ子

千鳥のこゑも身にしみて、
いそ山松にさえ／＼し
月は寒けくてらすなり。
濱のまさごもましろにて、
よるしらなみも冰るかと
凍ふばかりにみゆるなり。
なれにし海士も夜なく／＼の
ねざめの床やいかならむ。

○折にふれて　大分　佐藤家子

野川の水の音すみて、岸にみだるゝ糸萩の
葉末に宿る白露も、月の光にきら／＼と、
黄金の玉とかゞやきて、秋の謂歌ふ虫の音も、
いとゞすみゆく夕まぐれ、心うかれて我は一人、
野川の岸にたゞずめば、吹きくる風もみにしみて、
心に浮かぶ友の影、あゝなつかしのかの君よ。

君も今宵の月影に、調ぶる笛の音をこめて、
故郷こひしと夜もすがら、同じ思ひに沈むらん。

○となり家　　東　京　山　下　里　子

となりの家は空家となりて、旗日か靜かになりぬ、
三疊の書齋の窓ゆ、爪立てゝうかゞひ見れば、
草生ひて入口を見ず、晝なれば虫も鳴かれど、
青き色の雨戸にさして、さびしらの光あやどる。
たとふれば世のうき戀に、あこがるゝ人をおほひて、
破衣に似たるけはひや。
一しきり鳥の音止みて、村人の來るとすらし、
ほと／＼と弱き足音の門の邊の草踏えて來る。
朝の日の閑かに、草のかなりをまき上げぬ——。

、、、初春　　東　京　秋　田　登　志　子

坪にも足らぬ小庭なれど、黄土はいとも暖に、
後方に倉庫の眞白なる、駿美しき銀屏風。
花こそ咲かね瑠璃光る、小石の面にほと／＼と、
陽炎燃えて平和ぎぬ、エデンの園の夏のごと。
折しも此處に今朝更へし、彩羽の衣を薫らせつ、
直に怪我すな怪我せじと、靜に下りし雀二羽。
まだらに落らし水晶の、小さきに似たる米粒に、
暴き尖脳を動かしつ、晝の飯事初めけり。

、、、那須與市　　名古屋　中　村　浪　子

沖の船より、高々と扇かざして、手弱女が、
我れにそれをば射よとてか、陸の方をば招くなり。
召しに應ぜし武夫の心の中や如何ならん
もし過またば、如何せん。さは云へ、君の御諚なり。
そむかば、不忠義が名折れ。早や驅と勇みたち、
勇める駒に鞭あげて、沖の方へと乘り入れぬ、
こゝは名に負ふ八島灣、男浪女浪は立ち騒ぎ、
我身はゆれて定まらず、船もゆれつゝ定まらず、
陸は味方に海は敵、いづれ榮ある海の上、
もし過またば、我れこゝに腹かき切りて果つるまで、
我れ果つとても、我が方の名折れはつきじ千代かけて。
あはれ弓矢の神々と、心を定め放つ征矢。

、、茸狩　　備　後　杉　原　衣　子

草葉の露にやどりたる有明月の影ふみて、
姉と妹の二人づれ、山路をさしてたどり行く。
袂を拂ふ秋風の、やゝ身にしみて、虫の音も
いとゞわびしく聞ゆなり。姉は妹をふりかへり、
妹は姉にしたがひて、共に分け入る松林。
いなる道かたどるらん、妹はやがて、一本の
小さき木の子を取り上げて、先だつ姉に示しつゝ、
喜ばしげにほゝゑめり。姉もおくれずとり上ぐる、
笠なす上におく露は、よべの時雨の跡とめて、
香さへ床しくかをるなり。こゝにも一つ又一つ、
二つ三つ四つ六つ七つ、十の數さへ累りて、
かたまに殘る隈もなく。さはとかたみに誘ひて、
元來し道を歸り行く。疲れし脚も軽らかに、
樂しき歌をうたひつゝ、澄み渡りたる秋の空、
列もみださず飛ぶ厂の影をしたひて眺めつゝ、
巣のあみ戸に消えにけり。あはれ二人のはらからは。

短歌

御歌所寄人 小出粲先生選

天

初水　名古屋　山根しげ子

うなゐ子か流し置きつるさゝ舟の
うごかぬ見れはこほる池水

地

東京　平塚白百合子

柿の實に夕日はてりてあきつどふ
わら家のにはに翁あみすく

人

車　美濃　西尾靜子

町はつれ夕くれ寒き居酒屋の
軒にならへる空車かな

社頭の松

○　東京　橋本袖子

廣前の砂に朝日の影さして松に遊べる鳥のけみゆ

同　東京　松原岑子

かげ高き松なしるしにそのかたとあさゆふ拜むさとのみやしろ

山居新年　下野　井上倉子

丸まどの障子にうつる門松のかげを友にてとそくみにけり

新年風　東京　土田八重子

言葉るへけさ改めしほぎ言をまつ吹き入るゝ年の初風

試筆　埼玉　横田秋子

筆とれは鶯來なく文机の硯すりなれは梅かをるなり

春駒　埼玉　横田やな子

うらうらとかすむ青野にはなたれて時得顔なるひはり毛の駒

初日　神戸　足立あさ子

注連はへて清めし庭の筒井筒汲つゝ仰く初日かげかな

歌留多會　東京　檜皮芳子

心あひし友とちなれと今日のみは てきともなりていろたとりあふ

梅　千葉　溝上幸子

おりたちてにほひしるへに梅の花いつれの枝の露はらはまし

園生の梅　肥後　米松子

嬉しき君か園生の梅さかは露よりもさきにとはまし

落葉　伊賀　佐々木いすゞ子

何となくあはれになりぬ失せし子のおくつき埋う紅葉散る見て

歳暮　信濃　今村幸子

徒らに過にし年としりなからなしきは暮のこゝろなりけり

歳暮　備後　杉原衣子

みちひなき硯の海に向ひてもよる年波の色は見えけり

落葉　鳥取　岡井かう子

ふりはへて又も來つれは紅葉は樹影にちりぬ目さましきまで

冬の歌のうちに　長野　北澤千枝子

入營の兄なかこみてはらからの名殘をなしむ埋火のものと

晩鴉　美濃　杉山芳子

落葉かくこらはかへりてたそかれの丘の松原からすむれなく

火　　東京　中村千代子
埋火をかきおこしつゝおこしつゝふけゆく夜半もしらで語らふ
○　　神戸　足立ゑい子
染ぬ間は待わひしかとむらしくれ今は紅葉にいとはるゝかな
暮秋　　和歌山　茨木とく子
かけ消ゆる夕山からす淋しけになきて暮れ行く秋そかなしき
山茶花　　美濃　長濱園子
日あたりに大根をほして眠ける媼の髪に山茶花の散る
椿　　美濃　芳賀敏子
くれなゐの椿花ちる垣根みちうなゐにきはしまゝことあそひ
時雨　　備後　杉原きれ子
人目さへかれにし宿は中々に時雨の音もなつかしき哉
水車　　美濃　徳島みゆき子
水車ゆるくめくれるいさゝ川あひるあそへり町はすれ道
舟　　東京　三宅よし子
まほかたほゆたけく風をふくませてえらのおりけにかへる舟かな
筏　　美濃　小坂いく子
大井川下る筏に花散りて嵐の山は霞はてぬる
旅中偶感　　山口　村田松子
木枯らしの今日しも吹けは島すまひ舟もかよはす便もたえつゝ
蓄音機　　美濃　杉山繁子
蓄音機かるたにあきて小女らはきゝつ興する春の夜半哉
賞にあつかりしかうれしみて　　淡路　洲東靜子
ゆめなるかはたうつゝともまとひけり色なきしこ草花さかんとは
折にふれて　　能登　粟倉菫子
さら〳〵と荻なくすゝ音身にしみぬ月影さえて肌寒き夜に
○　　岩代　菅野和子
うき涙をられ出る月に橋のへの我身のかけは水に流れぬ
○　　岩代　岸野菊子
つとにとてかさすもみちの一枝をれたくも風のふきちらしけり
○　　東京　中村春江子
里川のせの音も遠く夜はふけて垣の松に木からしの吹く

乙

社頭松　　越後　岩本芳子
千代しめて根はふ松こそ宮所うつりうこかぬしるしなるらめ
同　　佐賀　藤松りか子
玉千鉾かみの御いつやこもりけんあらしにそよく松のをゝしさ
歳旦　　名古屋　中村濱子
少女子のひと二た三とつく羽根の音もゆたかに年たちにけり
新年萬歳　　東京　西村直子
あたらしく明つるかたに萬歳とさへつるこゑやひなのうくひす
かき初め　　長野　北澤千枝子
けふよりは泣かしいからじさわがしとまづ筆そめぬ年のはしめに
子の日の松　　横須賀　高橋つれ子
君か代の千代のためしに引く小松大宮人の力ためさん
若水　　韓國　原野みき子
若水を硯にうけて新玉の御代をことぶく歌詠むるかな
春の海　　美濃　加藤里子
れむたけにけぶり噴く島船に見てゆくら〳〵と行春の海
○　　横須賀　渡邊比佐子
霞ひく野邊の細路風たへて春をたつぬる梅の一枝
雪　　越後　水野やすゑ子
友三人こたつをしめて戸をあけて雪を見ていふ鉢木のうた
木枯　　大阪　木村春江子
小夜更けて燈火暗きまくら邊にたえ絶えかよふこからしの音
菊　　伊賀　菊山かれ子

讀者文壇

うはの家のふすまの繪にもにたる菊二もとさきぬきりておくらむ　美濃　石原綾子

山里に紅葉狩りして
紅葉見てかへさはくれし山里の道にまよへる女子つれかな　埼玉　横田須磨子

橋邊の柳
山川の黒木の小橋青柳の糸なつなてにわたる春風　神奈川　鈴木まつ子

都 雪
今しはしあとをなつけそ靜けくもゆきふりうつむ都大路を　名古屋　荒木登美子

鶴
のどかにも紫大空にきこゆなり畷のなかに田鶴やまふらん　岐阜　目島綱子

牛ひきとなりて
世の富もほまれも云はし吾れは唯平和の野邊に牛ひかんかな　美濃　杉山藤枝子

犬
うぶすなのやよひ祭りのにきはしくひとむれたかる犬芝居かな　淡路　古東藤美子

折にふれて
いと高きめくみの波のうちよせてこの身の幸や何にたとへむ　備後　杉原衣子

をりにふれて
たらちねの母のね心いかならん灯影もこほる冬の夜寒に　旭川　佐藤央子

○
ふえの音にしらへあはせて松風のこゑすみわたる加茂のみやしろ　岩代　岸野常子

○
濱の音も神代ながらのこゝちして初日まばゆき伊勢の海づら　東京　秋田登惠子

雀さんと手もて掩ひし垂髪子の指の間より小鳥ほゝ笑む　廣島　鈴森きみ子

冬の山里
冬の日をのどかにおくる山里に雪は舞ひ來ぬ餅杵に合はせて　伊賀　山村りやう子

秋 雨
つき終へて國の西みる若僧の白衣にさむし鐘樓は雨　東京　山下里子

雲
今かなた雲はうづまく世をおほひ地をおほひぬわれもまかれむ



俳句

内藤鳴雪先生選

天

初日の出夫と共に拜しけり　横須賀　柏原みな子

地

乞食の粥も養えたり草紅葉　相模　柚木とよ子

人

聾の人は無能なりけりかるた會　廣島　鈴森きみ子

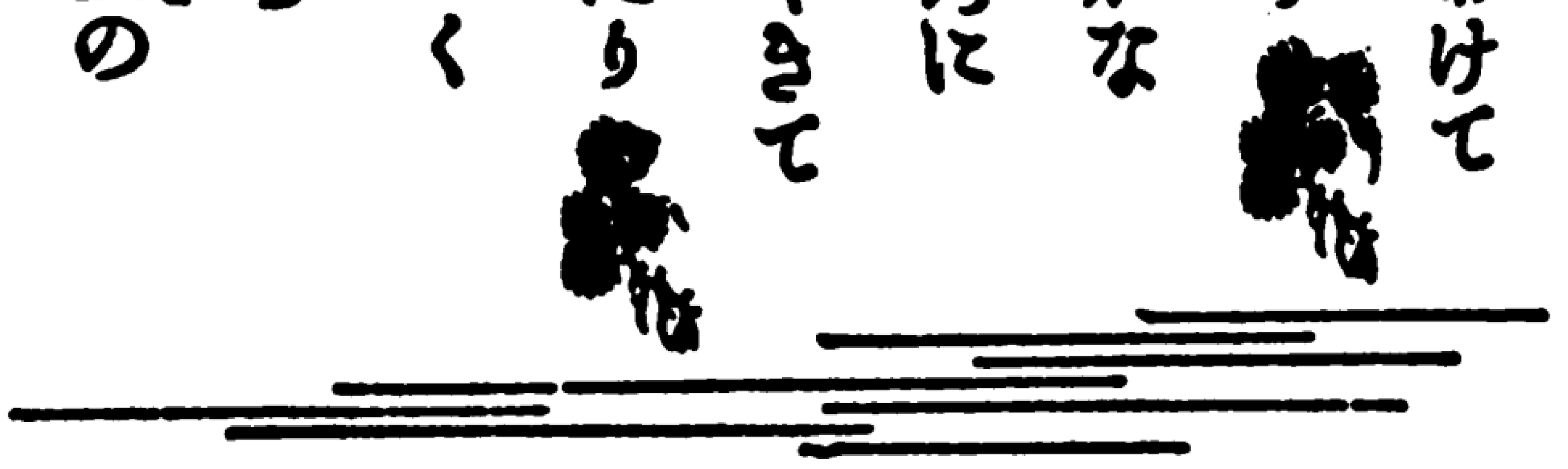
小舎人も力添へけり小松引　神戸　足立ゑい子
うしろ手に閉る折戸や梅の花　同　足立あさ子
煙たつ須磨の小家や初日出　名古屋　中村濱子
初雪や炬燵の上の七部集　越後　水野やすゑ子
南縁や梅一輪のかへり咲き　備後　小林つれ子
明月や玉ちりはめぬ波の上　千葉　中川千鶴子
正月や笑はぬ人の顔憎し　能登　栗原菫子
霜ふりや菊も小菊の捨て作り　備後　杉原衣子

凩の夜半や牛鳴く驛隣　長門　郁田眞郁子
燃え立ちし櫨咲噴や吾が句おくれたり
暮惜む蚊や小春の山の影
五山の鐘高さ餘音の落葉哉　岩代　岩野常子
木枯らしの霜吹きみだす野の小橋　淡路　湖東すみれ子
いづかたの音もかなしき砧かな　上原のぶ子
鳥なくや風の前山うしろ山　下野　士屋藤作子
まゝことに餘念なき子や菊日より　東京　高橋雪子
初鶏の聲朗かに明けにけり　横須賀　柏原みな子
初雪ゝ二の字におらぬ靴のあと　越後　松永紫子
將軍の馬立つる野や厂の聲　常陸　岡田万子
紅葉見の秋冷たし山の雨
やゝ寒し壁にかけたる虫の籠
鐘の音に古寺見えて冬木立　東京　小島雛子
山茶花や女主人の琴指南　横須賀　高橋つれ子
小春日の町打廻る役者哉
笹の葉に花も咲きけり三ヶ日
八千代ふる道の砂子の初日の出　相模　服部登代子
大暑や其口紅のむつかしき　同　齋藤松代子
若水や雪ふりかゝる小提灯　同　飯沼なか子
福引やゆづりあふ子の睦ましき　下野　士屋福生子
凩に落葉かぶるや小須磨　兵庫　梶原京子

元旦

中山幸子

あきらけく治まる御代のとしあけて
　千代田の松の枝もならさず
日のみはた軒端に立てゝ祝ふかな
　みやこも鄙もひとつこゝろに
今ぞいづる年のはつ日のかゝやきて
　千代田の宮ににほひそめたり
としあけて千代田の松に聲たかく
　君が代うたふ鶴のひとむら
ほの〴〵とあけ初にけりあら玉の
　としのはつ日はいまのぼるらし



女鑑投稿規定

投稿はすべて婦人に限り、〆切は毎月五日と改め翌月の本誌に掲載す、但し俳句は選者の都合により爾後締切期日を掲載前々月末日迄とす。兼題和歌の甲乙、短文、新體詩、兼題外の短歌俳句それ〳〵別の用紙に認められたく、又同じ用紙に二人またはそれ以上の名を並べることなきやうに願ひたし。

短文、新體詩の當選者には各天賞二圓、地賞一圓人賞五十錢秀逸繪葉書を呈す。

兼題和歌、雜題和歌、俳句の當選者には各天一圓地五十錢、人三十錢秀逸繪葉書を呈す。

●和歌兼題

二月（柳　春海）

三月（土筆　春月）

定價

一冊	前金	貳拾錢
三冊	前金	五拾七錢
六冊	前金	壹圓拾錢
拾貳冊	前金	貳圓拾錢

全國郵送無料

廣告料　五號活字一字廿三字詰

	四半頁（十六行）	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	三十五圓
一等	六圓五十錢	十一圓	二十圓
二等	五圓	九圓	十六圓
並等	四圓	七圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御記ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十年十二月廿八日印刷
明治四十一年一月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社
右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　橋本忠次郎
印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　守岡功

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社
振替貯金口座番號　壹壹七八番
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

東京高等師範學校教授 文學士 松本孝次郎著

家庭に於ける兒童教育

總クロース 菊版二百頁 定價五拾五錢 郵稅八錢

本書は**兒童教育專攻家**として教育界に名聲隱なき著者が多年研究せられたる**學說**と**實驗**とに基き**實地家庭**に行ひ得らるゝやう極めて**平易且切實**に談話體を以て**兒童教育法**を說述せられたる者にして世にありふれたる家庭教育書類と全く其の**選**を**異**にせり而も何人にも解り易く容易に**育兒**の**妙訣**を了得するを得べしされば世の父母たる人は子女將來の爲**是非熟讀**せざる可らざるものなり

此書は亦**兒童教育**の任にある**學校教師等**には必缺く可らざる**良參考書**なり

重要目次
◉第一家庭に於ける德育 ◉第二家庭に於て起り易き弊害 ◉第三兒童の賞罰 ◉第四遊戲の價値
◉第五兒童文學 ◉第六兒童と自立心 ◉第七感情教育 ◉第八家庭と園藝 ◉第九兒童と書籍
◉第十兒童と圖畫 ◉第十一靑年教育の注意 ◉第十二男女の兒童 ◉第十三小兒室の構造及設備

發行所 東京市京橋區築地二丁目 電話新橋八八、二六九三 株式會社 **國光社**

關西大賣捌 大阪市南本町 **積文社**

細川十州先生序文　三輪田眞佐子刀自著

女子の本分

第二十三版

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹冊定價金廿五錢郵稅金六錢

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 電話新橋二六九三番 株式會社國光社

新刊

侯爵黒田長成君題字　子爵小笠原長生君題字

清國欽差大臣李家駒君題字　法學博士天野爲之君序文

清國 唐芸洲先生原著　日本 百東持中先生譯解

日清兩國民の往來交通日を追うて頻繁を加ふる今日に在りて兩國民間書信贈答の最急要事たるは言を待たざる所なり然るに其の作例に供すべき良好の文範に乏きを以て相互に意思を通ずること能はざるを憾みとせり本書は斯道に精通せる百東先生が清國の名家唐芸洲氏の著したる日用の書簡文を家書、貿易、問候、請託、求懇、短札、閨閣慶、慰に部別し別に契約成規の部を加へ其の語には逐一字解を附し其意義を本邦日用の通俗文に譯し短篇毎句相對照して作文法を了得せしむる様懇切に說述せられたるものなり故に本邦人の清文を學ぶにも清國人の邦文を學ぶにも兩ながら適當なるを以て兩國學生の必讀を要する資典たるのみならず善隣の交誼を竭さむと欲する士人も亦必ず座右に備へざるべからず

日清對照 通俗文範

總クロース金文字入美裝　全一册　定價金壹圓　郵稅金八錢

邇値日東中華竭善隣之誼。觀光肄業之士。往來益繁。絡繹加織。祗日人不曉華言華人不解日文。俱憾不能通信達意。百東居恒研鑽華文。玆將唐芸之尺牘一百數十篇、繙譯日文。精解字句。其體裁。則爲家書、貿易、問候、請託、求懇、短札、閨閣、慶慰之部門、加以契約成規數篇、每篇每句交照。俾易了其義。故日人欲習華言。華人欲學日文 則洵爲入門之捷徑不啻便初學。老成耆宿。亦可以資考證矣。

目次

●家書類拾九●貿易類貳拾四●問候類拾七●請託類拾壹●求懇類拾貳●短札類貳拾六●閨閣類拾●慶慰類拾五●附錄契約成規等數篇

好評

發行所 東京京橋區築地二丁目 振替貯金口座一一七八 株式會社 國光社

關西發賣所 大阪市東區北久太郎町 合資會社 積文社


THE BEST POCKET MEDICINE
SEIKAIGAN



女鑑

明治四十一年一月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可　第拾八年第一號

大日本淑女學會

會員募集

講義録は何時にても一號より送る

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ケ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい體裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は弐ケ年完結とす

◎詳しい規則書は申越次第差上げます

◎東京神田駿河臺（電話本局三千四番）大日本淑女學會

東京築地株式會社國光社印刷